

山の人生

柳田国男

青空文庫

自序

山の人生と題する短い研究を、昨年『朝日グラフ』に連載した時には、一番親切だと思つた友人の批評が、面白そ�だがよく解らぬというのであつた。ああして胡麻ごまかすのだろうという類の酷評も、少しはあつたように感じられた。もちろん甚だむつかしくして、明めいせき晰に書いてみようもないのではあつたが、もしまだ出さなかつた材料を出し、簡略に失した説明を少し詳しくしてみたら、あれほどにはあるまいというのが、この書の刊行にあせつた眞実の動機であつた。ところが書いているうちに、自分にも一層解釈しにくくなつた点が現れたと同時に、二十年も前から考えていた問題なるにもかかわらず、今になつて突然として心づくようなことも大分あつた。従つてこの一書の、自分の書齋生活の記念としての価値は少し加わつたが、いよいよ以て前に作つた荒筋の間々へ、切れ切れの追加をする方法の、不適当であることが顯著もつになつた。しかしこれを書き改めるがために費すべき時間は、もうここにはないのである。そのうえに資料の新供給を外部の同情者に仰ぐた

めにも、一応はこの形をもつて世に問う必要があるのである。なるほどこの本には賛否の意見を学者に求めるだけの、纏まつた結論というものはないかも知れぬが、それでも自分たち一派の主張として、新しい知識を求めることが学問であることと、これを求める手段には、これまで一向に人に顧みられなかつた方面が多々であつて、それに今われわれが手を着けているのだということと、天然の現象の最も大切な一部分、すなわち同胞国民の多数者の数千年間の行為と感想と経験とが、かつて観察し記録しました攻究せられたかったのは不当だということと、今後の社会改造の準備にはそれが痛切に必要であるといふことは、少なくとも実地をもつてこれを例証しているつもりである。学問をもつて文雅の士の修養とし、ないしは職業搜索の方便と解して怪まなかつた人々は、このいわゆる小題大做たいさくに對して果していかなる態度を取るであろうか。それも問題でありまた現象である故に、最も精細に観測してみようと思う。

(大正十五年十月)

一 山に埋もれたる人生あること

今では記憶している者が、私の外には一人もあるまい。三十年あまり前、世間のひどく不景氣であった年に、西美濃みのの山の中で炭を焼く五十ばかりの男が、子供を二人まで、鉄まさかりで研きり殺したことがあつた。

女房はとくに死んで、あとには十三になる男の子が一人あつた。そこへどうした事情であつたか、同じ歳くらいの小娘を貰もらつてきて、山の炭焼小屋で一緒に育てていた。その子たちの名前はもう私も忘れてしまつた。何としても炭は売れず、何度も里さとへ降りても、いつも一合の米も手に入らなかつた。最後の日にも空手で戻からてってきて、飢えきつている小さい者の顔を見るのがつらさに、すつと小屋の奥へ入つて昼寝をしてしまつた。

眼がさめて見ると、小屋の口一ぱいに夕日がさしていた。秋の末の事であつたという。二人の子供がその日当りのところにしやがんで、頻りに何かしてるので、傍へ行つて見たら一生懸命に仕事に使う大きな斧おのを磨いていた。阿爺おとう、これでわしたちを殺してくれといつたそうである。そうして入口の材木を枕にして、二人ながら仰向あおむけに寝たそうである。

それを見るとくらくらとして、前後の考えもなく一人の首を打ち落してしまった。それで自分は死ぬことができなくて、やがて捕えられて牢に入れられた。

この親爺おやじがもう六十近くなつてから、特赦を受けて世の中へ出てきたのである。そうしてそれからどうなつたか、すぐにまた分らなくなつてしまつた。私は仔細しきいあつてただ一度、この一件書類を読んで見たことがあるが、今はすでにあの偉大なる人間苦の記録も、どこかの長持ながもちの底で蝕むしばみ朽くちつつあるであろう。

また同じ頃、美濃とは遙かに隔たつた九州の或る町の囚獄に、謀殺罪で十二年の刑に服していた三十あまりの女性が、同じような悲しい運命のもとに活いいていた。ある山奥の村に生まれ、男を持つたが親たちが許さぬので逃げた。子供ができる後に生活が苦しくなり、恥を忍んで郷里に還かえつてみると、身寄りの者は知らぬうちに死んでいて、笑い嘲あざける人ばかり多かつた。すぐすごと再び浮世に出て行こうとしたが、男の方は病身者で、とても働ける見込みはなかつた。

大きな滝の上の小路を、親子三人で通るときに、もう死のうじやないかと、三人の身体を、帶で一つに縛りつけて、高い樹きの隙間すきまから、淵を日がけて飛びこんだ。数時間ののち

に、女房が自然と正気に復つた時には、夫も死ねなかつたものとみえて、濡れた衣服で岸に上つて、傍の老樹の枝に首を吊つて自ら縊れており、赤ん坊は滝壺の上の梢に引懸つて死んでいたという話である。

こうして女一人だけが、意味もなしに生き残つてしまつた。死ぬ考えもない子を殺したから謀殺で、それでも十二年までの宥恕があつたのである。このあわれな女も牢を出でから、すでに年久しく消息が絶えている。多分はどこかの村の隅に、まだ抜け殻のような存在を続けていることであろう。

我々が空想で描いて見る世界よりも、隠れた現実の方が遙かに物深い。また我々を考えしめる。これは今自分の説こうとする問題と直接の関係はないのだが、こんな機会でないと思い出すこともなく、また何ひとつ耳を貸そとはしまいかから、序文の代りに書き残して置くのである。

二 人間必ずしも住家を持たざること

黙つて山へ入つて還つて来なかつた人間の数も、なかなか少ないものではないようであ

る。十二三年前に、尾張瀬戸町にある感化院に、不思議な身元の少年が二人まで入つていった。その一人は例のサンカの児^こで、相州の足^{あしがら}柄^すで親に棄てられ、甲州から木曾^{きそ}の山を通つて、名古屋まで警察の保護を受けることになった。

今一人の少年はまる三年の間、父とただ一人で深山の中に住んでいた。どうして出てきたのかは、この話をした二宮徳君も知らなかつたが、とにかくに三年の間は、火というものを用いなかつたと語つたそうである。食物はことごとく生^{なま}で食べた。小さな弓を造つて鳥や魚を射て捕えることを、父から教えられた。

春が来ると、いろいろの樹の芽を摘んでそのまま食べ、冬は草の根を掘つて食べたが、その中には至つて味の佳いものもあり、年中食物にはいささかの不自由もしなかつた。衣服は寒くなると小さな獸の皮に、木の葉などを綴^{つづ}つて着たという。

ただ一つ難儀であったのは、冬の雨雪の時であつた。岩の窟^{くぼ}みや大木のうつろの中に隠れていても、火がないために非常に辛かつた。そこでこういう場合のために、川の岸にあるカワヤナギの類の、鬚^{ひげね}根^{ふとん}のきわめて多い樹木を抜いてきて、その根をよく水で洗い、それを寄せ集めて蒲団のかわりにしたそうである。

話が又聞^{またぎ}きで、これ以上の事は何も分らない。この事を聴いた時には、すぐにも瀬戸へ

出かけて、も少し前後の様子を尋ねたいと思つたが、何分にも暇がなかつた。かの感化院には記録でも残つてはいないであろうか。この少年がいろいろの身の上話をしたということだが、何かよくよくの理由があつて、彼の父も中年から、山に入つてこんな生活をしたものと思われる。

サンカと称する者の生活については、永い間にいろいろな話を聴いている。我々平地の住民との一番大きな相違は、穀物果樹家畜を当てにしておらぬ点、次には定まつた場処に家のないという点であるかと思う。山野自然の産物を利用する技術が事のほか発達していったようであるが、その多くは話としても我々には伝わつておらぬ。

冬になると暖かい海辺の砂浜などに出てくるのから察すると、彼らの夏の住居は山の中らしい。伊豆へは奥州から、遠州へは信濃しなのから、伊勢の海岸へは飛騨ひだの奥から、寒い季節にばかり出てくるといふことも聞いたが、サンカの社会には特別の交通路があつて、渓の中腹や林の片端かたはし、堤つつみの外などの人に逢わぬところを縫うている故に、移動の跡が明らかでないものである。

磐城いわきの相馬そうま地方などでは、彼らをテンバと呼んでいる。山の中腹の南に面した処に、い

くつかの岩屋がある。秋もやや末になつて、里の人たちが朝起きて山の方を見ると、この岩屋から細々と煙が揚がつている。ああもうテンバがきているなどという中に、子を負うた女がささらや竹籠たけかごを売りにくる。箕などの損じたのを引き受けて、山の岩屋に持つて帰つて修繕してくる。

土地の人とはまるまる疎遠そえんでもなかつた。若狭・越前などでは河原に風呂敷油紙の小屋を掛けてしまらく住み、断りをいつてその辺の竹や藤葛ふじかずらを伐つてわずかの工作をした。河川改修が河原を整理してしまつてからは、金を払つて材料の竹を買う者さえあつた。しかも土着する者は至つて稀で、多くは程なくいすれへか去つてしまふ。路の辻などに樹の枝または竹をさし、しるしを残して行く者は彼らであつた。小枝に由つて先へ行つた者の数や方角を、後から来る者に知らしめる符号があるらしい。

仲間から出て常人に交わる者、ことに素性と内情とを談ることを甚だしく悪むが、外から紛れてきてサンカの群に投げる常人は次第に多いようである。そうでなくとも人に問われると、遠い国郡を名乗るのが普通で、その身の上話から真の身元を知ることはむつかしい。大体においおい世間なみの衣食を愛好する風を生じ、中には町に入つて混同してしまおうとする者も多くなつた。それが正業を得にくい故に、おりおりは悪いこともするのだ

が、彼らの悪事は法外に荒いために、かえつて容易にサンカの所業なることが知れるとう。

しかも世の中とこれだけの妥協すらも敢てせぬ者が、まだ少しは残っているかと思われた。大正四年の京都の御大典^{ごたいでん}の時は、諸国から出てきた拝観人で、街道も宿屋も一杯になつた。十一月七日の車駕御到着^{しゃがうしやく}の日などは、雲もない青空に日がよく照つて、御苑^{ぎょえん}も大通りも早天から、人をもつて埋めてしまつたのに、なお遠く若王子^{にゃくおうじ}の山の松林の中腹を望むと、一筋二筋の白い煙が細々と立つていた。ははあサンカが話をしているなと思うようであつた。もちろん彼らはわざとそうするのではなかつた。

三 凡人遁世のこと

かつて羽前の尾花沢^{おばなざわ}附近において、一人の土木の工夫が、道を迷うて山の奥に入り人の住みそうにもない谷底に、はからず親子三人の一家族を見たことがある。これは粗末ながら小屋を建てて住んではいたが、三人ともに丸裸^{まるはだか}であつたという。

女房がひどく人を懷しがつて、いろいろと工夫に向かつて里の話を尋ねた。なんでもそ

の亭主といふ者は、世の中に対しよほど大きな憤懣があつたらしく、再び平地へは下らぬという決心をして、こんな山の中へ入ってきたのだといった。

工夫は一旦その処を立ち去つたのち、再び引き返して同じ小屋に行つてみると、女房が彼と話をしたのを責めるといって、縛り上げて折檻をしているところであつたので、もう詳しい話も聞きえず、早々に帰つてきて、その後の事は一切不明になつてゐる。

この話は山方石之助君から十数年前に聽いた。山に住む者の無口になり、一見無愛想になつてしまふことは、多くの人が知つてゐる。必ずしも世を憤つて去つた者でなくとも、木曾の山奥で岩魚を釣つてゐる親爺おやじでも、たまたま里の人に出くわしても何の好奇心もなく見向きもせずに路を横ぎつて行くことがある。文字に現わせない寂寥せきばくの威圧が、久しうして人の心理を変化せしめるることは想像することができる。

そうしてこんな人にわずかな思索力、ないしはわずかな信心があれば、すなわち行ぎょうじ者やであり、或いは仙人せんにんであり得るかと思われる。また天狗てんぐと称する山の靈が眼の色怖おそろしくやや氣むつかしくかつ意地悪いものと考えられているのも、一部分はこの種山中の人に逢つた経験が、根をなしているのかも知れぬ。

近世の武人などは、主君長上に対して不満のある場合に、無謀に生命を軽んじ死を急ぎ、さらば討死をして殿様に御損を掛け申すべしと、いつたような話が多かつた。戦乱の打ち続いた時世としては、それも自然なる決意でありえたが、人間の死ぬ機会はそう常にあつたわけでもない。死なずに世の中に背くという方法は必ずしも時節を待つという趣意でなくとも、やはり山寺にでも入つて法師とともに生活するのほかはなかつた。のちにはそれが出離の因縁とし、菩提の種と名づけて悦喜した者もあるが、古来の遁世者の全部もつて、仏道勝利の跡と見るのは当をえないと思う。

その上に山に入り旅に出れば、必ずそこに頃合の御寺があるというわけでもなかつた。旅僧の生活をしようと思えば、少しあは学問なり智慧なりがなければならなかつた。なんの頼むところもない弱い人間の、ただいかにしても以前の群とともにおられぬ者には、死ぬか今一つは山に入るという方法しかなかつた。従つて生活の全く単調であつた前代の田舎には、存外に跡の少しも残らぬ遁世^{とんせい}が多かつたはずで、後世の我々にこそこれは珍しいが、じつは昔は普通の生存の一様式であつたと思う。

それだけならよいが、人にはなおこれという理由がなくてふらふらと山に入つて行く癖のようなものがあつた。少なくとも今日の学問と推理だけでは説明することのできぬ人間

の消滅、ことにはこの世の執着^{しゆうじやく}の多そうな若い人たちが、突如として山野に紛れこんでしまつて、何をしているかも知れなくなることがあつた。自分がこの小さな書物で説いて見たいと思うのは主としてこうした方面的の出来事である。これが遠い近いいろいろの民族の中にもおりおは経験せられる現象であるのか。はたまた日本人にばかり特に、かつ頻繁^{ひんぱん}に繰り返されねばならぬ事情があつたのか。それすらも現在はなお明瞭^{めいりょう}でないのである。しかも我々の間には言わず語らず、時代時代に行われていた解釈があつた。それがある程度まで人の平常の行為と考え方とを、左右していたことは立証することができるのである。我々の親たちの信仰生活にも、これと交渉する部分が若干はあつた。しかも結局は今なお不可思議である以上、将来いざれかの学問がこの問題を管轄すべきことは確かである。棄てて顧みられなかつたのはむしろ不当であると思う。

四 稀に再び山より還ること

これは以前新渡戸博士から聴いたことで、やはり少しも作り事らしくない話である。陸中二戸郡の深山で、獵人が獵に入つて野宿をしていくと、不意に奥から出てきた人があつ

た。

よく見ると数年前に、行方不明になつていた村の小学教員であった。ふとした事から山へ入りたくなつて家を飛び出し、まるきり平地の人とちがつた生活をして、ほとんど仙人になりかけていたのだが、或る時この辺でマタギの者の昼弁当を見つけて喰つたところが急に穀物の味が恋しくなつて、次第に山の中に住むことがいやになり、人が懐かしくてとうとう出てきたといったそうである。それから里に戻つて如何したか。その後の様子は今ではもう何ひとにも問うことができぬ。

マタギは東北人およびアイヌの語で、獵人のことであるが、奥羽の山村には別に小さな部落をなして、狩猟本位の古風な生活をしている者にこの名がある。例えば十和田の湖水から南祖坊なんそぼうに逐おわされてきて、秋田の八郎潟はちろうがたの主ぬしになつてているという八郎おとこなども、大蛇になる前は国境の山の、マタギ村の住民であった。

マタギは冬分は山に入つて、雪の中を幾日となく旅行し、熊を捕ればその肉を食い、皮と熊胆くまぎもを附近の里へ持つて出て、穀物に交易してまた山の小屋へ還る。時には峰づたいに上州・信州の辺まで、下りてくることがあるという。

こんな連中でも用が済めばわが村へ戻り、また山の中でも火を焚たき米を煮て食うのに、

教員までもしたという人が、友もなくして何年かの間、このような忍苦の生活をなしえたのは、少なくとも精神の異状であつた。しかもそれが単なる偶発の事件でなく、遠く離れた国中の山村に、往々にして聞くところの不思議であつたのである。

マタギの根原に関しては、現在まだ何ぴとも説明を下した者はないが、岩手・秋田・青森の諸県において、平地に住む農民たちが、ややこれを異種族視していたことは確かである。津軽の人ますみが百二三十年前に書いた『奥民図彙』には、一二彼らが奇習を記し、菅江真澄の『遊覧記』の中にも、北秋田の山村のマタギの言葉には、犬をセタ、水をワツカ、大きいをポロというの類、アイヌの单語のたくさんに用いられていることを説いてある。

もちろんこれに由つて彼らをアイヌの血筋と見ることは早計である。彼らの平地人との交通には、言語風習その他になんの障碍もなかつたのみならず、少なくとも近世においては、彼らも村にいる限りは附近の地を耕し、一方にはまた農民も山家に住む者は、傍ら狩猟に因つて生計を補うた故に、名称以外には明白に二者を差別すべきものはないのである。

ただ関東以西には猟を主業とする者が、一部落をなすほどに多く集まつておらぬに反し

て奥羽の果はてに行くとマタギの村という者がおりおりある。熊野・高野を始めとして靈山開基の口碑こうひには獵師が案内をしたといい、または地を献上したという例少なからず、それを目して異人仙人と称してて、通例の農夫はかつてこの物語に参与しておらぬのを見ると、彼ら山民の土着はづきが一期だけ早かつたか、または土着の条件が後世普通の耕作者とは、別であつたかということだけは察せられる。

しかも猶に關する彼らの儀式、また信仰には特殊なるものが多い。万次万三郎の兄弟が、山の神を助けて神敵を退治し、褒美ほうびに狩獵の作法を授けられたなどという古伝もその一例である。東北ではシナの木のことをマダといい、山民は多くその樹皮を利用する。マタギ村でも盛んにこれを採取した周囲にこれを栽培するが、そのマダとは関係がないといつてはいる。或いは二股ふたまたの木の枝を杖つえにして、山中を行くような宗教上の習慣でもあつて、こんな名称を生じたのではないかとも思うが、彼ら自身は何と自ら呼ぶかを知らぬから、いまだこれを断定することができぬのである。

八郎という類の人人が山中に入り、奇魚を食つて身を蛇体に変じたという話は、広く分布しているいわゆる低級神話の類であるが、津軽・秋田で彼をマタギであつたと伝えたのは、何か考うべき理由があつたろうと思う。

五 女人の山に入る者多きこと

天野信景翁の『塩尻』には、尾州小木村の百姓の妻の、産後に発狂して山に入り、十八年を経てのち一たび戻ってきた者があつたことを伝えている。裸形にしてただ腰のまわりに、草の葉を纏うていたとある。山姥の話の通りであるが、しかも当時の事実譚であつた。

この女も或る獵人に逢つて、身の上話をしたという。飢を感じるままに始めは虫を捕つて喰つっていたが、それでは事足らぬように覚えて、のちには狐や狸、見るに隨い引裂いて食どし、次第に力づいて、寒いとも物ほしいとも思わぬようになつたと語る。一旦は昔の家に還つてみたが、身内の者までが元の自分であることを知らず、怖れて騒ぐのでせん方がもなく、再び山中の生活に復つてしまつたというのは哀れである。

明治の末頃にも、作州那岐山の麓、日本原の広戸の滝を中心として、処々に山姫が出没するという評判が高かつた。裸にして腰のまわりだけに檻襷を引き纏い、髪の毛は赤く眼は青くして光つていた。或る時も人里近くに現われ、木こりの小屋を覗いているところ

ろを見つかり、ついにそこの人夫どもに打ち殺された。しかるにそれをよく調べてみると、附近の村の女であつて、ずっと以前に発狂して、家出をしてしまつた者であることが分つた。

女にはもちろん不平や厭世(えんせい)のために、山に隠れるということがない。気が狂つた結果であることは、その挙動を見れば誰にでも分つた。羽後と津軽の境の田代岳(たしろだけ)の麓(ふもと)の村でも、若い女が山へ遁げて入ろうとするのを、近隣の者が多勢追いかけて、連れて戻ろうと引き留めているうちに、えらい力を出して振り切つて、走り込んでしまつたという話を狩野亨吉(うけたまわ)先生から承つたことがある。

山に走り込んだという里の女が、しばしば産後の発狂であつたことは、事によると非常に大切な問題の端緒(たんじょ)かも知れぬ。古来の日本の神社に従属した女性には、大神の指令を受けて神の御子を産み奉りし物語が多い。すなわち巫女(みこ)は若宮の御母なるが故に、ことに靈ある者として崇敬せられたことは、すこぶるキリスト教などの童貞受胎の信仰に似通うものがあつた。婦人の神経生理にもしかような変調を呈する傾向があつたとすれば、それは同時にまた種々の民族に一貫した宗教発生の一因子とも考えることを得る。しかしも

ちろん物のついでなどをもつて、軽々に取扱うべき問題ではないから、今は単に一二の類例を挙げて置くに止めるが、その一つは三百余年前に、因幡国にあつた話で、少し長たらしいが原文のままを抄出する。『雪窓夜話』の上巻に書いてある話である。

「寛永年中のこと也。^{なり} 安成久太夫^{やすなりきゅうだゆう} といふ武士あり。備前因幡國^{くにが}への時節にて、未だ^{いま} 居屋敷^{おる} も定まらず、鹿野^{かの}（今の気高郡鹿野町）の在に仮に住みけり。或夜山に入りけるに、月の光も薄く、木立も奥暗き岨陰より、何とも知らぬ者駆け出で、久太夫が連れたる犬を追掛け、遙かの谷に追落して、傍なる巖窟^{がんくつ}にかけ入りたり。久太夫不思議に思ひ、犬を呼返して其穴に追入れんとするに、犬怖れて入らざれば若党に命じてかの者を探り求めしむ。人のたけばかりなる猿の如きものなり。若党引出さんとするに、力強く爪尖^{つめが}りて、若党の手を搔破^{かきやぶ}りけるを、漸^{ようや}くに引出したり。久太夫葛^{かずら}を用ゐて之を縛り、村里へ引出し、燈をとぼして之を見るに髪長く膝に垂れ、面相全く女に似て、その荒れたること絵にかける夜叉の如し。何を尋ねても物言ふこと無く、只にこゝと打笑ふのみ也、食を与ふれども食はず水を与ふれば飲みたり。^{あまね} 遍く里人に尋ねれども、仔細^{しきい}を知る者無し。一村集まりて之を見物す。其中有^{その} 七十余の老農ありて言ふには、昔此村に産婦あり。俄かに狂氣して之を見物す。親族尋ね求むと雖、終に遇ふこと無しと言ひ伝へ駆け出でけるが、鷲峰^{しゅうぶ}山に入りたり。親族尋ね求むと雖、終に遇ふこと無しと言ひ伝へ

たり。其年暦を計るに凡そ百年に余れり。もしは此者このものにてもあらんかと也。久太夫速かに命を助け山に追ひ返しけるに、その走ること甚だ早し。其後又之を見る者無しといへり。

佐々木喜善君の報告に、今から三年ばかり前、陸中上閉伊郡附馬牛村の山中で三十歳前後の一人の女が、ほとんど裸体に近い服装に樹の皮などを纏いつけて、うろついていたのを村の男が見つけた。どこかの炭焼小屋からでも持つてきたものかこの辺でワツパビツと名づける山弁当の大きな曲げ物まげものを携え、その中にいろいろの虫類を入れていて、あるきながらむしやむしやと食べていたという。遠野の警察署へ連れてきたが、やはり平氣で蛙などを食つてているので係員も閉口した。その内に女が臍おぼろけ気な記憶から、ふと汽車の事を口にし、それからだんだんに生まれた家の模様、親たちの顔から名前を思い出し、ついには村の名までいうようになつたが、聴いて見ると和賀郡わが小山村こやまの者で七年前に家出をして山に入つたということがわかつた。やはり産後であつて、不意に山に入つたというのであつた。親を警察へ呼び出して連れて行かせたが、一時はこの町で非常な評判であつた。なお同じ佐々木君の話の中にこの附近の村の女の二十四五歳の者が、夫とともに山小屋に

入つていて、終日夫が遠くに出て働いている間、一人で小屋にいて発狂したことがあつた。のちに落着いてから様子を尋ねて見ると、或る時背の高い男が遣つてきて、それから急に山奥へ行きたくなつて、堪えられなかつたといつたそうである。

六 山の神に嫁入すということ

羽後の田代岳に駆け込んだという北秋田の村の娘は、その前から口癖のように、山の神様の処ところへお嫁入りするのだと、いつていたそうである。古来多くの新米しんまいの山姥やまうば、すなわちこれから自分の述べたいと思う山中の狂女の中には、何か今なお不明なる原因から、こういう錯覚を起こして、欣然きんぜんとして自ら進んで、こんな生活に入つた者が多かつたらしいのである。

そうすると我々が三輪式神話の残影と見てゐる童婚・蛇婚の国々の話の中にも、存外に起原の近世なるものがないとは言われぬ。例えば上州の榛名湖はるなこにおいては、美しい奥方は強いて供の者を帰して、しづしづと水の底に入つて往つたと伝え、美濃の夜叉ヶ池の夜叉やしゃ御前ごぜんは、父母の泣いて留めるのも聽かず、あたら十六の花嫁姿で、ひとり深山の水の神にと

ついだといつてはいる。古い昔の信仰の影響か、または神話が本来かくのごとくにして、發生すべきものであつたのか、とにかくにわが民族のこれが一つの不思議なる癖であつた。

近ごろ世に出た『まぼろしの島より』という一英人の書翰集しょかんしゅうに、南太平洋のニウヘブライズ島の或る農場において、一夜群衆のわめき声とともに、頻に鉄砲の音がするので、驚いて飛び出して見ると、若い一人の土人が魔神に攫つかまれて、森の中へ牽ひいて行かれるところであつた。魔神の姿はもとより何びとも見えないが、その青年が右の手を前へ出して踏止ふみとどまろうと身をもがく形は、確かに捕われた者の様子であつた。他の土人たちは声で嚇おどし、かつ鉄砲をその前後の空間に打ち掛けて、悪魔を追い攘はらおうとしたがついに効を奏せず、捕われた者は茂みに隠れてしまつた。

翌朝その青年は正気に復して、戻つて常のごとく働こうとしたけれども、仲間の者は彼が魔神と何か契約をしてきたものと疑い、畏れ憎んで近づかず、その晩のうちに毒殺してしまつたと記している。わが邦くにで狐や狸に憑かれたという者が、その獸らしい拳動をして、傍の者を信ぜしめるのと、最もよく似た精神病の兆候である。

猿の婿入むこいりという昔話がある。どこの田舎に行つてもあまり有名であるために、かえつ

て子供までが顧みようとせぬようになつたが、じつは日本にばかり特別によく成育した話で、しかも最初いかなる事情から、こんな珍しい話の種が芽をくむに至つたかは、説明しえた人がないのである。三人ある娘の三番目がことに発明で、一旦は猿に連れられて山中に入つて行くが、のちに才智をもつて相手を自滅させ、安全に親の家に戻つてくることになつてゐるのは、もとは明らかに魔界征服譚の一つであつた。今でも落語家の持つている王子の狐、或いは天狗の羽団扇を欺き奪う話などと同様に、だんだんに敵の愚かさが誇張せられて、聴く人の高笑いを催さずには置かなかつたのは、武勇勝利の物語に、負けて遁げた者の弱腰を説くのと、目的は一つであつて、つまりは猿の婿も怖るに足らずといふ教育の、かつて必要であつたことを意味している。餅を搗いて臼ながら猿に負わせたり、臼を卸さずに藤の花を折らせたり、いろいろと無理な策略をもつて相手を危地に陥れた話であるが、地方によつては瓢箪と針千本とを、親から貰い受けて出て行つたことになつてゐるのは、すなわち蛇神退治の古くからの様式で、猿の方にはむしろ不用なことであつた。変化が混同かいずれにしても、竜蛇の婿入の数多い諸国の例がこれと系統の近かつたことだけは察せられるので、ただ山城蟹籠寺の縁起などにおいては、外部の救援が必要であつたに反して、こちらはかよわい小娘の智謀一つで、よく自ら葛藤を脱しえた点

を、異なれりとするのみである。

大和の三輪の緒環の糸、それから遠く運ばれたらしい豊後の大神氏の花の本の少女の話は、土地とわざかな固有名詞とをかえて、今でも全国の隅々まで行われていて終始一貫した発見の糸口は、衣裳の端に刺した一本の針であつた。ところが後世になるにつれて、勝利は次第に人間の方に歸し蛇の婿は刺された針の鉄氣に制せられ、苦しんで死んだことになつていて例が多い。糸筋を手繰つて竊かに洞穴の口に近づいて立聴きする。親子らしい大蛇がひそひそと話をしている。だから留めるのに入間などに思いを掛けられた命を失うことになつたのだと一方がいうと、それでも種だけは残してきたから本望だと死なんとする者が答える。いや人間は賢いものだ、もし蓬と菖蒲の二種の草を煎じてそれで行水を使つたらどうすると、大切な秘密を洩してしまつたことにもなつていい。たつた一つの小さな昔話でも、だんだんに源を尋ねて行くと信仰の変化が窺われる。もとは単純に指令に服従して、怖しい神の妻たることに甘じたものが、のちにはこれを避けまたは遁れようとしたことが明らかに見えるのである。しかも或いは婚姻慣習の沿革と伴うものかも知らぬが、猿の婿入の話には後代の蛇婿入譚とともに、娘の父親の約諾ということが、一つの要件をなしている。そうでなくとも堂々と押しかけてきて一門を承知さ

せたことになつていて、大昔の神々のごとく夜陰密かに通つてきて後に露顕したものではなかつた。そうして天下晴れて連れて還つたことに話はできている。すなわち山と人界との縁組は稀有というのみで、想像しえられぬほどの事件ではなかつたが、おいおいにこれを忌み憎むの念が普通の社会には強くなり、百方手段を講じてその弊害を防ぎつつ、なお十分なる効果を挙げえないうちに、国は次第に近世の黎明になつたのである。

狒々^{ひひ}という大猿が日本にも住むということはもう信ずることがむつかしくなつた。出逢あで見た見たという話は記事にも画にも残つてゐるものが多いが、注意してみると、まるまる幻覚の產物でなければ、必ずただの老猿を誤つてそう呼んだまでである。従つて岩見重太郎、もしくは『今昔物語』のちゅうさんこうやのごとき例は、すこしでも動物学の知識を損益するところはないわけである。しかも昔話にまでなつて、このように弘く伝わつてゐるのを見ると、猿の婿入は恐らくある遠い時代の現実の畏怖^{いふ}であった。少なくとも女性失踪^{しつそう}の不思議に対する、世間普通の解釈であつた。どうしてそんな愚かしい事が、信じえられたかと思うようであるが、他に真相の説明がつかなかつた時代だから仕方がない。一種の精神病^{うがごとき}がごとき漠然^{ぼくぜん}たる理由では、今日でもまだ承知する者は少ない。正月と霜月^{しもつき}との月初めの或る日を、山の神の樹かぞえなどと称して、戒めて

山に入らぬ風習は現に行われている。もしこの禁を犯せばいかなる制裁があるかと問えば、^{かぞ}算え込まれて樹になつてしまふというもあれば、山の神に連れて行かれるなどともいつているところがある。その山の神様はもとより神官の説くがごとき、^{おかみ}大山祇命ではなかつたのである。^{おおかみ}狼を山神の姿と見た言い伝えも多いが、猿はその一段の人間らしさから、かつては信仰の対象となつていた証拠もいろいろある。中世なんらか特別の理由があつて、その地位は動搖したものらしい。その歴史を今少し考えて見ない以上、多くの昔話の意味がはつきりとせぬのも、やむをえざる次第である。

七 町にも不思議なる迷子ありしこと

北国筋の或る大都会などは、ことに迷子というものが多かつた。二十年ほど前までは、冬になると一晩としていわゆる鉦太鼓の音を聞かぬ晩はないくらいであつたという。山が近くて天狗の多い土地だから、と説明せられていたようである。

東京でも以前はよく子供がいなくなつた。この場合には町内の衆が、各一個の提灯^{ちようちん}を携えて集まり来たり、夜どおし大声で喚んで歩くのが、義理でもありまた慣例でもあつ

た。関東では一般に、まい子のまい子の何松^{なにまつ}やいと繰り返すのが普通であつたが、上方辺^{たへん}では「かやせ、もどせ」と、ややゆるりとした悲しい声で唱^{とな}えてあるいた。子供にもせよ紛失したもの尋ねるのに、鉦太鼓でさがすというはじつは変なことだが、それは本来搜索ではなくして、奪還であつたから仕方がない。

もし迷子がただの迷子であるならば、こんな事をしても無益なかわりに、たいていはその日その夜のうちに消息が判明する。二日も三日も捜しはあるいて、いかにしても見つからぬというのが神隠^{かみかく}しで、これに対するは右のごとき別種の手段が、始めて必要であつたのだが、前代の人たちは久しい間の経験によつて、子供がいなくなれば最初からこれを神隠しと推定して、それに相応する処置を執つたものである。

神隠しをする神はいかなる悪い神であつたか。近世人の思想においては、必ずしもごく精確に知られてはなかつた。通例は天狗・狗賓^{ぐひん}というのが最も有力なる嫌疑者^{けんぎしゃ}であつたが、それはこのように無造作なる示威運動に脅かされて、取つた児をまた返すような氣の弱い魔物ともじつは考えられていなかつた。

狐もまた往々にして子供を取つて隠す者と、考えられている地方があつた。そういう地方では狐のわざと想像しつつも、やはり盛んに鉦太鼓を叩^{たた}いたのであるが、今では單に狐

はしばらくの間、人を騙し迷わすだけとして、これを神隠しの中にはもう算えない田舎がだんだんに多くなつて行くかと思う。近年の狐の悪戯はたいていは高が知っていた。誰かが行き合させて大声を出し、または背中を一つ打つたら正気がついたという風で、若い衆やよい年輩の親爺までが、夜どおし近所の人々に心配をかけ、朝になつて見ると土手の陰や粟畠のまん中に、きよどんとして立つていたなどということも、またすでに昔話の部類に編入せられようとしているのである。

しかし寂しい在所の村はずれ、川端、森や古塚の近くなどには、今でも「良くない処だ」というところがおりおりあつて、その中には悪い狐がいるという噂をするものも少なくはない。神隠しの被害は普通に人一代の記憶のうちに、三回か五回かは必ず聴くところで、前後の状況は常にほぼ一様であつた。従つて捜索隊の手配路順にも、ほぼ旧来のきまりがあり、事件の顛末も人の名だけが、時々新しくなるばかりで、各地各場合において、大した変化を見なかつたようである。

しかも経験の乏しい少年少女に取つては、これほど気味の悪い話はなかつた。私たちの村の小学校では、冬は子供が集まると、いつもこんな話ばかりをしていた。それでいて奇妙なことには、実際は狐につままれた者に、子供は至つて少なく、子供の迷子は多くは神

隠しの方であつた。

子供のいなくなる不思議には、おおよそ定まつた季節があつた。自分たちの幽かな記憶きぎでは秋の末から冬のかかりにも、この話があつたようと思うが、或いは誤つてているかも知れぬ。多くの地方では旧暦四月、蚕の上かいこじょう簇ぞくや麦苅入れの支度しだくに、農夫が氣を取られている時分が、一番あぶないようを考えられていた。これを簡明に高麦のころと名づけているところもある。つまりは麦が成長して容易に小児の姿を隠し、また山の獸などの畦あぜづたいに、里に近よるものも実際に多かつたのである。高麦のころに隠れん坊をすると、狸に騙だまされると豊後の奥ではいうそうだ。全くこの遊戯は不安心な遊戯で、大きな建物などの中ですらも、稀にはジエネヴィエバのごとき悲惨事があつた。まして郊野の間には物陰こうやが多過ぎた。それがまたこの戯れの永ながく行われた面白味おもしろみであつたろうが、幼い人たちが模倣を始めたより更に以前を想像してみると、忍術にんじゆつなどと起原の共通なる一種の信仰が潜んでいて、のち次第に面白い村の祭の式作法になつたものかと思う。

東京のような繁華の町中でも、夜分だけは隠れんぼはせぬことにしている。夜かくれんぼをすると鬼に連れて行かれる。または隠し婆かくばあさんに連れて行かれるといって、小児を戒

める親がまだ多い。村をあるいていて夏の夕方などに、児を喚ぶ女の金切声をよく聴くのは、夕飯以外に一つにはこの畏怖いふもあつたのだ。だから小学校で試みに尋ねてみても分るが、薄暮に外におりまたは隠れんぼをすることが何故に好くないか、小児はまだその理由を知つてゐる。福知山附近では晩に暗くなつてからかくれんぼをすると、隠し神さんに隠されるというそなだが、それを他の多くの地方では狸狐といい、または隠し婆さんなどともいうのである。隠し婆かくばばは古くは子取尼ことりあまなどともいつて、実際京都の町にもあつたことが、『園太曆』えんたいりやくの文和二年三月二十六日の条に出でている。取上げ婆の子取りとはちがつて、これは小児を盗んで殺すのを職業にしていたのである。なんの為にということは記してないが、近世に入つてからは血取ちとりとも油取あぶらとりとも名づけて、罪なき童児の血や油を、何かの用途に供するかのごとく想像し、近くは南京皿なんきんざらの染附そめつけに使うというがごとき、いわゆる纈纈城こうけちじょう式の風説が繰り返された。そうしてまだ全然の無根というところまで、突き留められてはいないのである。

しかし少なくともこの世評の大部分が、一種の伝統的不安であり、従つて話であることは時過ぎて始めてわかつた。例えば迷子が黙つて青い顔をして戻つてくると、生血を取られたからだと解して悲んだ者もあつたが、そんな方法のありえないことがもう分つて、だ

んだんにそうはいわなくなつた。秩父地方ちぢぶでは子供が行方不明になるのを、隠れ座頭かくざとうに連れて行かれたといい、またはヤドウカイに捕られたというそなだが、これなどは単純な誤解であつた。隠れ座頭ひろくは弘く奥羽・関東にわたつて、巖窟の奥に住む妖怪ようかいと信ぜられ、相州の津久井などでは踏唐臼ふみからうすの下に隠れているよにもいつていた。すなわち普通の人の眼に見えぬ社会の住民ではあつたのだが、これを座頭としたのは右のごとき地底の国を、隠れ里かくさとと名づけたのが元もとである。隠れ里本来は昔話の鼠ねずみの淨土じょうどなどのように、富貴具足の仙境せんかいであつて、いの穢れば家具を貸し金錢を授与したなどと、説くのが昔の世の通例であつたのを、人の信仰が変化したから、こんな恐ろしい怪物とさえ解せられた。多分は座頭の職業に若干の神秘分子が、伴うていた結果であろう。

それからヤドウカイはまたヤドウケと呼ぶ人もあつた。文字には夜道怪と書いて子取の名人のごとく伝えられるが、じつはただの人間の少し下品な者で、中世高野聖こうやひじりの名をもつて諸国を修行した法師すなわち是である。武州小川の大塚梧堂君の話では、夜道怪は見た者はないけれども、蓬髮弊衣ほうはつへいいの垢じみた人が、大きな荷物を背負うてあるくのを、まるで夜道怪のようだと土地ではいうから、大方おおかたそんな風態の者だろうとのことである。実際高野聖は行商か片商かたしょうばいで、いつも強力同様に何もかも背負うてあるいた。そう

して夕方には村の辻に立つて、ヤドウカと大きな声でわめき、誰も宿を貸しましょと言わぬ場合には、また次の村に向つて去つた。旅に摺れて掛引が多く、その上おりおりは法力を笠に着て、善人たちを脅かした故に、「高野聖に宿かすな、娘取られて恥かくな」などという、諺までもできたのである。だんだんこんな者が村に来なくなつてから、単に子供を嚇す想像上の害敵となつて永く残りその子供がまた成人して行くうちに、次第に新しい妖怪の一種にこれを算えるに至つたのは注意すべき現象だと思う。我々日本人の精神生活の進化には、こういう村里の隠し神のようなものまでが、取り残されていることはできなかつたのである。

八 今も少年の往々にして神に隠さるること

先頃も六つとかになる女の児が、神奈川県の横須賀から汽車に乗つてきて、東京駅の附近をうろついており、警察の手に保護せられた。大都のまん中では、もとより小児の親にはぐれる場合も多かつたろうけれども、幼小な子供が何びとも怪まれずに、こんなに遠くまできていたというは珍しい。故に昔の人もこれらの実例の中では、特に前後の事情の

不可思議なるものを迷子と名づけ、冒^{ぼう}浣^{とく}を忌まざる者は、これを神隠しとも呼んでいたのである。

村々の隣に遠く野山の多い地方では、取分けてこの類の神隠しが頻繁^{ひんぱん}で、哀れなることに隠された者の半数は、永遠に還^{かえ}つて来なかつた。私は以前盛んに旅行をしていたころ、力めて近代の地方の迷子の実例を、聞いて置こうとしたことがあつた。伊豆の松崎で十何年前にあつたのは、三日ほどしてから東の山の中腹に、一人で立つてゐるのを見つけだした。そこはもう何度となく、捜す者が通行したはずだのにと、のちのちまで土地の人があ不思議にした。なおそれよりも前に、上総の東金附近の村では、これも二三日してから山の中の薄^{すすき}の叢^{さむら}の中に、しゃがんでいたのをさがしだしたが、それから久しい間、抜け殻^{がら}のような少年であつたといふ。

珍しい例ほど永く記憶せられるのか、古い話には奇抜なるものが一層多い。親族^{きどう}が一心に祈祷^{きとう}をしていると、夜分雨戸にどんと当る物がある。明けて見るとその児が軒下にきて立つていた。或いはまた板葺^{いたぶ}き屋根の上に、どしんと物の落ちた響^{ひびき}がして、驚いて出てみたら、氣を失つてその児が横たわっていた、という話もある。もつとえらいのになると、二十年もしてから阿呆^{あほう}になつてひよつこりと出てきた。元の四つ身^{もとよみ}の着物を着たままで、

縫目が弾けて綻びていたなどと言い伝えた。もちろん精確なる記録は少なく、概して誇張した噂のみのようであつた。学問としての研究のためには、更に今後の観察を要するはもちらんである。

愛知県北設楽郡段嶺村大字豊邦字笠井島の某という十歳ばかりの少年が、明治四十年ごろの旧九月三十日、すなわち神送りの日の夕方に、家の者が白餅しろもちを造るのに忙しい最中、今まで土間にいたと思ったのが、わずかの間に見えなくなつた。最初は氣にもしなかつたが、神祭を済ましてもまだ姿が見えず、あちこちと見てあるいたが行方が知れぬので、とうとう近所隣までの大騒ぎとなつた。方々捜しあぐんで一旦家の者も内に入つてみると、不意におも屋の天井てんじょうの上に、どしんと何ものか落ちたような音がした。驚いて梯子はしごを掛けて昇つてみると、少年はそこに倒れている。抱いて下へ連れてきてよく見ると、口のまわりも真白まっしろに白餅だらけになつていた。（白餅というのは神に供える粢のことで、生の粉を水でかためただけのものである。）気の抜けたようになつてているのを介抱して、いろいろとして尋ねてみると少年はその夕方に、いつのまにか御宮の杉の樹きの下に往つて立つっていた。するとそこへ誰とも知らぬ者が遣つてきて彼を連れて行つた。多勢おおぜい

の人にまじつて木の梢こずえを渡りあるきながら、処々方々の家をまわつて、行く先々で白餅や汁粉などをたくさん御馳走になつていた。最後にはどこか知らぬ狭いところへ、突き込まれるようにして投げ込まれたと思ったが、それがわが家の天井であつたという。それからややしばらくの間その少年は、気が疎うとくなつていたようだつたと、同じ村の今三十五六の婦人が話をしたという（早川孝太郎君報）。

石川県金沢市の浅野町で明治十年ごろに起こつた出来事である。徳田秋声君の家の隣家の二十歳ばかりの青年が、ちょうど徳田家の高窓たかまどの外にあつた地じ境ざかいの大きな柿の樹の下に、下駄げたを脱ぎ棄てたままで行方不明になつた。これも捜しあぐんでいると、不意に天井裏にどしんと物の墮おちちた音がした。徳田君の令兄が頼まれて上つて見ると、その青年が横たわつてゐるので、背負うて降してやつたそうである。木の葉を噛かんでいたと見えて、口の端を真まつ青さおにしていた。半分正氣づいてから仔細しづいを問うに、大きな親爺おやじに連れられて、諸処方々をあるいて御馳走を食べて來た、また行かねばならぬといつて、駆けだそうとしたそうである。もつと尤も常から少し遅鈍たちな質の青年であつた。その後どうなつたかは知らぬといふ（徳田秋声君談）。

紀州西牟婁郡上三栖むろみの米作という人は、神に隠されて二昼夜してから還かえつてきたが、そ

の間に神に連れられ空中を飛行し、諸處の山谷を経廻つていたと語つた。食物はどうしたかと問うと、握り飯や餅菓子などたべた。まだ袂に残つているというので、出させて見るにみな柴の葉であつた。今から九十年ほど前の事である。また同じ郡岩田の万蔵という者も、三日目に宮の山の笹原の中で寝て いるのを発見したが、甚だしく酒臭かつた。神に連れられて摂津の西ノ宮に行き、盆の十三日の晩、多勢の集まつて酒を飲む席にまじつて飲んだといつた。これは六十何年前のことで、ともに宇井可道翁の『璞屋隨筆』の中に載せられてあるという（雑賀貞次郎君報）。

大正十五年二月の『国民新聞』に出ていたのは、遠州相良在の農家の十六の少年、夜中の一時ごろに便所に出たまま戻らず、しばらくすると悲鳴の声が聞えるので、両親が飛び起きて便所を見たがいない。だんだんに声を辿つて行くと、戸じまりをした隣家の納屋の中へ、兵児帯と襷をもつて両手足を縛られ、梁から鬼つるしに吊されていた。早速引卸して模様を尋ねても、便所の前に行つたまでは覚えているが、それから先のことは少しも知らぬ。ただふと気がついたから救いを求めたといつていた。奇妙なことには納屋には錠がかかるつて、親たちは捨ねじ切つて入つた。周囲は土壁で何者も近よつた様子がなかつたという。警察で尋ねてみたら、今少し前後の状況が知れるかも知れぬと思う。

不意に窮屈な天井裏などに入つて倒れたということは、とうてい我々には解釈しえない不思議であるが、地方には意外にその例が多い。また沖繩の島にもこれとやや似た神隠しがあつて、それを物迷いまたは物に持たるるというそうである。比嘉春潮君の話によれば、かの島でモノに攫われた人は、木の梢や水面また断崖絶壁の^ごとき、普通に人のあるかぬところを歩くことができ、また下水の中や洞窟床^{どうくつゆかした}下等をも平氣で通過する。人が搜している声も姿もはつきりとわかるが、こちらからは物を言うことができぬ。洞窟の奥や水の中でも発見せられた実例も少なくない。こういう狭い場処や危険な所も、モノに導かれると通行ができるのだが、ただその人が屁^へをひるときはモノが手を放すので、たちまち絶壁から落ちることがある。水に溺^{おぼ}れる人にはこれが多^いよう信じられているそうである。備中賀陽^{かわや}の良藤という者が、狐の女と婚姻して年久しくわが家の床下に住み、多くの児女を育てていたという話なども、昔の人には今よりも比較的信じやすかつたものらしい。

九 神隠しに遭いやすき気質あるかと思うこと

変態心理の中村古峠君なども、かつて奥州七戸辺の実例について調査をせられたことがあつた。神に隠されるような子供には、何かその前から他の児童と、ややちがつた気質があるか否か。これが将来の興味ある問題であるが、私はあると思つてゐる。そうして私自身なども、隠されやすい方の子供であつたかと考える。ただし幸いにしてもう無事に年を取つてしまつてそういう心配は完全になくなつた。

私の村は県道に沿うた町並まちなみで、山も近くにあるのはほんの丘陵であつたが、西に川筋かわすじが通つて奥在所おくざいしょは深く、やはりグ Hinサンの話の多い地方であつた。私は耳が早く怖い噂こわいとぎをたくさんに記憶してゐる児童であつた。七つの歳としであつたが、筋向すじむかいの家に湯に招かれて、秋の夜の八時過ぎ、母より一足さきにその家の戸口を出ると、不意に頬冠ほおかむりをした屈強な男が、横合よこあいから出てきて私を引抱ひつかかえ、とつとつと走る。怖しさの行止まりで、声を立てるだけの力もなかつた。それが私の門までくると、くぐり戸の脇わきに私をおろして、すぐに見えなくなつたのである。もちろん近所の青年の悪戯いたずらで、のちにはおおよそ心当りもついたが、その男は私の母が怒るのを恐れてか、断じて知らぬとどこまでも主張して、結局その事件は不可思議に終つた。宅ではとにかく大問題であつた。多分私の眼の色がこの刺戟しげきのために、すつかり變つていたからであろうと想像する。

それからまた三四年の後、母と第二人と茸きのこ狩がりに行つたことがある。遠くから常に見ている小山であつたが、山の向うの谷に暗い淋しい池があつて、しばらくその岸へ下りて休んだ。夕日になつてから再び茸をさがしながら、同じ山を越えて元登つた方の山の口へきたと思つたら、どんな風にあるいたものか、またまた同じ淋しい池の岸へ戻つてきてしまつたのである。その時も茫ぼうとしたような気がしたが、えらい声で母親がどなるのでたちまち普通の心こころ持もちになつた。この時の私がもし一人であつたら、恐らくはまた一つの神隠しの例を残したことと思っている。

これも自分の遭遇ではあるが、あまり小さい時の事だから他人の話のような感じがする。四歳の春に弟が生まれて、自然に母の愛情注意も元ほどでなく、その上にいわゆる虫氣むしけがあつて機嫌きげんの悪い子供であつたらしい。その年の秋のかかりではなかつたかと思う。小さな絵本をもらつて寝ながらみ見ていたが、頻りに母に向かつて神戸には叔母さんがあるかと尋ねたそうである。じつはないのだけれども他の事に気を取られて、母はいい加減な返事をしていたものと見える。その内に昼寝をしてしまつたから安心をして目を放すと、しばらくして往いつてみたらもういなかつた。ただし心配をしたのは三時間か四時間で、いまだ

鉢太鼓のかねいこ 騒ぎには及ばぬうちに、幸いに近所の農夫が連れて戻つてくれた。県道を南に向いて一人で行くのを見て、どこの児だろうかといった人も二三人はあつたそうだが、正式に迷子として発見せられたのは、家から二十何町離れた松林の道傍みちばた であった。折よくこの辺の新開畠しんかいばた にきて働いていた者の中に、隣の親爺がいたために、すぐに私だということが知れた。どこへ行くつもりかと尋ねたら、神戸の叔母さんとのころへと答えたそうだが、自分の今幽かす かに記憶しているのは、抱かれて戻つてくる途みち の一つ二つの光景だけで、その他はことごとく後日に母や隣人から聴いた話である。前の横須賀から東京駅まできた女の児の話を聴いても、自分はおおよそ事情を想像し得る。よもやこんな子が一人でいることはあるまいと思って、駅夫も乗客もかえつてこれを怪まなかつたのだろうが、外部の者にも諒解しえず、自身ものちには記憶せぬ衝動があつて、こんな幼い者に意外な事をさせたので、調べて見たら必ず一時性の脳の疾患であり、また体質か遺伝かに、これを誘発する原因が潜んでいたことと思う。昔は七歳の少童が庭に飛降つて神怪驚くべき言を発したという記録が多く、古い信仰では朝野ちょうやとともに、これを託宣と認めて疑わなかつた。それのみならず特にそのような傾向ある小児を搜し出して、至つて重要な任務を託していった。因よりわらわ 童というものがすなわちこれである。一通りの方法で所要の状態に陥らない場

合には、一人を取囲んで多勢で唱え言^{となごと}をしたり、または単調な楽器の音で四方からこれを責めたりした。警察などがやかましくなつてのちは、力^{ひと}めて内々にその方法を講じたようだが、以前はずいぶん頻繁にかつ公然と行われたものとみえて、今もまま事と同様にこれを模倣した小児の遊戯が残つている。「中の中の小坊主^{なかこぼうず}」とか「かアごめかごめ」と称する遊びは、正^{まさ}しくその名残である。大きくなつて世の中へ出てしまうと、もう我々のごとく常識の人間になつてしまふが、成長の或る時期にその傾向が時あつて顕れるのは、恐らくは説明可能なる生理学の現象であろう。神に隠されたという少年青年には、注意してみれば何か共通の特徴がありそうだ。さかしいとか賢いとかいう古い時代の日本語には、普通の児のように無邪氣でなく、なんらかやや宗教的ともいうべき傾向をもつていることを、包含していたのではないかとも考える。物狂いという語なども、時代によつてその意味はこれとほぼ同じでなかつたかと思う。

一〇 小児の言によつて幽界を知らんとせしこと

運強くして神隠しから戻つてきた児童は、しばらくは気抜けの体^{てい}で、たいていはまずぐ

つすりと寝てしまう。それから起きて食い物を求める。何を問うても返事が鈍く知らぬ覚えないと答える者が多い。それをまた意味ありげに解釈して、たわいもない切れ切れの語から、神秘世界の消息をえようとするのが、久しい間のわが民族の慣習であつた。しかも物々しい評判のみが永く伝わつて、本人はと見ると平凡以下のつまらぬ男となつて活きているのが多く、天狗のカゲマなどといつて人がこれを馬鹿にした。

この連中の見聞談は、若干の古書の中に散見している。鋭い眼をした大きな人が来いといつたからついて往つた。どこだか知らぬ高い山の上から、海が見えた里が見えたの類の、漠然たる話ばかり多い。ところがこれとは正反対にごくわずかな例外として、むやみに詳しく述べた世界を語る者がある。江戸で有名な近世の記録は、『神童寅吉物語』、神界にあつて高山嘉津間と呼ばれた少年の話である。これ以外にも平田派の神道家が、最も敬虔なる態度をもつて筆記した神隠しの談がいくつかあるが記録の精確なるために、いよいよ談話の不正確なことがよく分る。各地各時代の神隠しの少年が、見てきたと説くところには、何一つとして一致した点がない。つまりはただその少年の知識経験と、貧しい想像力との範囲より、少しでも外へは出ていなかつたのである。

故に神道があまり幽冥道を説かぬ時代には、見てきた世界は仏法の浄土や地獄であつ

た。『続鉱石集』の下の巻に出ている「阿波国不朽物語」などはその例で、その他にも越中の立山、外南部の宇曾利山で、地獄を見たという類の物語も、正直な人が見たと主張するものは、すべてみなこの系統の話である。

『黒甜瑣語』第一編の巻三に曰く、「世の物語に天狗のカゲマと云ふことありて、爰かしこに勾引さるゝあり。或は妙義山に将て行かれて奴となり、或は讚岐の杉本坊の客となりしとも云ふ。秋田藩にてもかゝる事あり。元禄の頃仙北稻沢村の盲人が伝へし『不思議物語』にも多く見え、下賤の者には別して拘引さるゝ者多し。近くは石井某が下男は、四五度もさそはれけり。始は出奔せしと思ひしに、其者の諸器櫨袍も残りあれば、それとも言はれずと沙汰せしが、一月ばかりありて立歸れり。津輕を残らず一見して、委しき」と言ふばかり無し。其後一年ほど過ぎて此男の部屋何か騒がしく、宥して下されと叫ぶ。人々出て見しに早くも影無し。此度も半月ほど過ぎて越後より帰りしが、山の上にてかの国の城下の火災を見たりと云ふ。諸人委しく其事を語らせんとすれども、辭を左右に托して言はず。若し委曲を告ぐれば身の上にも係るべしとの戒を聞きしと也。四五年を経て或人に従ひ江戸に登りしに、又道中にて行方無くなれり。此度は半年ほどし

て、大阪より下れり」と云う。

右の話の始めにある『不思議物語』という本は、この他にもたくさんの珍しい記事を載せてあるらしい。二百数十年前の盲人の談話ときいて、ことに一度見たいと思つてゐる。江戸の人の神に隠された話は、また新井白石も説いてゐる。『白石先生手簡』、年月不明、小瀬復菴に宛てた一通には、次のとく記してある。

「正月七日の夜、某旧識きゆうしきの人の奴僕ぬぼく一人、忽たちまちに所在を失ひ候。そうろう二月二日には、御直參ごじきさの人に文筆共とも当時の英材、某多年の旧識きゆうしき、是も所在を失し、二十八日に帰られ候。其事の始末は、鬼の為に誘はれ、近く候山々経歷し見候。此外これほか二三人失せし者をもうけたまわうけたまわども承り候へ共、それらは某見候者にも無く候。たしかに目擊候間あいだ如かくの此の事また候へば云々」（末の方は誤写があるらしい）。

『神童寅吉物語』は舞台が江戸であつただけに、出た当時からすでに大評判となり、少なからず近世のいわゆる幽界研究を刺戟した。今でも別様の意味において貴重なる記録である。知つてゐる人も多いと思うが、大正十四年の四月に、周防宮市すおうみやいちの天行居てんこうきよから刊行した『幽冥界ゆうめいかい研究資料』と題する一書は、この類の珍本のいくつかを合わせて覆刻し

てはいる。『嘉津間答問』四巻附録一巻は、すなわち前にいう寅吉の談話筆記で、平田翁の手を経て世に公にせられたものであるが別にそれ以外に『幸安仙界物語』三巻、紀州和歌山の或る淨土寺の小僧が、白髪の老翁に導かれてしばしば名山に往来したという話であり、『仙界真語』一巻は、尾州の藩医柳田泰治の門人沢井才一郎という者が、遠州秋葉山に入つて神になつたという一条で、いずれも十七歳の青年の異常なる実験を、最も誠実に記述したものである。高山嘉津間の方は、七歳の時から上野の山下で薬を売る老人につれられ、時々常陸の或る山に往来していたと語つているが実際にいなくなつたのは十四の歳の五月からで、十月ほどして還つてきていたと饑舌に靈界の事情を語つていた。遍く諸州を飛行したそうだが、本居は常陸の岩間山の頂上にあつた。紛れもなく天狗山人の社会で方式にも教理にも修驗道の香気が強かつたが、あの時代の学者たちは一種の習合をもつて自派の神道の闡明にこれを利用した。それでも不用意なる少年の語の中には、あまりなる口から出まかせがあつて、指摘し得べき前後の矛盾さえ多かつたのだが、それは記憶の誤りだろう隠すのだろう、或いは何か凡慮に及ばぬ仔細があるのだろうと、ことごとく善意に解しようとした跡がある。非常なる骨折であつた。これに比べると紀州の幸安の神隠しは、三十年余も後の事であるが、この期間の日本の学問の進歩は、

早著^{はや}しくその話の内容に反映している。幸安はまず和歌山近くの花山^{はなやま}というに登り、それから九州某地の赤山^{あかやま}というところに往つたと語つたが、赤山の住^{じゆう}侶^{りよ}はいずれも仙人^{せんにん}で、おのの『雲笈七籤^{うんきゅうしちせん}』にでもあるような高尚な漢名を持つていた。天狗などは身分の低いものだと大いにこれを輕蔑^{けいべつ}している。また支那にも飛べば北亞細亞^{アジア}の山にも往つたとあつて、その叙説の不精確さは正に幕末ごろの外国地理の知識であつた。よくもこんな話が信じられたと、今の人ならば驚くのが当然だが、道教の神祕も日本の固有信仰がこれを支配し得るかのことく、曲解し得るだけ曲解するのだが、言わばあの時代の学風であつたので、すなわちたくさん^{まさ}の夢語りも、やはり平田翁一派の研究以外へは一足だつて踏出してはいられないのである。

名古屋の秋葉大權現^{あきばだいごんげん}の神異に至つては、話が更に一段と単純になつてゐる。これは前にいう紀州の事件よりも、また十五年も後のことであるが、これに参加した人たちが学問に深入りしなかつた故に、古風な民間の信仰の清らさを留めている。すなわち神隠しの青年は口が喋々^{ちようちょう}と奇瑞^{きずい}を説かなかつたかわりに、我々の説明しえないいろいろの不思議が現われ、それを見たほどの者は一人として疑い怪しむことができなかつた。そうして多くの信徒の興奮と感激との間に、当の本人は靈魂のみを大神^{おおかみ}に召されて、若い骸^{むくろ}を留めて

去つたのである。およそ近代の宗教現象の記録として、これほど至純なる資料はじつは多くない。身親みしんしくこの出来事を見聞した者の感を深め信心を新たにしたことも、誠に当然の結果のように思われる。ただ我々の意外とすることは、こういう珍しいいろいろの実験をならべてみて、一方が真実なら他方は誤りでなければならぬほどの不一致には心づかず、幽界の玄妙なる、なんのあらざる事あらんやと、一切の矛盾を人智不測の外に置こうとした、後世の学徒の態度であつた。もし盲信でなければ、これは恐らく同種の偽物にせものに対する対する寛容であつて、やがては今日のごとき鬼術横行の原因をなしたものとも言いえられる。

江戸の高山嘉津間、和歌山の島田幸安等の行末ゆくすえはどうであつたか。今なら尋ねて見たらまだ消息が知れるかもしがれぬ。もし彼らの行者生活が長く続いていたとすれば、これらの覚書おぼえがき類は時の進むとともに、幾たびかその価値を変化していはるはずである。少なくとも口で我々にあんなことを説いて聞かせて、もう今日では耳を傾ける者はあるまい。故に書物になつて残つているというだけで、特段にこれを尊重すべき理由はない道理である。

一一 仙人出現の理由を研究すべきこと

「うそ」と「まぼろし」との境は、決して世人の想像するごとくはつきりしたものでない。自分が考へてもなおあやふやな話でも、なんどとなくこれを人に語り、かつ聴く者が毎に少しあることを疑わなかつたなら、ついには実験と同じだけの強い印象になつて、のちにはかえつて話し手自身を動かすまでの力を生ずるものだつたらしい。昔の精神錯乱と今日の発狂との著しい相異は、じつは本人に対する周囲の者の態度にある。我々の先祖たちは、むしろ怜憐れいりにしてかつ空想の豊かなる児童が時々変になつて、凡人の知らぬ世界を見てきてくれることを望んだのである。すなわちたくさんの神隠しの不可思議を、説かぬ前から信じようとしていたのである。

室町時代の中ごろには、若狭わかさの国から年齢八百歳という尼が京都へ出てきた。また江戸期の終りに近くなつてからも、筑前の海岸に生まれた女で長命して二十幾人の亭主を取替えたという者が津軽方面に出現した。その長命に証人はなかつたが、両人ながら古い事を知つてよく語つたので、聴く人はこれを疑うことができなかつた。ただしその話はもうしあ合わせたように源平の合戦、義経・弁慶の行動などの外には出なかつた。それからまた常陸坊海尊ひたちぼうかいそんの仙人になつたのだといふ人が、東北の各地には住んでいた。もちろん

ん義經の事蹟、ことに屋島・壇の浦・高館等、『義經記』や『盛衰記』に書いてあることを、あの書をそらで読む程度に知つていたので、まつたくそのために当時彼が眞の常陸坊なることを一人として信用せざる者はなかつたのである。

今日の眼から見れば、これを信ずるのは軽率のようであり、欺く本人も憎いようだが、恐らくは本人自身も、常陸坊であり、ないしは八百比丘尼なることを、何かわけがあつて固く信じていたものと思われる。それも決してありえざることではない。参河の長篠地方でおとらという狐に憑かれた者は、きっと信玄や山本勘助の話をする。この狐もまた長生で、かつて武田合戦を見物していて怪我をしたという説などが行われていたために、その後憑かれた者が、みなその合戦を知つているような気持にならずにはおられなかつたのである。

若狭の八百比丘尼は本国小浜の或る神社の中に、玉椿の花を手に持つた木像を安置しているのみではない。北国は申すに及ばず、東は関東の各地から、西は中国四国の方々の田舎に、この尼が巡遊したと伝うる故跡は数多く、たいていは樹を栽え神を祭り時としては塚を築き石を建てている。それが單なる偶合でなかつたと思うことは、どうしてそのように長命をしたかの説明にまで、書物を媒介とせぬ一部の一致と脈絡がある。つまり

は靈怪なる宗教婦人が、かつて巡国をしてきたことはあつたので、その特色は驚くべき高齢を称しつつ、しかも顔色の若々しかつた点にあつたのである。人はずいぶんと白髪の皺だらけの顔をしていても、八百といえば嘘だと思わぬ者はないであろうに、とにかくこれを信ぜしめるだけの、術だか力だかは持つていたのである。それが一人かはた幾人もあつたのかは別として、京都の地へも文安から宝徳のころに、長寿の尼が若狭から遣つてきて、毎日多くの市民に拝まれたことは、『臥雲日併錄』にも書いてあれば、また『康富記』などにもちやんと日記として載せてあるから、それを疑うこととはできないのである。尤もこの時代は七百歳の車僧のように、長生を評判にする風は流行であつた。しかし然らば何か我々の想像しえない方法が、これを証明していたのかも知れぬが、いずれにしても『平家物語』や『義経記』の非常な普及が、始めて普通人に年代の知識と、回顧趣味とを鼓吹したのはこの時代だから、比丘尼の昔語りは諸国巡歴のために、大なる武器であつたことと思う。ただ自分たちの想像では、單なる作り事ではこれまでに人は欺きえない。或いは尼自身も特殊の心理から、自分がそのような古い嫗おうなであることを信じ、まのあたり義経・弁慶一行の北国通過を、見ていたようにも感じていた故に、その言うことが強い印象となつたのではなかろうか。越中立山の口碑では、けつかい結界を破つて靈峰に登ろうとした女

性の名を、若狭の登宇呂の姥とう ゆる うばと呼んでいる。もしこの類の山で修業した巫女みこが自身にそういう長命を信じて習ならいであつたら、のちに説こうとする日向小菅岳ひゅうがこすげだけの山女が、山に入つて数百年を経たと人に語つたというのも、必ずしも作り話ではないことになるのである。やたらに人の不誠実を疑うにも及ばぬのである。

常陸坊海尊の長命ということは、今でもまだ陸前の青麻權現あおぞらごんげんの信徒の中には、信じている人が大分あつて、これを疑つては失礼に当るか知れぬが、じつはこの信仰には明らかに前後の二期があつて、その後期においては海尊さまはもう人間ではなかつたのである。これに反して足利時代の終りに近く、諸国にこの人が生きていたという話の多いのは、正しく八百比丘尼と同系統の現象であつた。事のついでに少しくあのころの世間の噂を比較してみると、例えば会津の実相寺あいづじつそうじの二十三世、桃林契悟禪師とうりんけいごぜんじ号は殘夢、別に自ら秋風道士とも称した老僧はその一人であつた。和尚おじょうようは奇行多くまた好んで源平の合戦その他の旧事を談ずるに、あたかも自身その場にいて見た者のごとくであつた。無々という老翁の石城郡いしきに住する者、かつて残夢を訪ねてきて、二人で頻りに曾我そがの夜討ようちの事を話していたこともあつた。しかも曾我とか源平合戦とかがもうちゃんと書物になつていることを知

らず、あまり詳しいので嘆驚するような人が、まだこの地方には多かつたらしのである。年を尋ねると百五六十と答え、強いて問いつめるとかえつて忘れたといつて教えなかつた。然らば常陸坊海尊だろうと噂したというのは、恐らくはこのころすでにかの仙人がまだ生きてどこかにいるように評判する者があつたからであろう。また別の伝えには福仙という鏡研ぎがきた。福仙これを見て彼は義経公の旗持ちだつたというと、福仙もまた人に向つて、残夢は常陸坊だと告げたともいうが、そんな事をすれば露れるにきまつてい。しかも和尚は天正四年の三月に、たくましい一篇の偈を留めて円寂し、墓もその寺にあるにかかわらず、その後なお引続いて、常陸坊が生きているという説は行われた。

『本朝故事因縁集』には、「海尊遁げ去りて富士山に入る、食物無し、石の上に飴の如き物多し、之を取りて食してより又飢うこと無く、三百年の久しき木の葉を衣として住む。近代信濃の深山に岩窟あり、之に遊びて年未だ老いず」とある。山におりきりの仙人ならば、こんな歴史も伝わらぬ道理で、やはり時々は若狭の尼のように人間の中に入つてきていたのである。能登の狼煙村の山伏山では、常陸坊はこの地まできて義経と別れ、仙人になつてこの山に住んだ、おりおりは山伏姿で出てきたと『能登国名跡志』に書いてあるが、それでは高館・衣川の昔話をするのに、甚だ勝手が悪かつたわけ

である。加賀には残月という六十ばかりの僧、かつて犀川さいかわと浅野川の西東に流れていた時を知つてゐるといつた。越後の田中という地にきて、小松原宗雪なる者と同宿し、穀を絶ち松脂まつやにを服して暮していたが、誰言うともなく残月は常陸坊、小松原は龜井六郎だと評判せられた。人が『義経記』を呼んで聴かせると覚えず釣込まれてそのころの話をしたと『提てい醒いせ紀き談だん』卷一にあるが、龜井と馬が合うたとすれば能登で別れてしまつたのではなさそうだ。『広益俗說弁こうえきそくせつべん』卷十三には、海尊かいそん高館の落城に先だつて山に遁のがれ、仙人となつて富士・浅間・湯殿ゆどのさん山などに時々出現するとあるが、羽前最上郡古口村の外川神社の近くにも、海尊仙人が住んでいたといふ口碑あり、また陸前氣仙郡の唐丹の觀音堂の下にも、昔常陸坊が松前から帰りがけにこの地を通つて、これは龜井の墓だと別当山伏の成就院じょうじゅいんに、指さし教えたと伝うる墓があつた。永い年月には何処へでも往つたらうが、それにしてもあまりに口が多く、また話が少しづつ喰違つてゐるのは、やはりたくさんの同名異人があつたためではなかつたか。ことに寛永の初年に陸中平泉の古戰場に近い山中で、仙台の藩士小野太左衛門ゆきあが行逢へうたというのは、よほど怪しい常陸坊であつた。源平時代の見聞を語ること、親しくこれを歴た者の通りであつた故に、小野はただちに海尊なることを看破し、就いて兵法を学び、また恭うやうやく延年益寿の術たずを訊ねた。異人

答えて曰く、もと修するの法なし、かつて九郎判官に隨從して高館にいるとき、六月衣川に釣して達谷に入る。一老人あり招きて食を供す。肉ありその色は朱のごとく味美なり、仁羹と名づく。従者怪みて食わず、これを携えて帰る。その女子これを食いた不死であつたが、天正十年までいていずれへか往つてしまつたと語つた。この話は若狭・越中その他の地方において、八百比丘尼の長生の理由として、語り伝うるものと全然同じで、仁羹はすなわち人魚の肉であつた。日本の仙人が支那のように技術の力でなく、とうてい習得しがたい身の運のようなるものを具えていたことを、説明しようとする昔話に過ぎぬのだが、これをさえ受売するからには仙翁でもなかつたのである。しかるにもかかわらず、小野太左衛門はその説に感歎して、これを主人の伊達政宗に言上し、後日に清悦御目見えの沙汰があつた。清悦とはこの自称長寿者ののちの名で、現今行われている『清悦物語』の一書は、彼が『義経記』を一読してこれは違つてゐるといい、自ら口授したところの源平合戦記であつた。『吾妻鏡』や『鎌倉実記』と比較して、一致せぬ点が多いというのは当り前以上である。しかし出来事の評判は非常であつたと見えて、寛永以後なお久しい間、清悦の名は農民の頭から消えなかつた。岩切の青麻権現の岩窟に出現したのは、それからおよそ五十年の後、ちょうど『清悦物語』が世に出てから、十五

年目の天和二年であつたという。鈴木所兵衛という、信心深い盲人が、彼に教えられて天に祷り、目が開いたという奇跡もあつた。その時は気高い老人の姿で現れて、われは常陸坊海尊、今の名は清悦である。久しく四方を巡つて近ごろ下野の大日窟にいたが、これからはここへきて住もう。この窟には何神を祭つてあるかと尋ねるので、大日・不動・虚空藏の三尊だと答えると、それは幸いのことだ、自分の念ずるのも日月星、今より三光穴と名づくべしといつて、すなわち岩窟に入つて鉄鎧をもつて上下した。これが人魚を食べた常陸坊のまた新たなる変化であつた。ただしこの縁起はそれから更に八十余年を経て、再びこの社が繁昌したのちのもので、以前の形のままか否かは疑わしい。近年になつては一般に、常陸坊は天狗だと信じられていた。常陸国の阿波の大杉大明神も、この人を祭るという説があり、特別の場合のほかは姿を見ることができなかつた。しかも一方には因縁がなお繋がつて、おりおりは昔の常陸坊かも知れぬという老人が、依然として人間にまじつて遊んでいた。

話が長過ぎたがやはり附添えておく必要がある。青麻權現の奇跡と同じころに、同じ仙台領の角田から白石の辺にかけて、村々の旧家に寄寓してあるいた白石翁という異人があつた。身のたけ六尺眼光は流電のごとく、またなかなかの学者で神儒二道の要義に

通じていた。この翁の特徴は紙さえ見れば字をかくことと、それからまた源平の合戦を談ずることとであつた。年齢は言わぬが誰を見てもセガレと呼び、角田の長泉寺の天鑑和尚などは百七つまで長命したのに、やはりセガレをもつて交わっていた。或る時象棋をさしていて、ふと曲淵正左衛門の事を言いだしたが、この人は二百年前にいた人であった。身元が知れぬのでいろいろの風説が生じ、或いは甲州の山県昌景かといい、信玄の次男の瞽聖堂の子かともいい、或いはまた清悦であろうともいつた。元禄六年の二月十八日に、白石在の某家でたしかに病没したのだが、それから十何年ののち、或る商人が京都に旅行して、途中で白石翁を見たという話も伝わっていたから、かりに海尊であつたとしても理窟だけは合うのである（以上『東藩野乘』下巻および『封内風土記』四）。

さてこれらの話を集めてみて、結局目に立つのは、常に源平の合戦を知っていることが長命の証拠になつたという点である。東北地方の旧家のことに熊野神社と関係あるものは、最も弁慶や鈴木・亀井の武勇談を愛好し、なるたけ多く聞きたいという希望が、ついに『義経記』のごとき地方の文学を成長せしめたのだ。これに新材料を供与する人ならば、異常の尊敬を受けたのは当然である。それも作り事と名乗つては、人が承知せぬのが普通であった。すなわち座頭の坊の物語が夙くから、当時実際に参与した勇士どもの靈の、託

言または啓示なることを要した所以である。常陸坊は高館落城の当時から、行方不明と伝えられていた故に、後日 み 生靈となつて人に憑くにさしつかえはなく、また比較的重要でない法師であつて、観ていた様子を語るには都合がよかつた。だから、一時的には吾は海尊と名乗つて、実歴風に処々の合戦や旅行を説くことは、いずれの盲法師も昔は通例であつたかと思うが。それがあまりに巧妙で傍の者が本人と思つたか、はたまた本人までが常陸坊になりきつて、いわゆる見てきたような嘘うそをついたかは、今日となつてはもう断定ができぬ。それから第二の点は支那の寒山拾得の話のごとく、残夢は無々と語り福仙と相あいゆび指さぎし、残月は小松原宗雪と同宿し、清悦は小野某を伴ない、また白石翁が天鑑和尚を伴せがれと呼んだこと、これも多分は古くからの方式であつたろうと思う。陸中江刺郡黒石の正法寺ろいしで、石地蔵が和尚に告げ口をしたために常陸かいどうの身の上が露れた。帰りにその前を通ると地蔵がきな臭いような顔をしたので、さてはこやつが喋しゃべつたかと、鼻をねじたといつて鼻はなまが曲り地蔵がある。これは紛れもなく海神の宮の口女であり、また猿の肝きもの昔話の竜宮りゆうぐうの海月であつて、こういう者が出てこないと、やはり話にはなりにくかつたのである。だから眼前のただ一つの例を執つて、不思議を説明しようとするのは誤った方法である。近くは天明の初年に、上州伊香保の木樵きこり、海尊に伝授を受けたと

称して、下駄灸げたきゆうと、いう治療を行つたことが、『翁草』の巻百三十五にも見えてゐる。彼も福仙と同じく義経の旗持ちであつたのが、この山に入つて自分もまた地仙となつたといふ。下駄だの灸だのという近代生活にまで、なお昔の奥淨瑠璃おくじょうりの年久しい影響が、痕あとを留めているのはなつかしいと思う。

一二 大和尚に化けて廻国せし狸のこと

話が山から出てきたついでに、おかしな先例を今少し列挙して見たい。関東各府県の村の旧家には、狐や狸の書いた書画というものがおりおり伝わり、これに伴うて必ず不思議な話が残つてゐる。たいていは旅の僧侶そうりょに化けて、その土地にしばらく止まつていたというのである。どうしてその僧の狸であることを知つたかといえば、後日少しくかけ離れた里で、狗に噛殺かみころされたという話だからといふものと、その僧が滯在をしている間、食事と入浴に人のいるのをひどく厭がる。そつと覗いてみたら食物を膳の上にあけて、口をつけたまま食べてゐたからというのがあり、また湯殿の湯気の中から、だらりと長い尻尾しつぽが見えたからというのもある。書や画は多くは乱暴な、しかも活潑かつぱつな走り書きであつた。

この化の皮の露れた原因として、狗に殺されたはいかにも実際らしくない。もし噛まれて死んでいたものの正体が狸であれば、果してあの和尚か否かがわからず、和尚の姿で死んでおれば、狸とはなおさらいわれない。要するに山芋やまいもと鰻うなぎ、雀すずめと蛤まぐりの関係も同じで、立会たちあいのうえで甲から乙へ変化するところを見届けぬかぎりは、眞の調書は作成しえなかつた道理である。おそらくはじつは和尚の拳動、或いはその内々の白状が、この説の基礎をなしたものであつたろうと思う。

いわゆる狸和尚の話は、鈴木重光君の『相州内うちごう郷ごう村話』の数ページが、最も新しくかつ注意深い報告である。同君の居村附近、すなわち小仏峠こぼとけとうげを中心とした武相甲の多くの村には、天明年間に貉むじなが鎌倉建長寺の御使僧ごしそうに化けたという話とともに、描いて残した書画が多く分布している。鈴木君が自身で見たものは、東京府南多摩郡加住村大字宮下にある白沢はくたくの図、神奈川県津久井郡千木良村に伝わる布袋川渡りの図であつたが、後者は布袋らしく福々しいところは少しもなく、なんとなく貉に似た顔にできていた。書は千木良の隣の小原町の本陣、清水氏にも一枚あつた。形は字らしいが何という字か判らなかつた。それよりも更に奇怪きつかいなことは、この僧が狗に噛み殺されて、貉の正体を顯あらわしたと

伝うる場処が、或いは書画の数よりも多いかと思うくらい方々の村にあることである。また建長寺の方でもこの事件は否定せぬそうだ。ただし貉が勧化の使僧を咬み殺して、代つてこれに化けたというかちかち山式風説は認めず、中途で遷化した和尚の姿を借りて、山門再建の遺志を果したという他の一説の方を執つておりますと現に寺にもその貉の書いたものが、二枚も蔵つてあるというのは、すこぶる次に述べる文福茶釜の話と似ていて。

右と同様の話はなおたくさんあるが、今記憶する二つ三つを挙げて見ると、『静岡県安倍郡誌』には、この郡大里村大字下島の長田氏には、これも建長寺の和尚に化けて、京に上ると称して堂々と行列を立て、乗り込んできたという貉の話あり、その書が今に残っている。横物の一軸に「」というような変な字が一字書いてある。ムジナすなわち狸だという幽かな暗示とも解せられる。隣区西脇の庄屋萩原氏にも宿泊し、かの家にも一枚あつたがそれは紛失した。そうしてやはりのちに安倍川の川原で、犬に喰殺されたと伝えられる。信州下伊那郡泰阜村の温田といふところにも、狸のえがくという絵像のあることが、『伝説の下伊那』という書に報ぜられてある。人の顔に獸の体を取りつけたような不思議な画姿であったという。ただしこれは和尚ではなくて、由ある京都の公家という触れ込みで、遠州路から山坂を越えて、この村に遣つてきて泊つた。出入ともに駕籠の戸を開

かず、家の者も見ることをえなかつたが、翌朝出発の時に礼だと称して、こんな物を置いて去つたという。この狸はそれから柿野という部落に入つて同じことをくりかえし、だんだんと 天竜筋てんりゆうすじ を上つて行くうちに、上穂うわほ の光善寺の飼犬に正体を見現わされ、咬み殺されてしまつたというが、その光善寺の犬は例のヘイボウ太郎で、遠州見附みつけ の人身御供問題を解決した物語の主人公だから、どこまでが昔話か結局は不明に帰するのである。

『蕉齋筆記』にはまた次のような話が出ている。三州龜浜かめはま の鳴田又兵衛という富人の家へ、安永の初年ころに、京の大徳寺の和尚だというのがただ一人でふらりと遊びにきて、物の三十日ほども滯在し、頼まれて額がくだの一物だのを、いくらともなく書いて還つた。あとから挨拶あいさつ の状を京に上せると、大徳寺の方では和尚一向にそんな覚えがないとある。ただしもとこの寺に一匹の狸がいて、夜分縁えんき 先にきて法談を聴ちようもん 聞かえ していたが、のちに和尚の机の上から石印を盗んでいざれへか往つてしまつた。其奴そやつ ではなかろうかといつてみると、果して後日の噂には江州大津の宿で、駕籠を乗替えようとして犬に喰殺された狸だか和尚だかが、その石印を所持していたそうである。三州の方には屏風びようぶ が一つ残つていた。見事な筆蹟であつたという。しかしこれだけの材料を綜合して、狸が書家であつたと断定することは容易でない。やはり最初から、旅僧の中には稀まれ には狸ありという

風説が、下染したぞめをなしている必要はあつたのである。狐の書という話も例は多いが、『塩尻』（帝国書院本）の巻六十八および七十五にも、これと半分ほど似た記事がある。美濃安八郡春近の井上氏に、伝えた書というのがそれであつて、その模写を見ると鳥啼花落あはちかはらくと立派に書いて、下に梅菴と署名してある、本名は板益亥正、年久しく井上家の後園に住む老狐であつて、しばしば人間の形をもつて来訪した。筆法以外医道の心得もあり、また能く禪を談じたが、一旦中絶して行方が知れず、どうした事かと思つていると、或る時村の者が京に上る途みちで、これも大津の町で偶然にこの梅菴ゆきあに行逢うた。もう年を取つて死ぬ日が近くなつた。日ごろ親しくした井上氏と、再会の期もないのは悲しいと落涙し一筆認めてこれを托し、なお井上が子供にもよく孝行をして学問を怠らぬようにと、伝言を頼んで別れたのである。梅菴は野狐にして僧、長齋一食なりとあつて、何だか支那の小説にでもありそうな話だが、現に鳥啼花落のこが遺つてゐるのだからしかたがない。しかし『宮川舎漫筆』卷二には、早同じ話に若干の相違を伝え、公表せられた狐の書といふものにも、野干坊元正やかんぼうげんせいと麗々と署名がしてあつた。

實際この類の狐になると、果して人に化けたのやら、もしくは人の形になりきつているのやら、その境目さかいめがもうはつきりしてはいなかつた。それ故にかえつて本人の方から、

たとえ露骨には名乗らぬまでも、やや自分の狐であることを、暗示する必要があつたと見える。空庵という狐が自ら狐の一字を書したことは『一話一言』にあり、また駿州安倍郡の貉は狸という字に紛わしい書を遺した。しかも他の一方においては、人が狐に化けたという話も近世は存外に多かつた。物馴れた旅人が狐の尻尾を腰さげにして、わざとちらちらと合羽^{かつば}の下から見せ、駕籠屋・馬方^{うまかた}・宿屋の亭主に、尊敬心を起させたといふ噂は興味をもつて迎えられ、甚だしきはあべこべに、狐を騙したという昔話をえでている。だから私は村々の狸和尚が、いずれも狸の贋物^{にせもの}であつたとはもちろん言わぬが、少なくともいかにしてこれを発見したかは、考えてみる必要があると思うのである。

狐狸の大多数が諸国を旅行する際に、武士にも商人にもあまり化けたがらず、たいてい和尚や御使僧になってきたのも曰く^{いわ}があろう。上州茂林寺^{もりんじ}の文福茶釜を始めとしてかつて異僧が住してそれがじつは狸であり、いろいろと寺のために働いて、のちにいなくなつたというのみならず、何か末世の手証^{てあかし}^{しりぞ}となるものを、遺して往つたという例はたくさんにある。禅宗の和尚たちはこれを怪奇として斥けず、むしろ意味ありげに語り伝えるのが普通であつた。会津の或る寺でも守鶴西堂^{しゆかくせいどう}の天目^{てんもく}を什宝^{じゅうほう}とし、稀有^{けう}の長寿を説くこと常陸坊海尊同様であつたが、その守鶴もやはり何かのついでに微々として笑つて、す

こぶる自己のじつは狸なることを、否定しなかつたらしい形がある。東京の近くでは府中の安養寺に、かつて三世の住職に隨逐した筑紫三位という狸があつて、それが書いたという寺起立の由来記を存し、横浜在の関村の東樹院には、狸が描くと称する渡唐天神の像もあつた（『新篇風土記稿』二十四および二十八）。建長寺ばかりではないのである。

それからまた有用無害の狐狸がいたという話は、今では多く寺々の管轄の下に帰し、かつは仏徳の如是畜生に及んだことを証しているようだが、最初はその全部が僧たちの親切に基づいた因縁話でもなかつたらしい。今日の思想から判れば、狐はこれ人民の敵で、人は汲々乎としてその害を避くるに専らであるけれども、祭った時代にはいろいろの好意を示し、また必ずしも仏法の軌範の内に跼蹐していなかつた。例えば越後の或る山村では、正月十五日の宵に山から大きな声を出して、年の吉凶を予言し、または住民の行為を批判した。『東備郡村誌』によれば、岡山市外の円城村に老狸あり、人に化けて民間に往来し、能く人の言語を学んでしばしば附近の古城の話をした。その物語を聴かんと欲する者、食を与えてこれを請う時んば、一室を鎖してその内に入り、諄々として人のごとくに談じた。しこうして人を害することなし、尤も怪獣なりとある。三河の長篠のおとら狐に至つては、近世その暴虐ことに甚だしく住民はことごとく切歎扼腕してい

るのだが、人に憑くときは必ず鳶巣城^{とびのすじょう}の故事を談じ、なお進んでは山本勘助の智謀、川中島の合戦のことき、今日の歴史家が或いは小幡勘兵衛の駄法螺^{だばら}だろうと考えている物語までを、事も細かに叙述するを常とした。單に人を悩ます者がおとらであり、おとらは歳久しき狐なることを証明するためならば、それほど力を入れずともよいのであつた。おそらくはこれも昔はその話を聴くために、狐を招いてきてもらつた名残であつて、同時にまた諸国の狸和尚、ないしは常陸坊・八百比丘尼の徒が、或いは自分もまた多くの聴衆と同じく、憑いた生靈、憑いた神と同化してしまつて、莊子^{そうじ}の夢の吾か蝴蝶^{われこちよう}かを、差別しない境遇にあつた結果ではないかを考えしめる。

近ごろでも新聞に毎々出てくるごとく、医者の少しく首を捻る^{ひね}ような病人は、家族や親類がすぐに狐憑きにしてしまう風が、地方によつてはまだ盛んであるが、なんぼ愚夫愚婦でも理由もなしに、そんな重大なる断定をするはずがない。たいていの場合には今まで似たような先例があるから、もしか例のではないかと、以心伝心に内々一同が警戒していると、果せるかな今日は昨日よりも、一層病人の挙動が疑わしくなり、まず食物の好みの小豆飯^{あづきめし}・油揚^{あぶらあげ}から、次には手つき眼つきや横着なそぶりとなり、此方でも「こんち

きしよう」などといふまでに激昂^{げつこう}するころは、本人もまた堂々と何山の稻荷^{いなり}だと、名を名乗るほどに進んでくるので、要するに双方の相持^{あいも}で、もしこれを精神病の一つとするならば、患者は決して病人一人ではないのだ。狸の旅僧のごときも多勢で寄つてたかつて、化けたと自ら信ぜずにはおられぬよう逆にただの坊主を誘導したものかも知れぬ。

佐渡では新羅^{しらぎ}王書と署名した奇異なる草体の書が、多くの家に蔵せられ、私もそのいくつかを見た。古い物ではあるが、もちろん新羅という国が滅びてのち、すでに四五百年以上もしてから作に相異なる。天文年間に漂着したともいい、或いはもつと後のことともいつている。とにかくかつて他処からきた実在の異人であつた。のちには土地の語を話し、土地の人になつてしまつた。書ばかり書いている変な人だつたというが、現にその子孫という家もあつて、とにかくに詐欺師^{さぎし}ではなかつた。自分でも新羅王だと思つており、それをまた周囲の人が少しも疑わなかつたために、このようなりうべからざる歴史が成り立つたものである。

神隠しの少年の後日譚、彼らの宗教的行動が、近世の神道説に若干の影響を与えたのは怪しむに足らぬ。上古以来の民間の信仰においては、神隠しはまた一つの肝要なる靈界との交通方法であつて、我々の無窮に対する考え方たは、終始この手続を通して進化してき

たものであつた。書物からの学問がようやく盛んなるにつれて、この方面は不當に馬鹿にせられた。そうして何が故に今なお我々の村の生活に、こんな風習が遺つていたのかを、説明することすらもできなくなろうとしている。それが自分のこの書物を書いて見たくなつた理由である。

一三 神隠しに奇異なる約束ありしこと

神隠しからのちに戻つてきたという者の話は、さらに悲しむべき他の半分の、不可測なる運命と終末とを考える材料として、なお忍耐して多くこれを蒐集する必要がある。社会心理学という學問は、日本ではまだ翻訳ばかりで、國民のための研究者はいつになつたら出てくるものか、今はまだすこしの心当てもない。それを待つ間の退屈を紛らすために、かねて集めてあつた二三の実例を棄として、自分はほんの少しばかり、なお奥の方へ入りこんで見ようと思う。最初に注意せずにおられぬことは、我々の平凡生活にとつて神隠しほど異常なるかつ予期しにくい出来事は他にないにもかかわらず、單に存外に頻繁でありまたどれこれもよく似ているのみでなく、別になお人が設けたのでない法則

のごときものが、一貫して存するらしいことである。例えば信州などでは、山の天狗に連れて行かれた者は、跡に履物^{はきもの}が正しく揃えてあって、一見して普通の狼藉^{ろうぜき}、または自身で身を投げたりした者と、判別することができるといつてゐる。そんなことは信じないと評してもよいが、問題は何故に人がそのようなことを言い始めるに至つたかにある。

或いはまた二日とか三日とか、一定の期間^{さが}捜してみて見えぬ場合に、始めてこれを神隠しと推断し、それからはまた特別の方法を講ずる地方もある。七日を過ぎてなお発見しえぬ場合にもはや還らぬ者としてその方法を中止する風もある。或いはまた山の頂上に登つて高声に児の名を呼び、これに答うる者あるときは、その児いすれかに生存すと信じて、辛うじて自ら慰める者がある。八王子の近くにも呼ばわり山という山があつて、時々迷子^{まいご}の親などが登つて呼び叫ぶ声を聴くという話もあつた。町内の附合^{つきあ}または組合の義理と称して、各戸総出^{そうで}をもつて行列を作り、一定の路筋^{みちすじ}を廻歴した慣習のごときも、これを個々の事変に際する協力といわんよりは、すこぶる葬礼祭礼などの方式に近く、しかも捜査の目的に向かつては、必ずしも適切なる手段とも思われなかつた。この仕来り^{しきた}には恐らくは忘却せられた今一つ根本の意味があつたのである。それを考え出さぬ限りは、神隠しの特に日本に多かつた理由も解らぬのである。

全体にこの実例はおいおいと少なくなつて、今では話ばかりがなお鮮明に残つてゐる。神隠しという語を用いぬ地方もすでにあるが、狐に騙され(だま)て連れて行かれるといふことは天狗にさらわれるといつても、これを搜索する方法はほぼ同じであつた。単に迷子と名づけた場合でも、やはり鉦太鼓の叩き方は、コンコンチキチコンチキチの囁子(はやし)で、芝居で「釣狐(つりぎつね)」などというものの外には出でなかつた。しかもそれ以外になお叩く物があつて、各府県の風習は互いによく似ていたのである。例をもつて説明するならば、北大和の低地部では狐にだまされて姿を隠した者を搜索するには、多人数で鉦と太鼓を叩きながら、太郎かやせ子かやせ、または次郎太郎かやせと合唱した。この太郎次郎は子供の実名とは関係なく、いつもこういつて喚んだものらしい。そうして一行中の最近親の者、例えば父とか兄とかは、一番後に下(さが)つてついて行き、一升榤(いつしょうます)を手に持つて、その底を叩きながらあるくことに定まつており、そうすると子供は必ずまずその者の目につくといつてゐる（『なら』一八号）。紀州田辺地方でも、鉦太鼓を叩くとともに、櫛の歯をもつて榤の尻を搔いて、変な音を立てる風があつた（雑賀君報）。播磨の印南郡では迷子を搜すのに、村中松明(たいまつ)をともし金鹽(かなだらい)などを叩き、オラバオラバオと呼ばわつてあるくが、別に

一人だけわざと一町ばかり引き下つて柵を持つて木片などで叩いて行く。そうすると狐は隠している子供を、柵を持つ男のそばへほうり出すといつていた。同国東部の美嚢郡などでは、迷子は狐でなく狗賓ぐひんさんに隠されたというが、やはり探しにあるく者の中一人が、その子供の常に使っていた茶碗ちゃわんを手に持つて、それを木片をもつて叩いてあるいた。越中魚津でも三十年余の前までは、迷子を探すのに太鼓と一升柵とを叩いてあるいた。柵の底を叩くと天狗さんの耳が破れそうになるので、捕えている子供を樹の上から、放して下すものだと信じていたそうである（以上『土の鈴』九および十六）。

右のごとき類例を見て行くと、誰でも考えずにおられぬことは、今も多くの農家で茶碗を叩き、また飯櫃めしひつや柵の類を叩くことを忌む風習が、ずいぶん広い区域にわたつて行われていることである。何故にこれを忌むかという説明は一様でない。叩くと貧乏する、貧乏神がくるというもののほかに、この音を聴いて狐がくる、オサキ狐が集まつてくるという地方も関東には多い。多分はずつと大昔から、食器を叩くことは食物を与える信号であつて、転じてはこの類の小さな神を招きおろ降す方式となつていたものであろう。従つて一方ではやたらにその真似まねをするのを戒め、他の一方ではまたこの方法をもつて児を隠す神を喚よんだものと思う。俵藤太たわらとうだが持ってきた竜宮の宝物に、取れども尽きぬ米の俵

があつて、のちに子孫の者がその俵の尻を叩くと白い小蛇こへびが飛びだして米が尽きたと称するのも、もし別系統でなければ同じ慣習の変化だとみてよろしい。いずれにしても迷子の鉦太鼓が、その子に聴かせる目的でなかつたことだけは、かやせ戻せとなごとという唱え言ごんごからでも、推定することが難くないのである。

加賀の能美郡なども、天狗の人を隠した話の多かつたことは、近年刊行した『能美郡誌』を見るとよくわかる。同じ郡の遊泉寺村では、今から二十年ほど前に伊右衛門という老人が神隠しに遭つた。村中が手分けをして探ししまわった結果、隣部落と地境じさかいの小山の中腹、土地で神様松かみさまという傘の形をした松の樹の下に、青い顔をして坐すわつっているのを見つけたという。しかるに村の人たちがこの老人を探しはあるいた時には、鰐食さばつた伊右衛門やいと、口々に唱えたという話だが、これはいつでもそういう習わしで、神様ことに天狗は最も鰐が嫌いだから、こういえば必ず隠した者を出すものと信じていたのである（立山徳治君談）。

琉球で物迷ものまよいと名づけて物に隠された人を探すのにも、部落中の青年は手分けをして、森や洞窟などの中を棒を持ち銅鑼どうらを叩き、どこそこの誰々やい、赤豆飯あかまめまいを食えよと大きな声で呼びまわるという。よく似た話だがこれも神靈がこれを悪むのか否かは分らぬ。内

地の小豆飯はむしろこの類の神の好むところと考えられている。鰐という魚の信仰上の地位は、^{つまり}詳かに調べてみる必要があるのだが、今まで誰も手をつけていなかつた。

不思議な事情からいなくなつてしまふ者は、決して少年小児ばかりではなかつた。数が少なかつたろうが成長した男女もまた隠され、そうして戻つてくる者も甚だわざかであつた。ただし壯年の男などはよくよくの場合でないと、人はこれを驅落ちまたは出^{しゆつほん}奔^{ぼん}と認めて、神隠しとはいわなかつた。神隠しの特徴としては永遠にいなくなる以前、必ず一度だけは親族か知音の者にちらりとその姿を見せるのが法則であるように、ほとんといずれの地方でも信じられている。盆とか祭の宵とかの人込みの中で、ふと行きちがつて言葉などを掛けて別れ、おや今の男はこのごろいないといつて家で騒いでいたはずだがと心づき、すぐに取つて返して跡を追うて見たが、もうどこへ行つても影も見えなかつた、とう類の例ならば方々に伝えられている。これらは察するところ、樹下にきちんと脱ぎそろえた履物などと一様に、いかに若い者が^{きまぐ}気紛れな家出をする世の中になつても、なおその中には正しく神に召された者がありうることを我々の親たちが信じていようとした、努力の痕跡^{こんせき}とも解しえられぬことはない。

『西播怪談実記』という本に、揖保郡新宮村の民七兵衛、山に薪採りに行きて還らず、親兄弟歎き悲みしが、二年を経たる或る夜、村のうしろの山にきて七兵衛が戻つたぞと大声に呼ばわる。人々悦び近所一同山へ走り行くに、麓に行きつくころまではその声がしたが、登つてみると早何處はやどこにもいなかつた。天狗の下男にでもなつたものかと、村の内では話し合つていたが、その後この村から出て久しく江戸にいた者が東海道を帰つてくる途みちで、興津の宿みどりとかで七兵衛に出逢つた。これも互いに言葉を掛け別れたが家に帰つて聞くとこの話であつた。それからはついに風のたよりもなかつたということである。すなわちたつた一度でも村の山へきて呼ばわらぬと、人はやはり駆落ちと解する習いであつた故に、自然にこのような特徴が出てきたのである。

『九桂草堂隨筆』卷八には、また次のような話がある。広瀬旭莊先生の実験である。「我郷わがさと（豊後日田郡）に伏木ひたという山村あり。民家の子五六歳にて、夜啼なきて止やまず。戸外に追出す。其傍そのかたわらに山あり。声稍やや遠く山に登るやうに聞えければ驚きて尋ねしに終ついに行方知れず。のち後十余年にして、我同郷の人小一と云ふ者、日向の梓あづさごえ越こえと云ふ峯を過ぐるに、麓ふもとより怪しき長七八尺ばかり、満身に毛生じたる物上り来る。大いに怖しげれ走らんとすれども、体痺しびれて動かず。其物近づきて人語を為し、汝なんじいづくの者なりやと

問ふ。答へて日田といふ。其物、然らば我郷なり。汝伏木の児失せたることを聞きたりやと謂ふ。其事は聞けりと答ふ。其物、我即ち其児なり。其時我今仕_{つか}ふる所の者より収められて使役し、今は我も数山の事を領せりと謂ひて、懷_{ふところ}より橡_{とちのみ}実にて製したる餅_{もち}様_{よう}の物を出し、我父母存命ならば、是を届けてたまはれと謂ふ。何れの地に行きたまふかと問ふに、此_{これ}より椎葉山_{しいばやま}に向ふなりと言ひて別れ、それより路無き断崖に登るを見るに、その捷きこと鳥の如しいふ。話は余少年の時小一より聞けり。是れ即ち野人なるべし。」

一四 ことに若き女のしばしば隠されしこと

女の神隠しにはことに不思議が多かつた。これは岩手県の盛岡でかつて按摩から聴いた話であるが今からもう三十年も前の出来事であつた。この市に住んで醤油の行商をしていた男、留守の家には女房_{おもて}が一人で、或る日の火ともしごろに表の戸を開けてこの女が外に出て立つてゐる。ああ悪い時刻に出ているなど、近所の人たちは思つたそうだが、果してその晩からいなくなつた。亭主は気持ちがいのようになつて商売も打棄てて置いてそちこちと捜しまわつた。もしやと思つて岩手山の中腹の網張温泉_{あみはり}に出かけてその辺を尋ねてい

ると、とうとう一度だけ姿を見せたそうである。やはり時刻はもう暮近くに、なにげなしに外を見たところが、宿からわずか隔たつた山の根^ね 笹^{ざき}の中に、腰より上を出して立つていた。すぐに飛びだして近づき捕えようとしたが、見えていながらだんだんに遠くなり、 笹原づたいに峯の方へ影を没してしまったという。

またこれも同じ山の麓の 雪^{しづく} 石^{いし} という村にはこんな話もあつた。相應な農家で娘を嫁に^や 遣る日、飾り馬の上に花嫁を乗せて置いて、ほんのすこしの時間手間取つていたら、もう馬ばかりで娘はいなかつた。方々探しぬいていかにしても見当らぬとなつてからまた数箇月ものちの冬の晩に、近くの在所の辻^{つじ}の商い屋^{あきな}に、五六人の者が寄合つて夜^{よばなし} 話をしている最中、からりとくぐり戸を開けて酒を買いにきた女が、よく見るとあの娘であつた。

村の人たちは甚だしく動^{どう}顛^{てん}したときは、まず口を切る勇氣を失うもので、ぐずぐずとしているうちに酒を量らせて勘定をすまし、さつさと出て行つてしまつた。それというので寸刻も間を置かず、すぐに跡から飛びだして左右をみたが、もうどこにも姿は見えなかつた。多分は軒の上に誰かがいて、女が外へ出るや否や、ただちに空の方へ引張り上げたものだろうと、解釈せられていたということである。

单なる偶然からこの地方の話を、自分はまだいくつとなく聴いて記憶している。それが特に他の府県に比べて、例が多いということを意味せぬのはもちろんである。同県上閉伊郡の鱈沢ますざわという村で、これも近世の事らしいからもつと詳しく述べている人があろうが、或る農家の娘物に隠されて永く求むれども見えず、今は死んだ者とあきらめていると、ふと或る日田の掛稻かけいねの陰に、この女のきて立つているのを見た人があつた。その時はしかしうよほど気が荒くなつていて、普通の少女のようではなかつた。そうしてまたたちまち走り去つて、ついに再び還つてこなかつたといつては、『遠野物語』の中にも書いてある話は、同郡松崎村の寒戸さむどというところの民家で、若い娘が梨の樹の下に草履を脱いで置いたまま、行方知れずになつたことがあつた。三十何年を過ぎて或る時親類知音の者が其処に集まつてゐるところへ、きわめて古いさらばうてその女が戻つてきた。どうして帰つてきたのかと尋ねると、あまりみんなに逢いたかつたから一寸ちよつときた。それではまた行くといつて、たちまちいざれへか走り去つてしまつた。その日はひどい風の吹く日であつたといふことで、遠野一郷の人々は、今でも風の騒がしい秋の日になると、きょうは寒戸の婆ばばの還つてきそうな日だといつたとある。

これと全然似た言い伝えは、また三戸郡の櫛引村くしごきにもあつた。以前は大風の吹く日

には、きょうは伝三郎どうの娘がくるべと、人がことわざのようにしていつていたそだから、たとえば史実であつてももう年数が経過し、昔話の部類に入ろうとしているのである。風吹かぜふきということが一つの様式を備えているうえに、家に一族の集まつていたというのは、祭か法事の場合であつたろうが、それへ来合せたとあるからには、すでに幾分の靈の力を認めていたのである。釜石地方の名家板沢氏などでは、これに近い旧伝があつて毎年日を定め、昔行き隠れた女性が、何びとの眼にも触れることなしに、還つてくるように信じていた。盥たらいに水を入れて表おもての口に出し、新しい草履を揃えて置くと、いつのまにかその草履も板縁いたべりも、濡れているなどと噂せられた。この家のは娘でなくて、近く迎えた嫁女であつた。精密な記憶が家に伝わつており、いつのころよりか不滅院量外保寿大姉といふ戒名かいみょうをつけて祀まつっていた。家門を中心とした前代の信仰生活を、細かに比較研究したうえでなければ断定も下されぬが、恐らくはこれが神隠しに対する、一つ昔の我々の態度であつて、かりにただ一人の愛娘まなむすめなどを失うた淋しさは忍びがたくとも、同時にこれによつて家の貴さ、血の清さを証明したのみならず、さらにまた眷属けんぞく郷党きょうとうの信仰を、統一することができたものではないかと思う。

伊豆では今の田方郡田中村大字宗光寺の百姓惣兵衛たがたそうべえが娘はつ十七歳、今から二百十余年前の宝永ごろに、突然家出をして行方不明であつた。はつの母親が没して三十三回忌の日、還つてきて家の前に立つていた。近所の者が見つけて声をかけると、答えもせずして走りだしまいたいすれかへ往つてしまつた。その後も天城山まきに薪きこを樵り、又は宮木ひを曳きなどに入つた者がおりおりこの女を見かけることがあつた。いつも十七八の顔形で、身には木の葉などを綴つづり合わせた珍しい衣服を纏まといっていた。言葉をかけると答えもなく、ただちに遁にげ去るを常としたと『槃遊余録』はんゆうよろくの第三編、寛政四年の紀行のうちに見えている。甲州では逸見筋浅尾村の孫左衛門を始めとし、金御岳かねのみだけに入つて仙人となつたという者少なからず、東河内領の三沢村にも、薬を常磐山に採つて還らなかつた医者がある。今も時としてその姿を幽谷の間に見る者があつて、土人は一様にこれを山男と名づけているが、その出身の村なり家なりでは、永くその前後の事情を語り伝えて、むしろ因縁の空むなしからざることを感じていたようでもあつた。

一五 生きているかと思う場合多かりしこと

少なくとも血を分けた親兄弟の情としては、これが本人ただ一人の心の迷がら出たものと解してしまったことが昔はできなかつた。一人ではどうてい深い山の奥などへ、入つて行くはずのない童子や女房たちが、現に入つて行き、また多くは戻つて来ぬのだから、誰か誘うた者があつたことを、想像するに至つたのも自然である。實際また山の生活に関する記録の不完全、多くの平野人の法外な無識を反省してみても、かつてそういう奪略者が絶対になかつたとは断言することをえない。問題はただかくのごとき想像の中で、果してどこまでは一応根拠のある推測であり、またどの点からさきが単に畏怖に基づいたる迷信、ないしは誤解であつたろうかということである。

しかも自分たちの見るところをもつてすれば、右の問題の分堺線ぶんかいせんとともに、時代の移るにつれて始終一定していたわけでもないようである。例えば天狗さまがさらつて行くといふことは、ことに児童少年については近世に入つてから、甚だ頻繁ひんぱんに風説せられるようになつたけれども、中世以前には東大寺の良弁僧正らうべんそうぜいのように、鷲わしに取られたという話の方が多い。その中にもまた稀まれには命を助かつて慈悲の手に育てられ、ついには親の家へ戻つてきた者さえあるように、『今昔物語』などには語り伝えている。それから引続いてまた世上一般に、鬼が人間の子女を盗んで行くものと、思つていた時代もあつたので

ある。

鎌倉期の初頭あたりを一つの壠^{さかい}として、その鬼がまた天狗にその地位を委譲したのは、東国武士の実力増加、都鄙盛衰^{とひ}の事情を考え合わせても、そこでなんらかの時勢の変化を暗示するものがあるよう思う。その天狗の属性とてもゆくゆく著しく変遷して、もとより今をもつて古を推すことはできぬが、鬼の方にもやはり地方的に、または時代に相応した特色ともいうべきものがあつたらしいのである。例えば在原業平の悠遊^{ゆうゆう}していたころには、鬼一口^{おにひとつくち}に喰いてんけりといつたが、大江山の酒顛童子^{しゅてんどうじ}に至つては、都に出て多くの美女を捕え來り酌^{しゃく}をさせて酒を飲むような習癖^{しほき}があつたもののごとく、想像せしめた場合もないではなかつた。天狗ばかりは僧形であつただけに、感心に女には手を掛けないようだと話がきまると人は別にまた山賊^{さんぞく}の頭領^{きょうりゆう}という類の兎^{きつね}漢^{かん}を描き出して、とにかくにこの頻々^{ひんびん}たる人間失踪^{しつそう}の不思議を、説明せずにはおられないようであつた。しかも実際は小説・御伽草子・絵巻物^{えまきもの}以上に的確に真相を突留めることは、求めたからとてできることではなかつた。

別離を悲しむ人々の情からいえば、いかなる場合にもまだどこかの谷陰に、活きて時節を待つているものと、想像してみずにはいられなかつたでもあろうが、單にそのような

慾目よくめからでなくとも、現実に久しい歳月を過ぎてのち、ひよつこりと還つてきた先例もあれば、またしかに出逢であつたという人の話を、聞きだした場合も多かつたのである。単に深山に女の姿を見たというだけの噂ならば、その他にもまだいろいろ語り伝えられていた。たとえそれがわが里でいなくなつた者とは何の関係もなく全然見ず知らずの別の土地の事件であつても、とにかくに人居を遠く離れた寂寥せきりょうたる別世界にも、なお何か人間の活きて行く道があるらしいという推測は、どのくらい神隠しの子の親たちの心を、慰めていたかわからぬので、それがまた転じてはこの不思議の永く行われ、気の狂うた者の自然に山に向う原因ともなつたのは、是非もない次第であつた。

かつては天狗に関する古来の文献を、集めて比較しようとした人がおりおりあつたがこれは失望せねばならぬ労作であつた。資料を古く弘く求めてみればみるほど輪廓りんかくは次第に茫漠ぼうばくとなるのは、最初から名称以外にたくさんの一致がなかつた結果である。例えば天狗とは一体どんなものかと聞いてみると、今日誰しも答えるのは鼻のむやみに高いことであるが、これとても狩野古方眼かのうこほうげんが始めて夢想したという説もあつて、中古には緋の衣こころもはうちわに羽団扇はなたかさまなどを持つた鼻高様はなたかさまは想像することができなかつたのである。そのうえに何

々坊の輩下^{はいか}という天狗だけは、口が嘴^{くちばし}になり鼻は穴だけがその左右についている。同じ一類で一方は人のごとく、他方は翼があつて鳥に手足を加えたもののがことなることは、ほとんどありえざる話であるが、人は単に変形自在をもつてこれを説明して、しからば本来の面目如何^{めんもくいかん}という点を、考えずに済ましていたのである。それなら実際の行動の上に、何か古今を一貫した特色でもあるかというと、中世の天狗はふらりときて人に憑くこと野狐のごとく、或いは左道の家に祭られて人を害するは、近世の犬神オサキのごとくであつたが、今は絶えてその類の非難を伝えない。或いは智弁学問ある法師の増上慢^{ぞうじょうまん}が、しばしば生きながら天狗道に身を落さしめたという話もある。平田先生などは特にこの点ばかり、仏者の言を承認しようとしているが、これさえ近世の天狗はもう忘れたもののごとく、むしろしばしば人間の慢心を懲らし戒めたという実例さえあって、自慢を天狗といふ昔からの諺^{ことわざ}も、もはや根拠のないものになろうとしている。それというのが時代により地方によつて、名は同じでも物が知らぬ間に変つていたからである。書物はこういう場合にはたいていはむしろ混乱の種であつた。学者ばかりがひとりで土地の人々の知らぬことを、考えていた例は多かつた。なるほど天狗という名だけは最初仏者などから教わつたろうが奇^き怪^{つかい}はずつと以前から引続いてあつたわけで、学者に言わせるとそんなはずはないとい

う不思議が、どしどしと現れる。日本で物を買うような理窟には行かなかつたのである。天狗をグヒンというに至つた原因もまだ不明だが、地方によつてはこれを山の神といい、または大人・山人ともいつて、山男と同一視するところもある。そうして必ずしも兜巾篠懸の山伏姿でなく特に護法と称して名ある山寺などに従属するものでも、その仏教に対する信心は寺侍・寺百姓以上ではなかつた。いわんや自由な森林の中にいると、いう者に至つては、僧徒らしい氣分などは微塵もなく、ただ非凡なる怪力と強烈なる感情、極端に清浄を愛して叨りに俗衆の近づくを憎み、ことに隱形自在にして恩讐ともに常人の意表に出でた故に、畏れ崇められていたので、この点はむしろ日本固有の山野の神に近かつた。名称のどこまでも借り物であつて、我々の精神生活のこれに左右せられた部分の存外に小さかつたことは、これからだけでも推論してよいのである。山中にサトリという怪物がいる話はよく方々の田舎で聴くことである。人の腹で思うことをすぐ覚つて、遁げようと思つてゐるなどといひあてるので、怖しくてどうにもこうにもならぬ。それが桶屋とか杉の皮を剥ぐ者とかと対談している際に、不意に手がすべつて杉の皮なり竹の輪の端が強く相手を打つと、人間という者は思わぬことをするから油断がならぬといつて、逃げ去つたというのが昔話である。それを四国などでは山爺の話として伝え、木葉の衣を

着て出てきたともいえば、中部日本では天狗様が遣つてきて、桶屋の竹に高い鼻を彈かれたなどと語つている。その土地次第でこういつても通用したのである。オニなども今では角あつて虎の皮をたふさぎとし、必ず地獄に住んで亡者もうじやをさいなむ者のごとく、解するのが普通になつたらしいが、その古来の表現は誠に千変万化でまた若干はこれに充てたる漢語の鬼の字によつて、世上の解説を混乱せしめている。しかも諸国の山中に保存せられた彼らの遺跡、ないしは多くの伝説によつて考へると、少なくとも或る時代には、近世天狗と名づけた魔物の所業の大部分を、管轄していたこともあるのである。いずれにしても我々の恐怖には現実の基礎があつた。単に輸入の名称によつて、空に想像し始めたものではなかつたのである。

不在者の生死ということは非常に大きな問題であつた。どうせいないのは同じだと、言つてすませるわけには行かなかつた。生者と死者とでは、これに対する血縁の人々の仕向けが、正反対に異ならねばならなかつたからである。生きてゐる者の救済も必要ではあるがこれは徐おもむろに時節を待つてゐることもできる。これに反して死者は魂が自由になつて、もう家の近くに戻つてきているかも知れぬ。処理せられぬ亡魂ほど危険なものはないなかつた。

或いは淋しさのあまりに親族故旧を誘うこともあり、または人知れぬ腹立ちのために、あればまわることもしばしばあつた。その予防の手段は仏教以前から、いろいろ綿密に講究せられていたのである。しこうしてその手段は通例甚だ煩わしい。かつ誤まつて生者のために行うときは、その害もまた小さくなかった。故に単なる愛惜の情からでなくとも、一日も早くなんらかの兆候を求めて隠れてもなお生存していることを確めておく必要があつたのである。アンデルセンが「月の物語」の初章に、深夜に谷川に降つて燈を水に流し、思う男の安否を卜せんとしたインドの少女が「活きてる」と悦んで叫んだ光景が叙述である。普通は生死を軽く考える東洋人が、この際ばかり特に執着の切なる情を表わす理由は、全く死に伴うた嚴重の方式があつたためで、旅の別れの哀れな歌にも、かつはこの心元なさがまじっていたのである。夢というものの疎かにせられなかつた原因もここにある。互いに見よう見えようという約束が、言わず語らずに結ばれていたのである。それが頼みにしにくくなつてのち、書置かきおきという風習が次第に行われた。神隠しだけはこういう一切の予定を裏切つて、突如として茫漠ぼうばくの中に入つてしまふのだが、しかも前後の事情と代々の経験とによつて、一応はやや幸福の方の推測を下すことが、存外にむつかしくなかつたらしいのである。

一六 深山の婚姻のこと

昔話の中にもおりおり同じ例を伝えているために、かえつて信じうる人が少なかろうかと思うがこれはすでに十七八年も以前に筆記しておいた陸中南部の出来事であつてこの小さな研究と深い因縁がある故に、今一度じつと考えて見ようと思うのである。或る村の農家の娘、栗を拾いに山に入ったまま還つて来ず、親はもう死んだ者とあきらめて、枕を形代に葬送をすませてしまつて、また二三年も過ぎてからの事であつた。村の猟人の某という者が、五葉山ごようざんの中腹の大きな岩の陰において、この女に行逢つて互いに喫驚ゆきあひつきりしたという話である。

あの日に山で怖ろしい人にさらわれ、今はこんなところにきて一緒に住んでいる。に遁げて還ろうにも少しも隙すきがない。そういううちにもここへくるかも知れぬ。どんなことをするか分らぬというので碌に話も聞かずに早々に立退いてしまつたということである。その男というのは全体どんな人かと猟人が尋ねると、自分の眼には世の常の人間のように見えるが、人はどう思うやらわからぬ。ただ眼の色が恐ろしくて、せいがずんと高い。時々は

同じような人が四五人も寄り集まつて、何事か話をしてまたいざれへか出て行く。食べ物なども外から持つて還るのをみると、町へも買物に行くのかも知れぬ。また子どもはもうなんべんか産んだけれども、似ていなから俺の児おれではないといって、殺すのか棄てるのか、みないずれへか持つて行つてしまつたと、その女が語つたそうである。

山が同じく五葉山であるから、一つの話ではないかとも思うが或いはまた次のように話す者もあつた。女は獵人に向かつて、お前のまへとこうして話しているところを、もしか見られると大変だから、早く還つてくれといつたが、出逢つてみた以上は連れて還らねばすまぬと、強いて手を取つて山を下り、ようやく人里ひとざとに近くなつたと思うころに、いきなり後から怖ろしい背の高い男が飛んできて、女を奪い返して山の中へ走り込んだともいつている。維新前後の出来事であつたらしく、まだその娘の男親だけは、生存しているといつて、家の名まで語つたそうである（佐々木君報）。これだけ込み入つたかつ筋の通つた事件は、一人の獵人の作為に出たと思われぬはもちろん、よもや突然の幻覚ではなかろうと思うが、それを確認させるだけの証拠も、残念ながらもう存在せぬのである。ただ少なくとも陸中五葉山ふもとの麓の村里には、今でもこれを聴いて寸毫すんごうも疑い能わざる人々が、住んでいることだけは事実である。そうして彼らがほぼ前の話を忘れようとすることになると、また新

たに少し似たような話が、どこからともなく伝わつてくることに、これまでほんとまつっていたのである。

右の珍しい実例の中でことに自分たちが大切な点と考えるのは、不思議なる深山の媚の談話の一部分が女房にも意味がわかつていたということと、その奇怪な家庭における男の嫉妬しつとが、極端に強烈なものであつて、わが子をさえ信じえなかつたほどの不安を与えていたことである。すなわち彼らはもし眞の人間であつたとしたらあまりにも我々と遠く、もしさまた神か魔物かだつたというならば、あまりにも人間に近かつたのであるが、しかも山の谷に住んだ日本の農民たちが、これを聴いてありうべからずとすることができなかつたとすれば、そは必ずしも漠然ばくぜんたる空夢ではなかつたろう。誤つたにもせよなんらかの実験、なんらかの推理のあらかじめ素地そじをなしたものが、必ずあつたはずと思う。現代人の物を信ぜざる権利は、決してこれによつて根強い全民衆の迷信を、無視しうるまでの力あるものではないのである。

かつて三河の宝飯郡の某村で、狸たぬきが一人の若者に憑いたことがあつた。狐などよりは口軽く、むやみにいろいろのことをしてやべるのが、この獸の特性とせられているが、この時

も問わず語りにおれはこの村の誰という女を、山へ連れて往つて女房にしているといった。でたらめかとは思つたが、實際ちょうどその女がいなくなつて、しきりに搜してゐる際であつた故に、根ほり葉ほりして隠しておくという場処を聞いただし、もしやといふので山の中を搜して見ると果して岩穴の奥とかにその娘がいたということである。還つてきてから本人が、どういう風に顛末を語つたか。この話をしてくれた人も聞いてはおらず、また強いて詳しくその点を究めるまでもないか知らぬが、風説にもせよ世を避けて山に入つて行く若い女を一種の婚姻のごとく解する習わしは弘く行なわれていうので、それが不条理であればあるだけに、底に隠れた最初の原因が、ことに学問として尋ねて見る価値を生ずるのである。猿の婿入の昔話は、前にすでに大要を述べておいたが、これにも欺き終おせて無事に還つてきたという童話式のもののほかに、どうとう娘を取られたという因縁話も伝わつてゐる。竜蛇の婚姻に至つては末遂げて再び還らなかつたという例がことに多い。黒髪長くまみ清らかなる者は何よりもこれを愛好する。齡盛りにして忽然と身を隠したとすれば、人に非^{あら}ずんば何か他の物が、これを求めたと推断するが自然である。特に山男の場合に限つて、目するに現実の遭遇をもつてする理由はないのかも知れぬ。ましてや世界の諸民族に共通なる、いわゆるビートス・エンド・ビウティーの物語の、これが根

原の動機をなすかのごとく、説かんすることは速断に失するであろう。また今日までの資料では、強いてその見解を立てるだけの勇気は、自分たちにもまだないのだが、ただ注意してもよいことは日本という国には、近世に入つてからもこの類の話が特に数多く、またしばしば新たなる実例をもつて、古伝を保障しようとしていたことである。普通の場合には俗に「みいられた」とも称し、女が何かの機会に選定を受けたことになつており、伊豆の三宅島などには山に住む馬の神がみいつたという話もあつて、過度に素朴なる口碑は諸国に多く、そうでなければ不思議な因縁がその女の生まれた時から附纏つきまとい、または新たなる親の約束などがあつて、自然にその運命に向わねばならなかつたように、語り伝えているに反して、別に我々が聴きえたる近年の例は、全く偶然の不幸から掠奪せられて山に入つている。そうしていかにも人間らしい強い執着をもつて、愛せられかつ守られていたというのである。それを单なる昔話の列に押並おしならべて、空想豊かなる好事家が、勝手な尾鱗おひれを附添つきそえたかのごとく解することは、少なくとも私が集めてみたいくつかの旁証ほうじょうが、断じてこれを許さないのである。

一七 鬼の子の里にも産まれしこと

母は往々にして不當に疑われた。似ておらぬからわが子でないという単純に失した推断は必ずしも獨り五葉山中の山人のみの専売でもなかつたのである。至つて平和なる里中にも親に似ぬ子は鬼子という俚諺は、今もつて行われていて、時々はまたこれを裏書するような事件が、発生したとさえ伝えられるのである。

「日本はおろかなる風俗ありて、歯の生えたる子を生みて、鬼の子と謂ひて殺しぬ」と、『徒然慰草』の巻三には記してある。江戸時代初め頃の人の著述である。なおそれよりも遙かに古く、『東山往来』という書物の消息文の中にも、家の女中が歯の生えた児を生んだ。これ鬼なり山野に埋むるにしかずと近隣の者が勧めるが、いかがしたものどうかという相談に答えて、坊主にするのが一番よろしかろうといつてはいる。すなわち以前は相應に頻々と、処々にこのような異様の出来事があつたかと思われるるのである。

けだし人はどうてい凡庸を愛せずにはおられなかつた者であろうか。前代の英雄や偉人の生い立ちに關しては、いかなる奇瑞きずいでも承認しておりながら、事一たび各自の家の生活に交渉するときは、寸毫も異常を容赦ゆうしゃすることができなかつた。近世に入つてからも、稀まれには歯が生えて産れるほどの異相の子を儲もうけると、たいていは動顛どうてんして即座にこれ

殺し、これによつて酒顛童子・茨木童子の如き悪業の根を絶つた代りには、一方にはまた道場法師や武藏坊弁慶の如き、絶倫の勇武強力を發揮する機会をも与えなかつた。これ恐らくは天下太平の世の一弱点であつたろう。

しかも胎内変化の生理学には、今日なお説き明かしえない神秘の法則もあるのか。このような奇怪な現象にも、やはり時代と地方とによつて、一種の流行のごときものがあつた。詳しく述べるならば、鬼を怖れた社会には鬼が多く出てあれば、天狗を警戒していると天狗が子供を奪うのと同様に、牙ありまた角ある赤ん坊の最も数多く生まれたのは、いわゆる魔物の威力を十二分に承認して、農村家庭の平和と幸福までが、時あつて彼らによつて左右せられるかのごとく、氣遣つていた人々の部落の中であつた。

鬼子の最も怖ろしい例としては、明応七年の昔、京の東山の獅子が谷たにという村の話が、『奇異雜談集』の中に詳しく報ぜられている。『玄同放言』三卷下には全文を引用しているが、記事にはあやふやな部分がちつともなく、少なくとも至つて精確なる噂の聞書きである。その大要のみを挙げると、この家の女房三度まで異物を分娩し四番目に産んだのがこの鬼子であつた。生まれ落ちたとき大きさ三歳子のごとく、やがてそこらを走

りあるく故に、父追いかけて取りすくめ膝^{ひざ}の下に押しつけてみれば、色赤きこと朱の^{しゆ}ごとく、両眼の他に額^{ひたい}になお一つの目あり、口広く耳に及び、上に歯二つ下に歯二つ生えていた。父嫡^{ちやくし}子をよびて横槌^{よこづち}を持つてこいというと、鬼子これを聞いて父が手に咬みつくのを、その槌をもつて頻りに打つて殺してしまつた。人集まりてこれを見ること限りなしとある。その死骸^{しがい}は西の^{おおじしんによど}大路真如堂^{おおじしんじやうどう}の南、山際の崖^{がけ}の下に深く埋めた。ところがその翌日田舎の者が三人、梯子^{はしご}をかたげてこの下を通り、崖の土の少しうごもてるを見て、土竜鼠^{もちねずみ}がいるといつて刃^{おうこ}のさきで突いて見ると、ひょっこりとその鬼子が出た。三人大いに驚いてこれは聞き及んだ獅子^じが谷の鬼子だ。ただ早く殺すがよいと、刃を揮^{ふる}て頻に打ち、ついにこれを叩き殺した。それを慘酷^{ざんく}な話だが、繩をつけて京の町まで曳^ひいてくると途中多くの石に当つたけれども、皮膚強くして少しも破れずとまで書いてある。この事常樂時の^{せいあんけんりんこう}栖安軒琳公^{きあんけんりんこう}幼少^{かづしき}喝^{かく}食の時、崖の下にて打ち殺すをまのあたり見たりといえりとあつて、事件の当時から約九十年後の記述である。

何故に親が大急ぎで、牙の生えた赤子を殺戮^{さつりく}せねばならなかつたかは、じつは必ずしも明瞭ではない。家の外聞とか恥とかいうのも条理に合わなかつた。殺してこれを清める

望みはなかつたのみならず、匿し終おせた場合さえ少なかつた。しからば活かして置いて何が悪いかと尋ねてみると、これまた格別のことはなかつたのである。兇暴無類の評ある大江山の酒顛童子、その子分か義兄弟のごとく考えられた茨木童子なども、単に今まで見ず知らずの他人に対して残忍であつたというのみで、翻つてその家庭生活を検すれば、思いのほかなるものがあつた。『越後名寄』卷三十三その他の所伝によれば、酒顛童子はこの国西蒲原郡砂子塚いさごづか、または西川桜林村の出身と称しておののその旧宅の址あとがあつた。附近の和納わのうという村にも後に引越してきたといつて今なお榎の老木ある童子屋敷、下さげな童子田どうじたと呼ぶ水田もあつた。童子幼名を外道丸と名づけられ美童であつた。父の名は否瀬善次兵衛俊兼、戸隠山九頭竜権現くずりゆうごんげんの申し兒であつて、母の胎内に十六箇月いたといふだけが、親に迷惑をかけたといえればかけたのである。和納の楞嚴寺りょうごんじで文字を習い、国く上の寺に上つて侍童となるまでは不良少年でも何でもなかつた。茨木童子の故郷も摂津にある方が正しいのかも知れぬが、これまた越後にも一箇處あつて、今の古志郡荷頃村大字軽井沢、茨木善次右衛門はその生家と称し、連綿として若干の記憶を伝えていた。例えば家の背後に童子が栖んだという岩屋、それは崩れてその跡に清き泉湧わき、流の末には十坪ばかりの空地あつて、童子出生の地と称して永く耕作をさせなかつた。悪人に対する記念

ではなかつたのである。

攝州川辺郡東富松の部落においては、すでに茨木童子の家筋は絶えたかわりに、更に一段と心を動かすべき物語が残つていた。『攝陽群談』卷十に曰う。童子生まれながらにして牙生い髪長く、眼に光あつて強盛なること成人に超えし故に、一族畏怖してこれを茨木の辺に棄てたところ、丹波千丈岳の強盜酒顛童子拾い還りて養育して賊徒となす云々。しかも両親がのちに病に罹つて同じ枕に寝ているのを、術をもつて遙かにこれを知り、心配をして見舞に還つてきたというのは、やはり松崎の寒戸の婆などの例であろう。ただいまは京都に留まつて、東寺の辺に安住している。人に怖ろしい姿を見せぬよう、急いで還ろうと飛んで往つたという田圃路に、安東寺の字名などが残つており、その時親が悦んで団子を食わせた記念として、毎年同じ日に村では団子祭をするといつてゐる。

戦いがなくなり国中が統一してしまうまでは、こういう義理固い無茶者は、求めても養つて置く必要が時としてはあつた。いわば百姓の家に生まれたのが損だつたのである。肥後の川上彦斎の伝を見てもそう思うが、江戸幕府の初頭に刑せられたあぶれ者、大鳥一兵衛などについてはことにその感が深い。ほんのもう四十年か五十年早く生まれていた

ら、彼は大名になつたかも知れぬのである。一兵衛自身の身の上話というのは、『慶長見聞集』卷六に出てゐる。「武州大鳥といふ在所に利生あらたかなる十王まします。

母にて候ふ者子無きことを悲み、此十王堂に一七日籠り、満ずる曉に靈夢の告あり、懷胎して十八月にしてそれがし誕生せしに、骨柄たくましく面の色赤く、向ふ歯あつて髪はかぶろなり。立つて三足歩みたり。皆人是を見て惡鬼の生れけるかと驚き、既に害せんとせし處に、母之を見て謂ひけるやうは、なう暫く待ちたまへ思ふ仔細あり、是は十王への申し児なれば、其しるし有りて面の色赤し云々と申されければ、我を助け置き幼名を十王丸と謂へり」とある。祈る仏も多くあつた中に、特に閻魔に児を申したというのは、別に近代の母親の相続せざる、一種戦国時代相應の理想があつたためかと思う。そうではないまでも大王が事を好み、余計な迷惑を信徒に与えんとしたのでないことは、一般にこれを認めていたように見えるが、しかもそれは京都とその附近で、盛んに牙ある赤子を撲ぼくさつ殺した時代よりも、またずつと後年の田舎の事であつた。

内田邦彦君の『南總之俚俗』の中に、東上総の本納辺の慣習として、鬼子が生まれると歳神様へ上げた棒で叩くとある。これとよく似たことで今日弘く行われているのは赤ん坊があまり早く例えば一年以内にあるき始めると、大きな餅をもちついてこれを脊負

わせ、それでもなおあるくと突き倒したりする親がある。鬼子というのは多分歯が生えて産れる子のことであろうが単に殺すことを許されぬ故にこんな方法をのちに代用したものとみても、なお歳神の棒ということには、考え出さねばならぬ深い意味がある。或いは本来はこのうえもない立派な児であるけれども凡人の家にとつては善^よ過ぎるために、その統御を神に委ねるの意味ではなかつたか。いずれにもせよ後世の民家で、怖れて殺したほど異常なる特徴は、同時にまた上古の英傑勇士名僧等の奇瑞として、尊敬して永く語り伝えたものと一致し、さらに常理をもつて判断しても、それがことごとく昔の個人生活の長處ばかりであつたことを考へると、野蛮な風習だから大昔からあつたろうと、手軽に推断することもできぬようである。人間の畸形^{きけい}にも不具と出来過ぎとが確かにある。大男も片輪^{たわ}のうちに算^{かぞ}えるのは、いわゆる鎖国時代の平民の哀れな遠慮であろう。蝦夷のシヤグシヤインやツキノイ、南の小島では赤蜂^{あかぶ}本瓦^{さほんがわら}や与那国^{よなぐに}の鬼虎^{おにとら}のごとき、容貌魁偉^{かいい}なる者は多くは終りを全うしなかつた。それを案じて家にこのような者の生まれるを忌んだのはおそらくは新國家主義の犠牲であつた。部曲が対立して争闘してやまなかつた時代には、いわゆる鬼の子はすなわち神の子で、それ故にこそ今も諸国の古塚を発^あくと、往々にして無名の八咫^{やつさな}脛^{けい}や長髓彦^{ながすねひこ}の骨が現れ、もしくは現れたと語り伝えて尊信しているのであ

る。

沖繩の『遺老説伝』には次のような話がある。「昔宮古島川満の邑に、天仁屋大司といふ天の神女、邑の東隅なる宮森に來り寓し、遂に目利真按司に嫁して三女一男を生む。夫死して妻のみ孤児を養ふに、第三女真嘉那志十三歳、忽ち懷胎して十三月にして一男を坐下す。頭には双角を生じ眼は環を懸くるが如く、手足は鷹の足に似たり。容貌人の形に非ず。故に之を名づけて目利真角嘉和良と謂ふ。年十四歳の時、祖母天仁屋及び母真嘉那志に相隨ひて、俱に白雲に乗りて天に升る。後年屢々目利真山に出現して、靈験を示す。邑人尊信して神岳と為す」と。ツカサは巫女を意味しまた多くは神の名であった。カワラは沖繩の按司と同じく、また頭目のことである。先島の神人には角を名につくもののが他にもある。すなわち神の子であり、のちまた神に隠されたる公けの記録が、かの島だけにはこれほど儼然として伝わっているのである。殺すということは少なくとも、古代一般の風習ではなかつた。

一八 学問はいまだこの不思議を解釈しえざること

嘘かとは思うが何郡何村の何某方と固有名詞が完全に伝わっている。今から三十年ほど以前に、愛媛県北部の或る山村で、若い嫁が難産をしたことがあった。その時腹の中から声を発する者があつて、おれは鬼の子だが殺さぬなら出て遣る。やもし殺すならば出て遣らぬがどうだと言う。活かして置くのは家の名折れとは思つたが、いつまでも産れないでは困る故に、皆で騙だまして決して殺さぬという約束をした。そうして待構えていて墓塚こざで押えて殺してしまつた。角の長さが二寸ばかり、秘密にしていたのを遠縁の親類の女が知つて、ついにこの話の話し手にしゃべつたのが私にも聴えた。ただしどうしてまたそのような怖ろしい物を孕はらんだかは、今に至るまで不明であるが、この近傍には鬼子の例少なからず、或る村の一家のごときは鬼の子の生まれる少し以前に、山中に入つて山姥やまうばのオツクネという物を拾い、それから物持ものもちになつたかわりに、またこういう出来事があつたという。オツクネとは方言で麻糸の球のこと、山姥の作つたのは人間の引いたのとは違つて、使つても使つてもなくならぬ。すなわちいわゆる尽きぬ宝であつた。

また大隅海上の屋久島やくのしまは、九州第一の高峯を擁して、山の力の今なお最も強烈な土地であるが、島の婦人は往々にして鬼の子を生むことありと、『三國名勝図会さんごくめいしょくゑ』には記している。「山中に入つたる時頻りしきに睡眠を催し、異人を夢みることあれば必ず娠はらむ。産

は常の如くにしてたゞ終りて後神氣快からずと雖死ぬやうなことは決して無い。生れた児は必ず歯を生じ且つ善く走る。仍て鬼子とは謂ふ也」とある。かくのごとき場合には、柳の枝をその児の口にくわえさせて、これを樹の枝に引懸け置くと、一夜を過ぐれば必ず失せてなくなるといつていた。普通の赤ん坊ならば無論活きているはずはないのだが、島の人々は或いは父方に引き取つて、養育しているものごとく考えていたものらしい。前後の状況は甚だしく相違するが、とにかくにこれも一種の神隠しではあつた。

日向南部の米良山の中にも、入つて働いている女の不時に睡くなるというところがあつた。そういう際にはよく妊娠することがあつて、これを蛇の所業のごとく信する者もあつたという。現に近年も某氏の夫人、春の頃に蕨を採りに往つてその事があつたので、もしや蛇の子ではないかと思つて、産をしてしまつまで一通りならぬ心痛をしたそうである。

古い書物に巨人の跡を踏み、或いは玄鳥の卵を呑んで感じて身ごもることありと記したのも、多分はこういう事情を意味したものであろう。気高い若人が夜深く訪ねてきたという類の話にも、最初に渓川の流に物を洗いに降りて、美しい丹塗りの箭が川上から泛んできたのを、拾うて還つて床の側に立てて置いたという例があるのを見ると、また異常なる感動をもつて、母となる予告のごとく解していた、昔の人の心持が察せられる。ただ村民

の信仰がおいおいに荒んできてこういう奇瑞の示された場合にも、怖畏の情ばかりひとり盛んで、とかくに生まれる子を粗末にした。大和の三輪みわの神話と豊後の尾形氏の古伝とは、或いはその系統を一にするかとの説あるにもかかわらず、後者においては神は誠に遠慮勝ちで、岩窟がんくつの底に潜んで永く再び出でなかつた。その他の地方の多くの類例に至つては、鍼の針に傷けられて命終るといい、普通には穴の口に近よつて人が立聴きするとも知らず蓬と菖蒲よもぎしょうぶの葉の秘密を漏した話などになつており、嫗岳うばたけの大太童だいたわらわのごとく子孫が多いに栄えたという場合は、今ではこれを見出すことがやや難くなつてゐるのである。『作陽志』には美作みまさかとまだ吉田郡こしほた越こしはな畑の大平山に牛鬼と名づくる怪あり。寛永中に村民の娘年二十ばかりなる者、恍惚こうこつとして一夜男子に逢う。自ら鍊山れんざんの役人と称してゐた。のちに孕はらんで産むところの子、両牙長く生い尾角ともに備わり、儼げんとして牛鬼のごとくであつたので父母怒つてこれを殺し、鍊の串に刺して路傍さへに暴した。これ村野の人後患えんを厭するの法なり云々とあつて、昔はさしも大切に事えた地方の神が、次第に輕ぜられのちついに絶縁して、いつとなく妖怪變化ようかいけいへんげの類に混じた経路を語つてゐる。そうしていづれの場合にも、鍊という金属が常に強大な破壊力であつた。屋久島などでもことに鍛冶かじの家が尊敬せられ、不思議な懷胎には必ず鍊滓かなくそを貰つてきて、柳の葉とともに合せ煎せんじて飲むことに

なつっていたそうである。

山に入つて山姥のオツクネなるものを拾つた故に、物持にもなつたかわり鬼子も生まれたという話には更に一段と豊富なる暗示を含んでいるらしい。山姥はなるほど多くの神童の母であり、同時にまた珍しい福分^{ふくわけ}の主^{ぬし}でもあつたことは、次々にもなお述べるように、諸国の昔からの話の種であつたが、特に常人の女性に角ある児を産ましめるために、彼女が干渉すべき必要はなかつたはずである。察するところ本来この不可思議の財宝は、むしろ不可思議な童子に伴うて神授せらるべきものであつたのを、人が忘却してこれを顧みぬようになつてから、山中の母ばかりが管理をすることとなつたのであろう。この想像を幾分か有力にするのは、ウブメ（産女）と称する道の傍^{かたわら}の怪物の話である。支那で姑獲^{こかく}と呼ぶ一種の鳥類をこれに当てて、産で死んだ婦人の怨魂^{えんこん}が化成するところだの、小児に害を与えるのを本業にしているのと、古い人たちは断定してしまつたようだが、それでは説明のできない著しい特徴には、少なくとも気に入つた人間だけには大きな幸福を授けようとしていた点である。すなわちウブメ鳥と名づくる一種の怪禽^{かいきん}の話を別にして考えると、ウブメは必ず深夜に道の畔^{あぜ}に出現し赤子^{あかご}を抱いてくれといつて通行人を呼び留める。喫^{びつく}

驚^りして逃げてくるようでは話にならぬが、幸いに勇士等が承諾してこれを抱き取ると、だんだんと重くなつてしまいには腕^{うで}が抜けそうになる。その昔話はこれから先が二つの様式に分かれ、よく見ると石地蔵であつた石であつたというのと、抱き手が名僧でありウブメは幽靈であつて、念仏または題目の力で苦難^{くなん}を済^{すく}つてやつたというのとあるが、いずれにしても満足に依託^{いたく}を果した場合には、非常に礼を言つて十分な報謝をしたことになつている。仏道の縁起に利用せられない方では、ウブメの礼物は黄金の袋であり、または取れども尽きぬ宝であった。時としてその代りに五十人百人力の力量を授けられたという例も多かつたことが、佐々木君の『東奥異聞^{とうおういぶん}』などには見えている。『今昔物語』以来の多くの実例では、ウブメに限らず道の神は女性で喜怒恩怨が一般に氣紛れ^{きまぐれ}であつた。或る者はこれに逢うて命を危くし、或る者はその因縁から幸運を捉えたことになつてゐる。後世の宗教観から見るときは甚だ不安であるためにだんだんと畏怖の情を加えたのだが、神に選択があり人の運に前定があつたと信じた時代には、これもまた祷るに足りた貴き靈であつたに相違ない。つまりは児を授けられるというのは優れた児を得るを意味し、申し児といふのは子のない親ばかりの願いではなかつたのである。そうして山姥のごとき境遇に入つても、なお金太郎のごとき子を欲しがつた社会が、かつて古い時代には確かにあつた

ことを、今はすでに人が忘れているのである。

一九 山の神を女性とする例多きこと

人の女房を山の神という理由としては、いろはの中ではヤマの上かみがオクだからなどと馬鹿げた説明はすでに多い。或いは里神樂さとかぐらの山の神の舞に、杓子しゃくしを手に持つて出て舞うからなどは、もつともらしいがやや循環論法じゅんかんろんぽうの嫌いがある。何の故に山の神たる者がかくのことく、人間の家刀いえとじ自の必ず持つべきものを、手草たぐさにとつて舞うことにはなつたのか。それがまず決すべき問題だといわねばならぬ。杓子はなるほど山中の產物であつて、最も敬虔けいけんに山神に奉仕する者が、これを製して平野に持ち下る習いではあつたが、ただそれのみでは神自らこれを重んじ、また多くの社においてこれを信徒に頒与するまでの理由にはならぬ。岐阜県の或る地方では以前は山の神の産衣うぶぎぬと称して長さの六七尺もある一つ身ひとみの着物を献上する風があつたというが、今はいかがであろうか。これに対しても子育ての守として、巨大なる山杓子を授けた社もあつたという。越前湯尾峠の孫杓子を始めとし、今でも杓子には小児安全の祈禱きとうを含むものが多い。山と女性または山と産育と

いうがごとき、一見して縁の遠そうな信仰が、かつてその間に介在しなかつたならば、とうてい我々の家内の者に、そのようないかめしい綽名あだなを付与するの機会は生じなかつたはずである。

山の神は通例諸国の山林において、清き木清き石について、臨時にこれを祀り、禰宜・ねぎ神主の沙汰はない場合が多いが、これを無格社以上の社殿の中に斎くとすれば、すなわち神の名を大山祇おおやまつみのみこと命、もしくは木花開耶姫尊このはなさくやひめのみことといい、稀にはその御姉の岩長姫命とも称えて、何とかして「神代卷」に合致させようとするのが、近世神道の習わしである。しかもこれは単に山神が或る地では男神であり、また他の地方では姫神であつたことを語る以外に、いささかも信仰の元の形を、跡づけた名称ではないのである。公認せられない山神の久しい物語には、今はおおよそ忘れたからよいようなものの、なかなかに尊き大山祇の御名を累すべきものが多かつた。木樵・草薙・狩人の群が、解しかつ信じていた空想は粗野であつた。それを片端かたはしから説き立てるることは心苦しいが、わずかに山の神に産衣を奉納したという点だけを考えてみても、自分たちはこれを岩長姫の御姉妹に托することの、由なき物ものごの好みであつたことを感ずるのである。十八九年前に自分は日向の市房山に近い椎葉の大河内という部落に一泊して、宿主の家に伝えた秘伝の「狩之卷かりのまき」

なるものを見せてもらつたことがある。その一節の山神祭文猶直しの法というのは、大よそ次のとおりである。不明の文字があるから、むしろ全文を書留めて置く方がよいと思う。

一、そもそも山の御神、数を申せば千二百神、本地薬師如來ほんぢやくしによらいにておはします。觀世音かんぜおんぱ菩薩さつの御弟子阿修羅王あしゅらおう、緊那羅王きんならおう、摩※羅王まこうらおうと申す仏は、日本の將軍に七代なりたまふ。天の浮橋うきはしの上にて、山の神千二百生れたまふ也。此山の御神の母御名を一い神かみの君と申す。此神産をして、三日までうぶ腹あたたかを温めず。此浮橋の上に立ちたまふ時、大摩の獵師毎日山に入り狩をして通る時に、山の神の母一神の君に行逢ひたまふとき、われ産をして今日三日になるまでうぶ腹を温めず、汝なんじが持ちしわり子を少し得さすべしと仰せける。大摩申しけるは、事やうく勿体なき御事也。此割子わりこと申すは、七日のあひだ行を成し、十歳未満の女子にせさせ、てんから犬にもくれじとて天じやうに上げ、ひみちこみちの袖そでの振合ぶりあいにも、不淨の日をきらひ申す。全く以て参らすまじとて過ぎにけり。其あとにて小摩の獵師に又行逢ひ、汝高をいふもの也。我こそ山神の母なり、産をして今日三日になるまで、産腹うぶはらを温めず。山の割子を得さすべしと乞ひたまふ。時に小摩申しけるは、さてさて人間の凡夫ぼんぶにては、産をしては早くうぶ腹うぶはらをあたゝめ申すこと也。ましてや三日

まで物をきこしめさずおはす事のいとをしや。今日山に入らず、明日山に入らずとも、幸ひ持ちし割子を、一神の君に参らせん。かしきのうごく、白き粢の物をきこしめせとてさゝげ奉る。其時一神の君大に悦び、いかに小摩、汝がりう早く聞（開？）かせん。是より丑寅の方にあたつて、とふ坂山といへるあり。七つの谷の落合に、りう三つを得さすべし。猶行末々たがふまじと誓ひて過ぎたまふ。急々如律令。敬白。

右の話が天つ神の新嘗の物忌の日に、富士と筑波と二処の神を訪れて、一方は宿を拒み他方はこれを許したという物語、巨旦将来・蘇民将来の二人の兄弟が、款待の厚薄によつて武塔天神に賞罰せられた話、世降つては弘法大師が来つて水を求めた時、悪い姥はこれを否んで罰せられ、善き姥は遠く汲んでその労を報いられたという口碑などと同じ系統の古い形であることは、誰人もこれを認め得る。かりに山の神の母に托した物語が日向ばかりの発明であつたとしてもその意味は深いと思つた。しかるについ近ごろになつて、佐々木君の『東奥異聞』には遠く離れた陸中の上閉伊郡と、羽後の北秋田郡のマタギの村とに、同じ話が口伝となつて残つていたことを報告している。羽後の方では八人組十人組という二組のマタギ、一方は忌を怖れてすぐなく断つたに反して、他の一方では小屋のかしら頭がただの女性でないと見て快く泊め、小屋で産をさせて介抱をした。陸中の山村

では獵人の名を万治磐司ばんじばんじといい、磐司がひとり血の穢れけがいを厭わず親切に世話をすると、二人の子を生んだと伝えている。いずれも山神がその好意をめでて、のちのち山の幸を保障したことは同じであつた。

獵師は船方ふなかたなどとは違ひ、各自独立した故郷があつて、互いに交通し混同する機会は決して多くない。それが奥州と九州の南端と、いつのころからかは知らぬがこれだけ類似した物語を伝えているのは必ず隠れた原因がなければならぬ。その原因を尋ね求めることは、今からではもうむつかしいであろうか否か。自分の知る限りにおいては、同じ古伝の破片かと思うものが、中部日本では上古以来の北国街道、近江から越前へ越える荒乳山あらちにもあつた。『義経記』卷七に義経の一行が、この峠を越えなすんで路の傍に休んだ時、アラチという山の名の由来を、弁慶が説明したことになつてゐる。今の人人が聴けば興の覚めるような話だが、加賀の白山しらやまの山の神女体こうのりゆうぐうの宮、志賀の辛崎からさき明神と御かたらいあつて、懷姪すでにその月に近く、同じくはわが国に還つて産をなされんとして、明神に扶たすけられてこの嶺を越えたもう折に、にわかに御おんもよお催さなしあつて、山中において神子誕生なされた。荒血こうけをこぼしたもうによつて荒血山こうけやまとはいうとある。『義経記』全篇の筋とは直接の交渉なき插話そうわだから、作者の新案とは考えられぬ。多分はこの書が成長

をした足利時代中期に、まだ若干の物知りの間に、記憶せられたいた口碑かと思う。しかも狹人の神を援助した話は、ここではこれと結びついていた痕跡がない。二国に分れ住む陰陽の神が、境の山の嶺に行き逢いたもうということは、大和と伊勢との間でも、信濃と越後の境でも、今なお土地の民はこれを語り伝えている。それと各地の道祖神の驚くべく粗野なる由来記とは、もちろんいざれが本、何れが末とはきめにくいが、脈絡は確かにあつたので、従つて深山の誕生というがごとき荒唐なる言い伝えも、成立ちうる余地は十分にあつた。ただ記録以前にあつては話し手の空想がわずかずつ働いて、始終輪廓が固定しなかつたというのみである。

例えれば淨瑠璃の「十二段草子」は、ほとんど『義経記』と同じころに今の形が整うたものかと思うのに同じ話がもう別様に語り伝えられ、志賀の辛崎明神を志賀寺の上人すなわち八十三歳で貴女に恋慕したという珍しい老僧の後日譚にしてしまつた。その時京極の御息所は年十七、上人三たびその御手をとつてわが胸に押し当てたので、すなわち懷胎なされたというのは、同じ近江国手孕村の古伝の混淆であるが、やはりまた荒乳の山中にして産の紐を解きたもうといい、取上げたる若子は面は六つ御手は十二ある異相の産児にして、ただちに都率天に昇り住したまい、のちに越前敦賀に降つてけいたい菩薩

薩と顯れ、北陸道を守護したもうなどと、大変なでたらめをいつてゐる。もちろんこの通りの話が一度でも土地に行われていたわけではなく、単に愛発の関が上古以来、北国往還の衝にあつたために、他の辺土に比べてはこの口碑が一層弘く、かつ一層不精確に流布したことをして、推定せしめるに過ぎぬのである。山姥が坂田公時の母であり、これを山中に養育したという話が、特に相州足柄の山に属することになつたのも、また全然同じ事情からであろうと思う。江戸時代中期の読み本として、『前太平記』という書物が世に現れるまでは、山姥の本場は必ずしも、明るい東海のほとりの山でなかつた。信州木曾の金時山などでは、現に金時母子の棲んだという巖窟、金時が産湯をつかつたという池の跡のほかに、麓の村々の石の上にはこの怪力童子の足跡なるものがいくらもあつて（『小谷口碑集』）、むしろ山姥が自由自在に山また山を山廻りするという、古い評判とも一致するのであるが、これを頼光四天王の一人に托するに至つて、足柄ばかりが有名になつたのみならず、前後ただ一度の奇瑞のごとく解せられて、かえつて俗説の遠い由来を、尋ねる途みちが絶えようとるのである。

『臥雲日件録』などを読んでみると、山姥が子を生むという話は少なくとも室町時代の、京都にもすでに行なわれていた。しかもおかしい事には一腹に三人の四人も、怖ろしい子

を生むというのである。従つてそれが山神の産養いという類の獵人等が言い伝えと、元は果して一つであるか否かも、容易に決断することはできぬのだが、山姥の信仰が今ほど雜駁つけくになつた上はいたしかたのないことである。近世の山姥は一方には極端に怖ろしく、鬼女とも名づくべき暴威を振いながら、他の一方ではおりおり里に現れて祭を受けまた幸福を授け、数々の平和な思い出をその土地に留めている。多くの山村では雪少なく冬の異常に暖かな場合に、ことしは山姥が産をするそうでといつていた。阿波の半田の中島山の山姥石は、山姥が子供をつれて時々はこの岩の上にきて、焚火たきびをしてあたらせるのを見たとにしてこの名がある。遠州奥山郷の久良幾山には、子生嶺こうみたねと名づくる岩石の地が明光寺の後の峯にあつて、天徳年間に山姥ここに住し三児を長養したと伝説せられる。竜頭りゆうずの山の主竜筑房ねしふさぶ、神之沢の山の主白髮童子、山住奥の院の常光房は、すなわちともにその山姥の子であつて、今も各地の神に祀られるのみか、しばしば深山の雪の上に足痕あしあとを留め、永く住民の畏敬を繋いでいた。『遠江国風土記伝』には平賀・矢部二家の先祖、勅を奉じて討伐にきたと誌しるしてはあるが、のちに和談成つて彼らの後裔こうえいもまた同じ神に仕えたことは、秋葉山やまづみ住の近世の歴史から、これを窺うことができるのである。

山住は地形が明白に我々に語るごとく、本来秋葉の奥の院であった。しかるにいつのこ

るよりか二處の信仰は分立して、三尺坊だいごんげん大權現の管轄は、ついに広大なる奥山には及ばなかつたのである。海道一帶の平地の民が、山住様に帰伏する心持は、なんと本社の神職たちが説明しようとも、全く山の御犬おいぬを迎えてきて、魔障盜賊を退ける目的の外に出なかつた。今こそ狼おおかみは山の神の使命として、神威を宣布する機関に過ぎぬだろうか、もし人類の宗教にも世に伴う進化がありとすれば、かつては狼をただちに神と信じて、畏敬祈願した時代があつて、その痕跡は数々の民間行事、ないしは覚束おぼつかない口碑の中などに、たどればこれを尋ね出すことができるわけである。山に繁殖する獸は数多いのに、ひとり狼の一族だけに対しては、産見舞さんみまいという慣習が近頃まであつた。遠江・三河には限つたことではないが、諸国の山村には御犬岩などと名づけて、御犬が子を育てる一定の場処があつた。いよいよ産があつたという風説が伝わると、里ではいろいろの食物を重箱に詰めて、わざわざ持参したという話は珍しくない。ただし果して狼の産婦が實際もらつて食べたか否かは確かでない。津久井の内郷うちごうなどでは赤飯の重箱を穴の口に置いてくると、兎や雉きじ子の類を返礼に入れて返したなどともうそろそろ昔話に化し去らんとしているが、秩ちぢ父の三峯山みつみねさんでは今もつて嚴重の作法があつて、これを御産立おこだての神事というそうである。

『三峯山誌』の記するところによれば、御眷属子を産まんとする時は、必ず淒せいぜん然たる

声を放つて鳴く。心直ぐなる者のみこれを聴くことを得べし。これを聴く者社務所に報じ来れば、神職は潔斎衣冠して、御炊上げと称して 小豆飯三升を炊き酒一升を添え、その者を案内として山に入り求むるに、必ず十坪ばかりの地の一本の枯草もなく掃き清めたかと思う場所がある。その地に注連を繞らし飯酒を供えて、祈祷して還るというので、これまた産の様子を見たのではないが、この神事のあつた年に限つて、必ず新たに一万人の信徒が増加するとさえ信じていた。

しかもこの話が単に山神信仰の一様式に過ぎなかつたことは、いわゆる御産立の神事が年を隔てて稀に行われていたのを見ても察せられる。狼は色欲の至つて薄い獸だという説もあり或いはこの獸の交るを見た者は、災があるという説があつたのも、つまりは山中天然の現象の観察が、かくのごとき信仰を誘うたものではなく、かねて山神の子を産むとういふ信仰があつたために、かかる偶然の出来事に対しても、なお神秘の感を抱かざるをえないかったことを意味するかと思う。狼が化けて老女となりもしくは老女が狼の姿をかりて、旅人を劫かしたという話は西洋にも弘く分布しているらしいが、日本での特色の一つは、これもまた分娩ということとの関係であつた。ことに阿波・土佐・伊予あたりの山村においては、身持の女房がにわかに産を催し、夫が水を汲みに谷に降つている間に、狼の群に

襲われたという話を伝え、または山小屋に産婦を残して里に出た間に、咬み殺されたといふ類の物語があつて、或いはこの獸が荒血の香を好むというがごとき、怪しい博物学の資料にもなつてゐるようだが実事としてはあまりに似通うた例のみ多く、しかもその故跡には大木や巖いわおがあつて、しばしば祟りたたかひを説き亡靈を伝えているのを見ると、これも本来同一系統の信仰が、次第に形態を変じて奇談小説に近づこうとしているものなることを、推測することができるのである。

ただし実際この問題はむつかしくて、もうこれ以上に深入するだけの力もないが、とにかくに自分が考えて見ようとしたのは、何故に多くの山の神が女性であつたかということであつた。山中誕生の奇怪なる昔語りが、かくいろいろの形をもつて弘くかつ久しく行われてゐるのは、或いはこの疑問の解決のために、大切な鍵かぎではなかつたかということである。日向の椎葉山しいばやまの「獵人伝書」かりうどでんしょに、山神の御母の名を一神の君と記しましたは安芸と石見を境する龜尾山の峠において、御子を生みたもうと伝うる神が、市杵島姫いちきしまひめのみこ命みことであつたというのも、自分にとつては一種の暗示である。イチは現代に至るまで、神に仕える女性を意味している。語の起こりはイツキメ（斎女）であつたろうが、また一の巫女みこなどとも書いて最も主神に近接する者の意味に解し、母と子とともにあるときは、そ

の子の名を小市こいちともまた市太郎とも伝えていた。代を重ねて神を代表する任務つかさどを掌つてい
るうちに、次第にわが始祖をも神と仰いで、時々は主神と混同する場合さえあつたのは、
言わば日本の固有宗教の一つの癖であつた。故に公の制度としては斎女の風は夙つとに衰えた
けれども、なお民間にあつては清くかつ慧かしこしい少女が、或いは神に召されて優れたる御子
を産み奉るべしという伝統的の空想を、全然脱却することをえなかつたのかと思う。信仰
圏外の批判をもつてすれば、これを精神疾患の遺伝ともいうことができるが、平和古風の
山村生活にあつてはまつたく由緒ある宗教現象の一つであつた。ことにまた深山の深い緑、
白々とした雲霧の奥には、しばしばその印象と記憶を新たにするだけの、天然の力が永く
のちのちまで潜んでいたのである。

一一〇 深山に小児を見るということ

日向の獵人の山神祭文にも、山の神千二百生まれたもうということがあるが、山を越え
て肥後の球磨郡くまに入ると、近山太郎、中山太郎、奥山太郎おのの三三千三百三十三体と唱
えて、一万に一つ足らぬ山の神の数を説くのである。かぞ算えた数字でないことはもとよりの

話だが、この点はすこぶる足柄山の金太郎などと、思想変化の方向を異にしているように思われる。いわゆる 大山祇命おおやまつみのみこと の附会が企てられた以前、山神の信仰には既に若干の混乱があつた。木樵・獵人きこり・かりうど がおののその道によつて拝んだほかに、野を耕す村人等は、春は山の神里に下つて田の神となり、秋過ぎて再び山に還りたもうと信じて、農作の前後に二度の祭を當むようになつた。伊賀地方の 鉤曳かぎひき の神事を始めとし、神を誘い下す珍しい慣習が多いのであるが、九州一帯ではこれに対して山ワロ・河ワロの俗伝が行われている。中国以東の川童が淵池ごとに孤居するに反して、九州でミズシンまたはガアラツパと称する者は、常に群をなして住んでいた。そうして冬に近づく時それがことごとく水の畔を去つて、山に還つて 山童やまわらわ となると考えられ、夏はまた低地に降りくること、山の神田の神の出入と同じであつた。紀州熊野の山中においてカシヤンボと称する靈物も、ほぼこれに類する習性を認められている。寂寥せきりょう たる樹林の底に働く人々が、わが心と描き出す幻の影にも、やはり父祖以来の約束があり、土地に根をさした歴史があつて、万人おのずから相似たる遭遇をする故に、かりに境を出るとたちまち笑われるほどのはかない実験でもなお信仰を支持するの力があつた。ましていわんやその間には今も一貫して、日本共通の古くからの法則が、まだいくらも残つていたのである。

『西遊記』その他の書物に九州の山童として記述してあるのは、他の府県でいう山男のことであつて、その挙動なり外貌なりは、とうてい川童の冬の間ばかり化してなる者は思われぬのであるが、別にこれ以外に谷の奥に潜んで小さな怪物のいるという言い伝えはあつたので、山童はもと恐らくはこの方に属した名であつた。壱岐の島では一人の旅人が、夜通しがやがやと宿の前を海に下つて行く足音を聴いた。夜明けて訊ねるとそれは山童の山から出てくる晩であつた。或いはまた山の麓の池川の堤つつみに、子供のかと思う小さな足痕あしあとの、無数に残つているのをみて、川童が山へ入つたという地方もある。秋の末近く寒い雨の降る夜などに、細い声を立てて渡り鳥の群が空を行くのを、あれがガアラツパだと耳を峙そばだてて聴く者もあつた。阿蘇の那羅延坊あそならえんぼうなどという山伏は、山家に住みながら川童予防の護符を発行した。すなわち夏日水辺に遊ぶ者の彼らの害を懼おそれるごとく、山に入つてはまた山童を忌み憚はばかつていた結果かと思われるが、近世に入つてからその実例がようやく減少した。大体にこの小さき神は、人間の中の小さい者も同じように、気軽な悪戯いたずらが多くて驚かすより以上の害は企てえなかつた。注意をすればこれを防ぐことができたために、のち次第に人がその威力を無視するに至つたのである。『觀惠交話』という二百二年ほど前の書物には、豊後の国かと思う或る山奥に、せこ子こと称する怪物がいる話を載せ

て いる。形は三尺から四尺、顔の眞中まんなかに眼がただ一つであるほか、全く人間の通りで、身には毛もなくまた何も着ず、二三十ずつ連れだってあるく。人これに逢えども害を作さず、大工の持つ墨壺すみつぼを事の外ほかほしがれでも、遣れば悪しとて与えずと杣そまたちは語る。言葉は聞えず、声はひゅうひゅうと高く響く由なりといつて いる。

眼が一つということは突然に聞けば仰天するが、土佐でも越後でも、また朝鮮でも、或いは遠く離れてヨーロッパの多くの国の田舎でも、こんな境遇の非類の物には、おりおり附いて廻る噂である。どうしてそういう風に目に見えたかは、残念ながらまだ明白に判らぬというまででまずは怪物の証拠とでもいうべきものであつた。大和・吉野の山中においては、また木の子と名づくるおよそ三四歳の小児ほどの者がいた。身には木の葉を着てゐるところである。これは『扶桑怪談実記』の誌すところであつて、その姿ありともなしとも定まらずなどと至つて漠然たる話ながら、山働きの者おりおり油断をすると木の子に弁当を盗まれることがあるので、木の子見ゆるや否や棒をもつてこれを追い散らすを常とすともあれば、少なくとも多数の者が知つていたのである。このほかにも秋田の早口沢の奥に鬼童こくてんざわという者の住むことは、『黒甜瑣語』三編の四に見え、土佐の大忍おおしの郷の山中に、笑い男という十四五歳の少年が出て笑うことが、『土州淵岳志』に書留めてある。それが誇

張でよりもしくは誤解なることは、細かに読んで見ずとも断定してよいのであるが、こういう偶然の一一致がある以上は、誤解にもなお尋ねべき原因があるわけである。

その上にまた時としては、誤解とも誇張とも考えられぬ場合もある。これはみなかたくまぐ楠氏の文通によつて知つたのだが、前年東部熊野の何とか峠を越えようとした旅人、不

意に路傍の笹原の中から、がさがさと幼児が一人這い出してきたのを見てびっくりして急いで山を走り降つた。それから幾日かを経て同じ山道を戻つてくると、今度はその子供が首を斬きられて同じあたりに死んでいたのを見たという。頭も尻尾もなく話はただこれだけだが、その簡単さがむしろこの噂の人の作った物語でないことを感ぜしめる。南方氏の書状はこれにつけ加えて、インドは地方によつて狼の穴から生きた人間の赤児を拾つてきた事件が今でも新聞その他におりおり報ぜられる。この国は狼の害甚だ多く、小児の食われる実例が毎年なかなかの数に達し、狼に食われた子供の首飾・腕飾の落ちたのを、山をあるいては拾い集める職業さえある。最近のロミユルスはすなわちこの連中によつて発見せられるので、狼が飽満して偶然に食い残した子供が、無邪気に食を求めて狼の乳を吸い、自然に猛獸の愛情を喚起して狼の仔とともに育てられるのだ。或る孤児院へ連れてきた童子などは、四つ這よいをして生肉のほかは食わず、うなる以外に言語を知らず、拳動が

全然狼の通りであつたと報告せられていると示された。ただしこの種の出来事は必ず昔からであろうが、これに基づいて狼を靈物とした信仰はまだ聞かぬに反して、日本の狼は山の神であつても子供を取つたという話ばかり多く伝わり、助け育てたという実例はないようである。故に性急にこの方面から山の赤子の説明を引出そうとしてはならぬのである。

二一 山姥を妖怪なりとも考えがたきこと

山姥・山姫は里に住む人々が、もと若干の尊敬をもつて付与したる美称であつて、或いはそう呼ばれてもよい不思議なる女性が、かつて諸処の深山にいたことだけは、ほぼ疑いを容れざる日本の現実であつた。ただしこれに関する近世の記録と口承とは、甚だしく不精確であつた故に最も細心の注意をもつて、その誤解誇張を弁別する必要があるのはもちろんである。自分が前に列記したいくつかの見聞談のごとく、女が中年から親の家を去つて、彼らの仲間に加わつたという例のほかに、別に最初から山で生まれたかと思われる山女も往々にして人の目に触れた。これも熊野の山中において、白い姿をした女が野猪の群やちよ^まを追いかけて、出てくることがあると、『秉穂錄』^{へいすいろく}という本に見えている。土佐では楨

きのやま 山郷の字簡越つづびしで、与茂次郎よあけという獵師夜明に一頭の大鹿の通るのを打留うちとめたが、たちまちそのあとから背丈せたけ一丈にも余るかと思う老女の、髪赤く両眼鏡のごとくなる者が、その鹿を追うて見たのを見て動顛どうてんしたと、寺石氏の『土佐風俗と伝説』には誌してある。猪を追う女の白い姿しろいろというは、或いは裸形のことを意味するのではなかつたか。薩摩の深山でも往々にして婦人の姿めらこをした者が、嶺を過ぐるを見ることがある。必ず髪を振り乱して泣きながら走つて行くと、この国人上原白羽しらはという者が、『今斎譜きんさいひ』の著者に語つてゐる。それがもし実験者の言に基づくものならば、泣きながらとは多分奇声を発していたことをいうのだろう。『遠野物語』に書留められた山中深夜の女なども、待てちやアと大きな声で叫んだといつてゐる。他の地方にも似たる例は多く、たいていは背丈がむやみに高かつたことを説いてゐるが、怖しくて遁げて來た者の観察だから、寸法などは大ざっぱなものであろうと思う。それよりも土地を異にし場合を異にして、おおよそ形容の共通なるもの、例えば声とか髪の毛の長く垂れていたとかいう点の同じかったのは注意に値する。山で大きな女の屍体しきたいを見たという話は、これもいくつかの類例が保存せられてあるが、なかんずく有名なのは夙はやく橘南谿の『西遊記』に載せられた日向南部における出来事である。

「日向國飫肥領の山中にて、近き年菟道弓にて怪しきものを取りたり。惣身女の形にして色ことの外白く黒髪長くして赤裸なり。人に似て人に非ず。猶人も之を見て大いに驚き怪み人に尋ねけるに、山の神なりと謂ふにぞ。後の祟りも恐ろしく取棄てもせず、其まゝにして捨置きぬ。見る人も無くて腐りしが、後の祟りも無かりしどぞ。又人のいひけるは、是は山女と謂ふものにて、深山にはまゝあるものと云へり」云々。この菟道弓のウジといふのは、野獸が踏みあけた山中の通路である。同じ処を往来する習性があるのを知つて、かかればひとりでに発するようにウジ弓を仕掛けておくのである。それにきて斃れたといふのはいくら神でなくとも驚くべき不注意であつて、珍しい事件であつたに相違ないが、都に住む橘氏ならばとにかく、土地の獵人が始めて名を知つたといふのは、やや信じにくい話である。ことにこの方面は今でも山人の出現が他に比べては著しく頻繁であり、現にこの記事以後にも、いろいろの珍聞が伝えられているのである。八田知紀翁の『霧島山幽界真語』の終りに、次のような一話が載せてある。

「おとゞし（文政十二年）の秋、日向の高岡郷（東諸県郡）にものしける時、糲木村なる郷士、糲木新右衛門と云へる人の物がたりに、高鍋領の小菅岳といふ山に、高岡より猶に行通ふ者のありけるが、一日罠を張り置けるに、怪しき物なんかゝりたりけ

る。さるは大方おおかたは人の形にて、髪いと長く、手足みな毛おひみちたり。さてそれが謂ひけるは、私はもと人の娘なり。今は数百年の昔、世の乱れたりし時、家のを遁のがれ出てこの山に兄弟共に隠れたりけるが、それよりふつに人間の道を絶ちて、朝夕の食ひ物とては、鳥獸木の実やうのものにて有り経しかば、おのづから斯こう形も怪しくは成りにけり。今日しも妹の在る処に通はんとて、夜中に立ちて物しけるに、思はんやかゝる目に遭はんとは。いかで〜我命をば助けよかしと涙なみだおとして詫わびけれど（その言語今の世の詞ことばならで、定さだかには聽取りかねしとぞ）、いといぶかしくや思ひけん、其そのままで儘里はへ馳せ還りて、友あまたかたらひ来て其女を殺してけり。さて其男は幾いくほど程も無く病わざらみ煩わずらふことありて死にけりとか。こは近頃の事なりとて、男の名も聞きしかど忘れにけり。」

小山勝清君の外祖母の話であった。明治の初年、肥後球磨郡の四浦村と深田村との境、高山の官山の林の中に、獵師の掛けて置いた猪罠しわなに罹かかつて、是も一人の若い女が死んでいた。丸裸であつたそうだ。これを附近の地に埋めたが、のちに祟りがあつたという話である。我々の注意するのは、以上三つの話が少しずつ時を異にし、またわざかばかり場処をちがえていすれも霧島市房連山の中の、出来事であつたという点である。ただし猪罠の構造を詳しく知らねばならぬが、かかつた女が身の上を語つたという小菅岳の一条に

は、甚だしく信じにくいものがある。姉と妹とが別れ別れに住んでいて、時あつて相訪う
 ということは話の様式の一つであり、乱を避けて山に入つたというのも、この地方の人望
 ある昔むかしがた談りにほかならぬ。言葉が古風で聴取りにくかつたという説明とともに、必ず
 仲繼者の潤飾が加わっているかと思う。それよりも大切な点はわずかな歳月、わずかな距
 離を隔てて似たような三つの事件が起りしかもそれぞれ状況を異にして、真似た痕跡のな
 いことである。自分は必ず今にまた新しい報告の、更に附加せらるべきことを予期してい
 る。

他の地方の類例はまた熊野の方に一つある。たけ長八尺ばかりな女の屍骸しがいを、山中において
 見た者がある。髪は長くして足に至り、口は耳のあたりまで裂け、目も普通よりは大なり
 と記している。それから『越後野志』卷十八には、山男の屍骸の例が一つある。天明の頃、
 この国頸城郡姫川の流れに、山男が山奥から流れてきた。裸形にして腰に藤蔓ふじづるまとを纏う。
 身のたけ二丈余とある。ただし人恐れてあえて近づかず。ついに海上に漂い去るといつて、
 寸尺は測つて見たのではなかつた。しかも二丈余というのはかねてこの地方で言うことと
 見えて、同じ書物の他の条にもそう書いてある。

ただし山男の身長の遙かに尋常を超えていたことは、他の多くの地方でも言うことで或いは事実ではないかと思う。このついでにほんの二つか三つ実例を挙げてみるならば、『有斐斎割記』ゆうひさいさつき に対馬某つしま という物産学者、薬草を探りに比叡山ひえいざん の奥に入つて、たまたま谷を隔てて下の方に、一人の小児の岩から飛び降りてはまた攀じ登つて遊んでいるのを見た。村の子供がきて遊ぶものと思つていたが、後日そこを通つてみると、岩は高さ数仞の大岩であつた。それから推して見ると小児と思つたのは、身の丈たけ一丈もあつたわけである、始めて怪物といふことに気がついた。石黒忠篤君いしづるただあつ がかつて誰からか聴いて話されたのは、幕末の名士川路左衛門尉かわじざえもんのじょう 、或る年公命を帶びて木曾に入り、山小屋にとまつていると、月明らかなる夜更はや にその小屋の外にきて高声に喚ぶ者よ がある。刀を執つて戸を開いて見るに、そこには早影はや も見えず、小屋の前の山をきわめて丈の高い男の下つて行く後姿が、遠く月の光で見えたそうだ。山男であろうとその折従者に向かつていわれたが、他曰ついに再びこれを口にせず、先生の日記にも伝にも、その事を記したものはなかつたという。山中笑翁やまなかえみ が前年駿州田代川たしろがわ の奥へ行かれた時、奥仙侯おくせんまた の杉山忠藏という人が、その父から聴いたといつて語った話の中に、若い時から猟が好きで、毎度鹿を追うて山奥に入つたが、真に怖ろしくまた不思議だと思つた事は、生涯に二度しかない。その一

度は山中の草原が丸太でも曳いて通つたように、一筋倒れ伏しているのを怪しんで見ているうちに、前の山の樹木がまた一筋に左右に分かれて、次第に頂上に押し登つて行つたこと、今一度は人の足跡が土の上にあつて、その大きさが非常なものであつた。かねてこんな場合の万一の用意に、持つてゐる鉄の弾丸を銃にこめて、なお奥深く入つて行くと、ちょうど暮くれがた方のことであつたが、不意に行く手の大岩に足を踏みかけて、山の蔭かげへ入つて行く大男の後姿を見た。その身の丈が見上げても目の届かぬほどに高かつた。あまり怖ろしいので鉄砲を打ち放す勇気もなく還つてきただと語つたそうである。昨今は既に製紙や枕木のために散々に伐り荒されたから事情も一変したが、以前はこの辺から大井の川上にかけては、山人に取つての日高の沙留さるともいうべく、最も豊富なる我々の資料を藏していた。安倍郡大川村大字日向ひなたの奥の藤代山などでも、かつて西河内にしこうちの某という猟師が、大きき人の形で毛を被かぶつた物を、鉄砲で打ち留めたことがあつた。『駿河国新風土記』卷二十には、なんでも寛政初年の事であつたらしく記している。打ち留めたものの余りの怖ろしさに、そのままにして家に帰り、それが病もとになつて猟師は死んだ。その遺言に一年も過ぎたなら、こうこうした処だから往つて見よとあつたので、その通りに時経てのち出かけて搜して見ると、偉大なる脛すねの骨などが落ち散り、傍にはまた四五尺あるかと思

う白い毛が、おびただしくあつたと伝えられる。そのように長いならば髪の毛だろうと思うが、何分多くは何段かの又聞きであつたため、満身に毛を被るという記事がいつも精確でなく、ことにこの地方では猿の劫経さるこうたものとか、狒々ひひとかいう話が今でも盛んに行われて、一層人の風説を混乱せしめる。新聞などを注意していると、四五年内一度ぐらいはそういう噂が必ず起り、その実じつ打ち取つたのはやや大形の猿であり、ただその話と寸法とのみが以前の山男の方に近くなっている。つまりはうそであり誇張ながらも、由つて来たるところだけはあるのである。なお最後に今一つ、どうでも猿ではなかつた具体的の例を出して置く。これは『駿河志料』卷十三、『駿河国巡村記』志太郡卷四に共に録し、前二つの話よりは少しく西の方の山の、やはり百余年前の出来事であつた。

「大井川の奥なる深山には山丈やまじょうといふ怪獣あり。島田の里人に市助といふ者、材木を業として此山に入ること度々なり。或時谷畠たにはたの里を未明に立ち、智者ちしゃやま山の険岨けんそを越え、八草の里に至る途中、夜既に明けんとする頃深林を過ぐるに、前路に数十歩を隔てゝ大木の根元に、たけ一丈余の怪物よりかかるさまにて、立ちて左右を顧みるを見たり。案内の者潛ひそかに告げて言ふ。かしこに立つは深山に住む所の山丈と云ふもの也。彼に行逢へば命は測り難し。前へ近づくべからず又声を揚ぐべからず、此林の茂みに影を匿かくせと謂ふ。

市助は怖れおびえて、もとの路に馳せ返らんと言へど、案内の者制し止め、暫時の間に去るべければ日の昇るを待てと言ふまゝに、せんすべ無く只声を呑みてかたへに隠る。其間にかの怪物、樹下を去りて峯の方へ疾走す。潛かに之を窺ふに、形は人の如く髪は黒く、身は毛に蔽はれたれど面は人のやうにて、眼きらめき長き唇そりかへり、髪の毛は一丈余にてかもじを垂れるが如し。市助は之を見て身の毛立ち足の踏みどを知らず。されど峯の方へ走り行くを見て始めて安堵の思ひを為し、案内と共にかの処に来りて其跡を覗するに、怪獣の糞樹下にうづたかく、その多きこと一箕ばかりあり、あたりの木は一丈ほど上にて皮を剥ぎさぐりたる痕あり。導者曰ふ。これ怪物があま皮を食ひたる也。怪物は又篠竹を好みて食ふといへり。糞の中には一寸ばかりに噉み碎ける篠竹あり。獸の毛もまじりたりしとかや、按するに是は狒々と称するものにて、山丈とは異なるなるべし」（以上）。

この話はいかにも聴いた通りの精確な筆記のようだが、やはりよく見ると、文人の想像が少しあまじつていてこと、あたかも噉み碎いた篠竹のごとくである。例えば長き唇反り返るとあるのは、支那の書物に古くからあることで、じつはどんな風に長いのか、日本人には考えもつかぬ。とうてい夜の引明けなどに眼につくような特徴ではなかつたのである。

山丈のジョウは高砂の尉と姥などのジョウで、今の俗語のダンナなどに当るだろう。すな

わち山人の男子のやや年輩の者を、幾分尊んで用いた称呼にして、正しく山姥と対立すべき中世語であつた。

二二一 山女多くは人を懷かしがること

全体に深山の女たちは、妙に人に近づこうとする傾向があるよう見える。或いは婦人に普通なる心弱さ、ないしは好奇心からではないかと、思うくらいに駢々しかつたこともあるが、それにしては彼らの姿形の、大きくまた気疎かつたのが笑止である。

山で働く者の小屋の入口は、大抵は垂簾(けうと)を下げたばかりであるが、山女夜深く來たつてその簾をかけ内(のぞ)を覗いたという話は、諸国においてしばしばこれを聞くのである。そういう場合にも髪は長くして乱れ、眼の光がきらきらとしているために喰いにでも来たかの如く、人々が怖れ騒いだのである。或いはまた日が暮れて後、突然として山小屋に入り来たり、囲炉裏(いろう)の向うに坐つて、一言も物を言わず、久しく火にあたつていたという話も多い。豪胆な木挽(こひき)などが退屈のあまりに、これに戯れたなどという噂のあるのは自然である。羽後の山奥ではこんな女をわざわざ招き寄せるために、ニシコリという木を炉に燃

す者さえあると『黒甜瑣語』などには記しているが、それは果してどういう作用をするものか、その木の性質と共になお尋ねて見たいと思っている。

今から三十年あまり以前、肥後の東南隅の湯前村の奥、日向の米良との境の仁原山に、アンチモニイの鉱山があつた。その事務所に住んでいた原田瑞穂という人が夜分少し離れた下の小屋に往つて、人足たちと一緒になつて夜話をしていると、時々ぱらぱらとその小屋の屋根に小石を打ちつける音がする。少し気味が悪くなつてもう還ろうと思い、その小屋を出てうしろの小路をわずかくると、だしぬけに背の高い女が三人横の方から出て、その一人が自分の手を強く捉えた。三人ながらほとんと裸体であつた。何か頻りに物を言うけれども怖ろしいので何を言うか解らなかつた。その内に大声に人を喚んだ声を聞いて、小屋から多勢の者ほどやどやと出てきたので、女は手を離して足早に嶺の方へ上つてしまつた。これも小山勝清君の話で、経験をした原田氏は、そのころまだ若かつた同君の叔父である。

自分はこの鉱山のあつた仁原山が、前に挙げた獣のわなに山女の死んでいた三つの場処の、ほぼまん中である故に、ことにこの話に注意をする。もし山人にも土地によつて、気風に相異があるものとすれば、南九州の山中に住む者などは、とりわけ人情が惇朴で

かつ無智であつたように思われるからである。

この類の実例はゆくゆくなお追加しうる見込みがある。前にいう仁原山は市房山と白髪岳の中間にある山だが、その白髪岳の山小屋でも近年山の事業のためにしばらく入つていた某氏が、夜になると山女がきて足を持つて引張るので、なにぶんにも怖ろしくて我慢ができぬといつて還つてきたことがあつた。球磨郡四浦村の吉という木挽が、かつて五箇庄の山で働いていた時に、小屋へ黙つて入つてきた髪の毛の長い女などは、にこにことしてしきりに自分の乳房をいじつっていた。驚いて飛びだして鎌砲などを持つて、多勢で還つてきてみるともうその辺にはいなかつたそうである。単に遠くから姿を見たというだけの話なら、まだこの附近にも近頃の例がいくつかある。東北地方では会津の磐梯山の入山などにも、山女らしい話がおりおり伝えられる。『竜章東国雜記』の第六集中、「文化の初め頃、山麓某村の農民二人、川芎せんきゅうといふ薬草を探りに、此山西北の谿かわいに入つて還ることなり難く、流ながれに傍そうた大木の虚洞うつろに夜を過すとて、穴の外に火を焚たいて置くと、たけ六尺ほどで髪の長さは踵あかを隠すばかりなる女が沢さわがに蟹かにを捕あぶつて此火に炙あぶつて食ひ、又兩人を見て笑つた」と記している。「これ俗に山ワロと謂ひ野猿やえんの年経たるもの

也。奥羽の深山にはまゝ居る由にて、よく人の心中を知れども人に害を為すことなし」などとあつて、土地でも詳しいことは知らぬのである。また『老嫗茶話』^{ろうおうぢやわ}には猪苗代白木城の百姓庄右衛門、同じく磐梯山の奥に入つて、山姥のかもじと称するものを見つけたことを載せてゐる。「長さ七八尺にして白きこと雪の如く、松の大木の梢にかゝつて居た」とあつて其末に、「世に謂ふ山姥は南蛮國^{なんばんこく}の獣なり。其形老女の如し。腰に皮ありて前後に垂れ下りたふさぎの如し。たまゝ一人を捕へては我住む岩窟^{がんくつ}に連れゆき、強ひて夫婦のかたらひを求む。我心に従はざるときは其人を殺せり。力強くして丈夫に敵す。好みて人の小児を盜む。盜まれし人之を知り、多勢集まり居て山姥が我子を盗みしことを大音^{ののし}に罵り恥しむるときは、^{ひそ}かに小児を連れ來り、其家の傍に捨て置き帰るといへり」などといつてゐる。実際の遭遇がようやく稀^{まれ}になつて雜説はいよいよ附け加わるので、これなども支那の書物の知識が、もう半分ばかりもまじつてゐるようである。

或いは単に人間の炉の火を恋しがつて出てくるものとも想像しうる場合がある。冬の日に旅をした人ならこの心持は解るが、たとえ見ず知らずの人が焚火^{たきび}をする処でも、妙に近づいて見たくなるものである。夜分に人の家の火が笑語の声とともに、戸の隙間^{すきま}から洩れ^も

るのを見ると、嫉妬^{ねた}ましくさえなるものだ。無邪気な山の人々もこの光に引きつけられてくるのかも知らぬ。『秉穂錄』にはまた熊野の山中で炭焼く者の小屋へ、七尺余りの大山伏^{まぶし}の遣つてくることを録している。ただし「魚鳥の肉を火に投ずるときは、その臭氣^{へいすいいろく}を厭うて去る」というのは、少しく前の沢蟹の話とは一致せぬが、火に対する趣味などにも地方的に異同があるのだろう。前に引用した『雪窓夜話』の上巻には、また次のような一件も記してある。すなわち因州での話である。

「西村某と云ふ鷹^{たか}匠^{じょう}あり。鷹^{たか}を捕らんとて知頭郡^{ちづ}蘆沢山^{あしさわやま}の奥に入り、小屋を掛けて一人住みけり。夜寒の頃なれば、庭に火を焚^たきてあたり居けるに、何者とも知れず、其たけ六尺あまりにて、老いたる人の如くなる者來りて、黙然とかの火によりて、鼻をあぶりてつくばひたり。頭の髪赤くぢみて、面貌^{めんぱう}人に非ず猿にも非ず、手足は人の如くにして、全身に毛を生じたり。西村は天性剛なる男なれば、更に驚くこと無く、汝は何処に住む者ぞと問ひけれども、敢て答へず。暫くありて立帰る。西村も其後に沿ひて出でけれども、夜甚だ暗くして、其行方を知らずなりぬ。其後又來りて、小屋の内を覗^{のぞ}くことありしに、西村、又來たか、今宵^{こよい}は火は無きぞと言ひければ、其まゝ帰りけると也。里人に其事を語りければ、山父と云ふもの也。人に害を為す者に非ず。之を犯すことあれば、山荒る、

と謂ひけると也。」

スキーで近頃有名になつた信越の境の山にも、半分ほど共通の話があつて、『北越雜記』^{ほくえつづき}卷十九に出てゐる。断つて置くがこれら二つの書物は共に写本であつて流布も少なく、一方の筆者は他の一方の著述の存在をすらも知らなかつたのである。それを自分たちが始めて引き比べて見る処に、学問上の価値が存するのである。「妙高山・焼山・黒姫山皆高嶺にて、信州の飯綱・戸隠、越中の立山まで、万山重なりて其境幽淒なり。高田の藩中数十軒の薪は、皆この山中より伐出す。凡そ奉行より木挽・杣の輩に至るまで、相誓ひて山小屋に居る間、如何なる怪事ありても人に語ること無し。一年升山某、役に当りて数日山小屋に在りしが、夜は人々打寄りて絶えず炉に火を焚きてあたる。然るに山男と云ふもの、折ふし来ては火にあたり一時ばかりにして去る。其形人に異なること無く、赤髪裸身灰黒色にして、長^{たけ}は六尺あまり、腰に草木の葉を纏^{まとい}ふ。更に物言ふこと無けれども、声を出すに牛のいばふ如く聞ゆ。人の言語はよく聞分くる也。相馴れて知人の如し。一夕升山氏之に向ひて、汝木葉を着るは恥ることを知るなり。火にあたるは寒さを畏るゝなり。然らば何ぞ獸の皮を取りて身に纏はざるやと言ひしに、つく／＼と之を聞き去れり。翌夜は忽ち羚羊^{かもししか}二疋^{ひき}を両の手に下げる來り、升山の前に置く。其意を解し、

短刀もて皮を剥ぎて与ふれば、山男は頻りに口を開き打笑ひ、悦びて帰りぬ。すでにして又来たるを見れば、さきの皮一枚は、藤を以て繋ぎ合せて背に負ひ、他の一枚は腰に巻き付けたり。されど生皮を其のまゝ着たる故、乾くにつれて縮みより硬ぱりたり。皆々打笑ひ、熊の皮を取り、十文字にさす竹入れ、小屋の軒に下げて見せ、且つ山刀一挺を与へて帰らしむ。其後数日来ずと謂へり」（以上）。これなどは秘密を誓約した人々の抜け荷だから、若干の懸値があつても吟味をすることが困難である。

二三 山男にも人に近づかんとする者あること

山人も南九州の山に住む者が、特に無害でありまた人なつこかつたように思われる。山中をさまようて危害の身に及ぶに心づかず、しばしば里の人の仮小屋かりごやを訪問して、それほどまでに怖れ嫌われていることを知らなかつたという例は、主として霧島連峯中の山人の特質であつた。なお同じ方面の出来事として、水野葉舟君からまた次のような話も教えられた。

ひゅうがみなみなか
曰向南那珂

郡の人身上千歳君曰く、同君の祖父某、四十年ばかり以前に、山に入つて

不思議な老人に行逢うたことがある。白髪にして腰から上は裸、腰には帆布のような物を巻きつけていた。にこにこと笑いながら此方を向いて歩んでくる様子が、いかにも普通の人間とは思われぬ故に、かねて用心のために背に負う手裏剣用の小さい刀の柄に手を掛け、近く来ると打つぞと大きな声でどなつたが、老翁は一向に無頓着で、なお笑いながら傍へ寄つてくるので、だんだん怖ろしくなつて引返して遁げてきた。ところがそれから一月ばかり過ぎてまた同じ山で、村の若者が再び同じ老人に逢つた。一羽の雉子を見つけて鉄砲の狙いを定め、まさに打ち放そうとするときに、不意に横合から近よつてこの男の右腕を柔かに叩く者があつた。振向いて見ればその白髪の老人で、やはりにこにこと笑つて立つている。白髪の端には木の葉などがついていたという。これを見ると怖ろしさのあまり気が遠くなり、鉄砲を揚げたままで立ちすくんでいたのを、しばらくしてから村の人を見つけられ、正気になつてのちにこの話をしたそうだ。眼の迷いとかまぼろしか、言つてしまふことのできない話で、しかも作り話としては何の曲もなく、かつ二度の実見が一致していた。何かは知らずとにかくそんな人が、この辺の山には正しくいたのである。

山人が我々を目送したという話もおりおり聞く。そうして甚だ氣味の悪いことに、これを解説するのが普通であつた。氣味の悪くないこともあるまいが、彼らは元来が眞の有閑階級だから、じつははつきりとした趣意もなく、ただ眺めていた場合もあつたかも知れぬ。ただし少年や女には、これを怖れる理由は十分にあつた。前年前田雄三君から聴いた話は、越前丹生郡三方村大字杉谷の、勝木袖五郎という近ごろまで達者でいた老人、今から五十年前に十二三歳で、秋の末に枯木を取りに村の山へ往つた。友だちの中に意地の悪い者があつて、うそをついて皆は他の林へ往つてしまい、自分一人だけ村の白山神社の片脇の、堂ヶ谷というところで木を拾つてゐるとき、ふと見れば目の前のカナギ（くぬぎ）の樹にもたれて、大男の毛ずねがぬくと見えた。見上げると目の届かぬほどに背が高い。怖ろしいからすぐに引返して、それからほど近い自分の家に戻り、背戸口に立つて再び振り返つて見ると、その大男はなおもとの場所に立ち、凄い眼をしてじつと此方を見ていたので、その時になつて正氣を失つてしまつたそうである。この堂ヶ谷は宮からも人家からも、至つて近い低い山であつた。こんなところまで格別の用もないのに、稀には山人が出向いてきて人を見ていたのである。神隠しの風説などの起りやすかつたゆえんである。

それから少なくとも我々に対して、常に敵意は持つてはいなかつたという証拠もある。

小田内通敏氏の示された次の文は、何かの抄録らしいが元の書物は同氏も知らぬとう。津軽での話である。

「中村・沢目・蘆谷村と云ふは、岩木山の『たまたま』あたりの谷蔭に人語の聴えしまゝ、其声を知るべに谷を下りて打見やりたるに、身の長七八尺ばかりの大男二人、岩根の苔を摘み取る様子なり。背と腰には木葉を綴りたるものを纏ひたり。横の方を振向きたる面構へは、色黒く眼円く鼻ひしげ蓬頭にして鬚延びたり。其状貌の醜怪なるに九助大いに怖れを為し、是や兼て赤倉に住むと聞きし才ホヒトならんと思ひ急ぎ遁げんとせしが、過ちて石に蹴き転び落ちて、却りて大人の傍に倒れたり。仰天し 息懾して口は物言ふこと能はず、脚は立つこと能はず、唯手を合せて拝むばかり也。かの者等は何事か語り合ひしが、やがて九助を小脇にかゝへ、嶮岨巖窟の嫌ひなく平地の如くに馳せ下り、一里余りも来たりと思ふ頃、其まゝ地上に引下して、忽ち形を隠し姿を見失ひぬ。九助は次第に心地元に復し、始めて幻夢の覚めたる如く、首を挙げて四辺を見廻らすに、時は既に申の下りとおぼしく、太陽巒際に臨み返照長く横たはれり。其時同じ業の者、手に薪を負ひて樵路を下り来るに逢ひ、顛末を語り介抱せられて家に帰り着きたりしが、心中鬱屈し顔色憔悴して食事も進まず、妻子等色々と保養を加へ、五十

余日して漸く回復したりと也。』

二四 骨折り仕事に山男を傭いしこと

ただし山中においては、人は必ずしも山人を畏れてはいなかつた。時としてはその援助を期待する者さえあつたのである。例の橘氏の『西遊記』にもよく似た記事があるが、別に『周遊奇談』という書物に、山男を頼んで木材を山の口へ運ばせたという話を載せている。どのくらいまでの誇張があるかは確かめがたいが、まるまる根のない噂とは考えられぬのである。

豊前中津領などの山奥では、材木の運搬を山男に委託することが多かつた。もつとも彼ら往来の場所には限があるらしく、里までは決して出てこない。いかなる険阻も牛のごとくのそりのそりと歩み、川が深ければ首まで水に入つても、水底を平地のようにあるいてくる。たけは六尺以上の者もあつて、力が至つて強い。男は色が青黒く、たいていは肥えている。全身裸であつて下帯すらもないが、毛が深いので男女のしるしは見えぬ。ただし女は時に姿を見せるのみで出て働くことはしない。そうして何か木の葉木の皮ようの物

を綴つて着ている。歯は真白だが口の香が甚だ臭いとまでいっている。労賃は握り飯だとある。材木一本に一個二本に二個。持つて見て二本一度に担げると思えば、一緒にして脇へ寄せる。約に背いて例えは二本に握り飯一つしか与えなかつたりすると、非常に怒つて永くその怨をうらみ忘れない。愚直なる者だと述べている。

『西遊記』にいうところの薩摩方面の山わろなども、やはり握り飯を貰つて欣然として運送の勞に服したが、もし仕事の前に少しでも与えると、これを食つてから逃げてしまう。また人の先に立つて歩むことを非常に嫌う。つまりは米の飯が欲しいばかりに出て働くらしいので、時としては、山奥の寺などに入つてきて、食物を盗み食うことがある。ただししおけ塩氣のある物を好まぬといつている。以上二種の記録は少しずつの異同があり、材料の出処の別々なることを示している。これ恐らくは信用すべき一致であろうと思う。

同じ『周遊奇談』の卷三には、また秋田県下の山男の話を記して、九州の例と比較がしてある。ただし著者自分で見たという点が安心ならぬ故に、特に原文のまま抄出して置く。「出羽国仙北より、水無銀山阿仁」と云ふ處へ越ゆる近道、常陸内と云ふ山にて、路を踏み迷ひ炭焼小屋に泊りし夜、山男を見たり。形は豊前に同じけれども力量は知れず。

木も炭も石も何にでも負ひもせず。唯折々其小屋へ食事などの時分を考へ来るとなり。飯なども握りて遣はせば悦びて持ち退く。人の見る処にては食せず。如何にも力は有りさう也。物は言はず。たゞのさゝ立廻りあるくばかり也。尤も悪きことはせず。至つて正直なる由なり。此処にては山女は見ず。又其沙汰も無し」。

山男はまた酒がすきで酒のために働くという話が、『桃山人夜話』の巻三に出ている。「遠州秋葉の山奥などには、山男と云ふものありて折節出づることあり。杣・山賤の為に重荷を負ひ、助けて里近くまで来りては山中に戻る。家も無く従類眷属とても無く、常に住む処更に知る者無し。賃錢を与ふれども取らず、只酒を好みて与ふれば悦びつゝ飲めり。物ごし更に分らざれば、畠を教ふる如くするに、その覺り得ること至つて早し、始も知らず終も知らず、丈の高さ六尺より低きは無し。山氣の化して人の形と成りたるなりと謂ふ説あり。昔同國の白倉村に、又藏と云ふ者あり。家に病人ありて、医者を喚びに行くとて、谷に踏みはづして落ち入りけるが樹の根にて足を痛め歩むこと能はず、谷の底に居たりしを、山男何処よりも無く出で来りて又藏を負ひ、屏風を立てたるが如き処を安々と登りて、医師の門口まで来りて搔き消すが如くに失せたり。又藏は嬉しさ

余りに之に謝せんとて竹筒ささえに酒を入れてかの谷に至るに、山男二人まで出でて其酒を飲み、
 大いに悦びて去りしとぞ。此このこと事古老人の言ひ伝へて、今に彼地にては知る人多し」（以上）
 。又藏が医者の家を訪れる事を知つて、その門口まで送つてくれたという点だけが、特
 に信用しにくいようと思ふけれども、酒を礼にしたら悦んだということはありそうな話で
 あつた。

二五 米の飯をむやみに欲しがること

山人が飯を欲しがるという話ならば、他の諸国においてもしばしば耳にするところであ
 る。土屋小介君の前年知らせて下さつた話は、東三河の豊川上流の山で、明治の初めごろ
 に官林を払い下げて林の中に小屋を掛けて伐木していた人が、ある日外の仕事を終つて小
 屋に戻つてみると、背の高い髭ひげの長い一人の男が、内に入つて自分の飯を食つてゐる。自
 分の顔を見ても一言の言葉も交えず、したたか食つてからついと出て往つてしまつた。そ
 れから後も時折りはきて食つた。物は言わず、またその他には何の害もしなかつたという。
 盗んだというよりも人の物だから食うべからずと考えていなかつた様子であつた。

次に鈴木牧之の『北越雪譜』にある話は、南魚沼郡の池谷村の娘ただ一人で家に機を織つていると、猿のことにして顔赤からず頭の毛の長く垂れた大男が、のそりと遣つて来て家の内を覗いた。春の初めのまだ寒いころで、腰に物を巻きつけて機にかかついてたために、怖ろしいけれども急に遁げることができず、まごまごとするうちに怪物は勝手元へまわり、竈の傍に往つて、しきりに飯櫃を指さして欲しそうな顔をした。かねて聞いていることもあるので、早速に飯を握つて二つ三つ与えると、嬉しい顔をしてそれを持つて去つた。それから後も一人でいる時はおりおりきた。山中でもこれに出逢つたといふ人がそのころは時々あつたが、一人でも同行者があると決して来なかつたそうである。

また同国中魚沼郡十日町の竹助という人夫は、堀之内へ越える山中七里の峠で、夏の或る日の午後にこの物に行逢うたことがある。白縮の荷物を路ばたに卸して、石に腰かけて弁当をつかつていると、やはり遣つてきたのが髪の長い眼の光る大男で、その髪の毛はなかば白かつたという。石の上に置いた焼飯をしきりに指さすので、一つ投げてくれると悦んで食つた。そうして頼みはせぬのにその荷物を背負つて、池谷村の見えるあたりまで、送つてきてくれたという話である。

そこで改めて考えて見るべきは、山丈・山姥が山路に現われて、木樵・山賤の

負搬の労を助けたとか、時としては里にも出てきて、少しずつの用をしてくれたという古くからの言い伝えである。これには本来は報酬の予想があり恐らくはそれが山人たちの経験であつた。『想山著聞奇集』などに詳しく説いた美濃・信濃の山々の狗賓餅、或いは御幣餅・五兵衛餅とも称する串に刺した焼飯のごときも、今では山の神を祭る一方式のように考へてゐるが、始めてこの食物を供えた人の心持は、やはりまたもつと現実的な、山男との妥協方法であつたかも知れぬ。中仙道は美濃の鵜沼駅から北へ三里、武儀郡志津野といふ町で、村続きの林を伐つたときに、これは山というほどのところでもなく、ここに老木などの覆い繁つたものもない小松林の平山だから狗賓餅にも及ぶまいと思つて、何の祭もせずに寄合つて伐り始めると、誰も彼もの斧の頭がいつのまにかなくなり、道具もことごとく紛失していた。これはいけないとその日は仕事を中止し、改めて狗賓餅をして山の神に御詫びをしたら失せた道具がぼつぼつと出てきた。また同じ国苗木領の二つ森山では、文政七八年のころ木を伐出す必要があつて、十月七日に山入して御幣餅を拵えたのはよいが、山の神に上げるのを忘れて、自分たちでみな食つてしまつた。そうすると早速山が荒れ出して、その夜は例の天狗倒しといつて、大木を伐倒す音が盛んにした。この時も心づいて再び餅を拵えて詫びたので、ようやく無事に済んだといつてゐる。この

地方では狗賓餅をするには、定まつた慣習があつた。まず村中に沙汰さたをして老若男女山中に集まり、飯を普通よりはこわくかし焼き、それを握つて串に刺し、よく焼いてから味噌をつける。その初穂はつほを五六本、木の葉に載せて清い処に供えて置き、それから一同が心のままに食うのである。甚だうまい物だがこの餅をこしらえると、天狗が集まつてくると称して村内の家では一切焼かぬようにしていた。故に一名を山小屋餅、江戸近くの山方やまかたでは、古風のままに糀しどぎもち餅と呼んでいた。今日我々が宗教行為というものの中には、まだ動機の分明せぬ例が多い。ことに山奥で天狗の悪戯などと怖れた災厄には、こういう人間味の豊かな解除手段もあつたことを考へると、存外単純な理由がかえつて忘却せられ、実験のようやく稀になるにつれて、無用の雑説が解説を重苦しくした場合を、推測せざるをえないのである。

少なくとも焼飯の香氣には、引寄せられる者が山にはいた。食物を供えて悦ぶ者のあることを、里人の方でもよく知つていた。そうして双方が正直で信を守ることは、昔は別段の努力でもなんでもなかつた。従つてまず与えると働かずに遁げてしまうというのを、あたかも当世の喰遁げ同様に非難しようとしたならば誤つてゐる。以前は山人はなんの邪魔もしなければ御幣餅をもらうことができ、またそれをくれぬ時にはあはれてもよかつた。

特に出てなんらかの援助を試みたのは、いわば好意でありまた米の味に心酔した者の、やや積極的な行動でもあつた。もし私たちの推測を許すならば、それは或いは山人の帰化運動の進一步であつたのかも知れぬ。次の章に述べようとする飛驒のオオヒトの場合のごとく、人は単に偶然に世話になつた場合にも、謝礼に握り飯を贈れば相手の喜ぶことを知り、相手はまた狸兔の類を捕つてきて、これを答礼にして適當なりと考えたのも、やがては異種諸民族間の貿易の起原と同じかつた。こうしてだんだんに高地の住民が、次第に大日本の貫籍かんじやくに編入せられて行つたことは、自他のために大なる幸福であつた。

越後南魚沼の山男が、猿に似て顔赤からずと伝えられるのは、一言の註脚を必要とする。これは单に猿ほどには赤くなかったというまでであつたらしく、普通はこれと反対に顔の色が赤かつたという例が少なくない。顔ばかりか肌膚全体が赤かつたという噂さえ残つてゐる。近世の蝦夷地えぞちに、いわゆるフレシヤム（赤人）いましめの警けいを伝えた時、多くの東北人にはそれが意外とも響かなかつたのは、古来の悪路あくるおう王や大竹丸おおたけまるの同類に、赤頭太郎などと称して赤い大人おおひとが、たくさんにきたという話を信じていたからである。それがひとり奥羽に限られなかつた証拠は、例えば弘仁七年の六月に弘法大師が、始めて高野の靈地を発見した時にも、嚮きょうう導どうをしたという山中の異人は、面赤くして長八尺ばかり、青き色の

こそで
小袖を着たりと、『今昔物語』には記している。眼の迷いとしても現代になるまで、大人は普通は赤い者のように、世間では考えていた。もつとも豊前中津領の山ワロのように、男は色青黒しという異例も伝えるが、此方には比較すべき傍証が多くない。また赤頭といふのは髪の毛の色で、それが特に目についた場合もあるが、顔の色の赤いというのもそれ以上に多かったのである。或いは平地人との遭遇の際に、興奮して赤くなつたのかといふことも一考せねばならぬが、事実は肌膚の色に別段の光があつて、身長の異常とともに、それが一つの畏怖の種らしかつた。地下の枯骨ばかりから古代人を想定しようとする人々に、ぜひとも知らせておきたい山人の特質である。

二六 山男が町に出で来たりしこと

これを要するに山にこういう人たちのいるということは、我々の祖先にとつては問題でもまた意外でもなかつた。ただ豊前・薩摩の材木業者以上に、意識して彼らと規則立つた交通をする折が乏しかつたために、例えば禁止時代の切支丹伴天連に対するごとく、甚だ精確ならざる風評と誇張とが、ついて廻つたのを遺憾とするばかりである。いわゆるヤマ

ワロ（山童）の非常に力強かつたこと、これは全く事実であつたろうと認める。そうして怒ると何をするかわからぬというのも、また根拠ある推測であつた。なおまた彼らが驚くべく足が達者だといったのも、通例平地の人々と接することを好まぬ以上は、急いで林木の茂みの中に、避け隠れたとすれば不思議はない。野獸を捕つて食物としておれば、そのためには女でも足が速くなればならない。不思議はむしろ何かという場合に、かえつて我々に近づこうとする態度の、明瞭に現れていたことである。しかもしばしば不幸なる誤解があつて、人がその真意を酌くむことをえない場合がいかにも多かつた。

『東武談叢』その他の聞書に見えているのは、慶長十四年の四月四日、駿府城内の御殿の庭に、弊衣へいいを着し乱髪にして青蛙あおがえるを食う男、何方いづかたよりもなく現れ来る。住所を問うに答なく、ただ手をもつて天を指さしたのは、天からきたとでもいうことかと謂つた。家康は左右の者がこれを殺さんとするのを制止し、城外に放たしめたるに、たちまちその行方を知らずとある。この怪人は四肢ししに指がなかつたこともあるが、天を指したといふからは甚だ信じがたい事であつた。それからまた三十年余り、寛永十九年の春であつた。土佐では豊永郷の山奥から、山みこと称する者を高知の城内へつれてきた。年六十ばかりに見える肉づきの逞たくましい大男で一言も物いわず、食を与うれば何でも食つた。二三日

の間留めておいてのちに元の山地へ放ち返したと、当時のいくつかの記録に載せてある。いずれも多くの人がともに見たのだから、まぼろしとは認めがたい話である。ことに「山みこ」という語が、すでにあの時代の土佐にあつたとすれば、必ずしも稀有の例ではなかつた。ミコはどう考えても神に仕える人のことで、天狗と同じく彼らを山神の使者、もしくは代表者のごとく見る考えが、吉野川上流の村にはあつたことを想像せしめる。

この前後は土着開発に急なる平和時代で、その結果は山と平地との間に、人知らぬ攬乱があつたかと思われ、山人出現の事例がたくさんに報ぜられている。尾州名古屋というような繁昌の土地にも、なおいざこからか異人が遣つてきて捕えられたといつている。太い綱で縛つておいたにもかかわらず、夜の間に逃げてしまい、しかもなんらの報復をもしては行かなかつた。仙人などと違つて存外に智慮もなく、里近くをうろうろしていたのをみると、やはり食物か配偶者か、何か切に求むるものがあつたためで、半ばはその無意識の衝動から、浮世の風に当ることにはなつたのである。ことにその或る者が日向や越後の例のごとく、白髪であつたと聴くに至つては、悠々たるかも人生の苦、彼らはたこれをお免れえなかつたのである。

名古屋で異人を捕えたという話は、『視聴実記』卷六に出ている。年代は知れぬが戸の初期であろう。本文のままを次に抄録する。

「飯沼林右衛門は広井に住す。夜話の帰りに僕の云ふには、南の路より御帰りなさるべし。
 それは道遠し。何故にさは云ふかと叱すれば、御迎おむかえに来るとき、東光寺の壁の下に、小坊主の一人立ちて在るを見しが、一目見て甚だ戦慄せんりつせし故に、かく申す也と答ふ。林右衛門笑ひながら、さあらばいよく行きて見るべしとて行くに、果して十二三ばかりの小僧あり。物を尋ねれども答へず。之を捉とらへ引立てんとするに、甚だ力強し。されど林右衛門も強力なれば、漸ようやくに之を引立て、程近ければ我家に連れ帰り、打ちよう擲ちやくをすれども曾て物を言はず、且つ杖の下痛める体も無く、何とも仕方無ければ、夜明けて再び糾きゆうめい明すべしとて、厩うまやに強く縛り附け置きしに、朝になりて見れば、何處へ行きけん其影も見えざりき。或は云ふ打擲の間に只ただ一声、あいつと云ひし故、其頃世間にては之を『あいつ小僧』と謂ひたりとなん。」

山男が市に通うということは、前の五葉山の獵人の話にもあつたが、これまた諸処に風説するところである。津村正恭の『譚海たんかい』卷十一に、

「相州箱根に山男と云ふものあり。裸体にて木葉樹皮を衣とし、深山の中に住みて魚を捕

ることを業とす。市の立つ日を知りて、之を里に持來りて米に換ふる也。人馴れて怪しむこと無し。交易の外多言せず。用事終れば去る。其跡を追ひて行く方を知らんとせし人ありけれども、絶壁の路も無き處を、鳥の飛ぶ如くに去る故、終に住所を知ること能はずと謂へり。小田原の城主よりも、人に害を作^なす者に非ざれば、必ず鉄砲などにて打つことなかれと制せらるゝ故に、敢て驚かさずと云ふ。」

こうあるけれどももちろん噂話で、必ずしも小田原の御城下まで、この連中がうろうろしていたことを意味するのであるまい。第一に川魚はこの海辺では交易にもならず、木の葉を着ていたら、なんぼでも人馴れて怪まずとは行くまい。ただこの人中にも一人や二人はいるかも知れぬという程度に、輿論^{よろん}が彼らを尋常視していたことは窺^{うかが}われる。岩手県海岸の大槌^{おおつち}の町などでも、市の日に言葉の訛り^{なま}の近在の者でない男が、毎度出てきて米を買って行つた。背は高く眼は円くして黒く光つていた。町の人が山男だろうといつたそ^うである。しかしこれから奥地の山々には、今でもずいぶんと遠国から、炭竈^{すみがま}に入つて永く稼^{かせ}いでいる者が多い。言語風采の普通でないばかりに、一括してこれを山人に算入する^{なりた}のは人類学でない。ただ市^{しげき}という者の本来の成立^{なりた}が、名を知らぬ人々と物を言う点において、農民に取つては珍しい刺戟^{しげき}であつた故に、例えはエビスというがごとき神をさえ

祭り、ここに信仰の新しい様式を成長せしめたのである。信州南安曇では新田の市、北安曇では千国ちくにの市などに、暮の市日いちびに限つて山姥が買物に出るという話があつた。山姥が出ると人が散り市が終りになるともいつたが、一方には山姥が支払に用いた錢には、特別の福分があるようにも信じられた。ようやく利欲というものを実習した市人が、いかに注意深くただの在所の婆様ばばさまたちを物色して、想像してみても面白い。その為でもあろうか今も昔話の一つに、山姥が三合ほどの徳利とくりを携えて、五升の酒を買いにきたという話がある。笑つた物は罰せられ、素直すなおにいう通りに量つて遣ると、果して際限もなく入つたといい、またはこれにあやかつて金持になつたともいう。つまりは俵藤太たわらとうだの取れども尽きぬ宝などと、系統を同じくした歴史的空想である。

筑前甘木あまぎの町の乙子市おとこ、すなわち十二月最終の市日にも、山姥が出るという話が古くからあつた。正徳四年に成る『山姥帷子記』やまとばかたびらきという文に、天正のころ下見村の富人大納言だいなごなる者の下僕木棉綿もめんわたを袋に入れてこの日の市に売りに出で、途中に仮睡して市の間に合わなかつた。眼が覚めてみると袋の綿はすでになく、そのかわりに一枚の帷子たんじゆが入っていた。地龜くして青黄黑白の段染だんぞめであつた。これも山姥の物と認められて、宝物として二百年を伝えたという話を書留めている。

それからこのついででないともう他にいう折はないが、絵かきたちだけの今でも遊んでいる空想境に、天狗の酒買い狸の酒買いなどという出来事がある。白鳥の徳利たるや樽かよに通い帳ちようを添えて、下げる飛んでいる場面は後世風かぜふうだが、由つてくるところは甚だ久しいようである。自分は別に今日の酒樽の原型として、瓢ひさごの盛んに用いられた時代を推測し、許由以来の支那の隱君子等が駒こまを出したり自分を吸込ませたり終始この単純なる器具を伴侶はんりよとしているには、何か民俗上の理由があるらしいことを、考えて見ようとしているのであるが、それは広大なる未解の課題だとしても、少なくとも山の人の生活に、この類の僅かな用具が非常なる便益であり、従つて身を離さずに大切にしているのを見て、我々の祖先までがこれを重んじ、何か神怪の力でも具そなうるかのごとく、惚ほれこみ欲しがり、貰えれば宝物にしようとしたことだけは、説かずにはおられぬような感じがする。『落穂余談』おちぼよだん』という書の卷二に、「駿河の山に大なる男あり。折々おりおりは見る者もあり。鹿猿しかぎるなどを食する由なり。久世太郎右衛門殿物語りに、前方此男出でけるに、腰に何やらん附けて居る故、或あるも者近く寄りてそれを取り、還りて見れば高麗こうらいの茶碗ちゃわんなり。今に其子の方に持伝へて居ける由。丙寅へいいん八月、宇右衛門殿物語り。甚兵衛殿も聞及ぶの由、同坐どうざにて語る」とあ

る。これなどは山姥から、褒美ほうびにもらつたというのと反して、手もなく山男から掠奪りやくだつされたのであるが、最初どうしてこのような品を、彼らが拾い取りまたこれを大事にしていたかを考えると、小説家でない我々にも、いろいろな珍しい光景が空想せられる。例えば盜賊が始末に困つて、山中に隠して置いたとか、大百姓の家が退転して、荒屋敷あれやしきになつてゐるところへ、のそのそと来かかつた山男が、光るから手に取上げて嗅かいだり嘗めたりしていたとしたら、彼らの排外的な社会にまでも、浸み入らずにはおかなかつた異種文明の勢力の大きさの、想像に絶したものがあることが考えられる。

かつて旧知の鈴木鼓村君から、またこんな話を聽いたこともある。鈴木君は磐城亘理郡わたり小鼓村の旧家の出で、それで号を鼓村こそんといつてゐるが、今から百二十年ほど前の鈴木君の家へ、おりおりもらいにくる老人があつた。人と物をいわず、物を遣ると口の中で唱え言となごをするが、何をいうのか少しも聴取れない。飯は両手に受けて副え物そものもなしに、鬚ひげだけの顔をよごして食う。酒は大好きで、常に一斗二三升も入るかと思う。大瓢箪おおひょうたんを携え來り、それに入れて遣るとすぐに持つて帰る。衣類は着けているが、地合じあいも縞目しまめも見えぬほど汚れていた。生の貝をもらつて、石の上で碎いて食つたといって、人は戯れにこれをアサリ仙人せんにんと呼んでいた。何処に住む者とも知れず、七日も十日も連日くるかと思えば、

二月も三月も絶えてこぬこともあった。帰る際にその跡をつけた者があつたが、山に入る
と急に足早になり、たちまちにその影を見失つた。小鼓こづづみは阿武隈あぶくまの川口であつて、山は
低いけれども峯は遠く連つてゐる。このアサリ仙人は或る日の朝、鈴木氏の玄関の柱にそ
の大瓢箪をくくりつけて置いて、それつきり永久に遣つてこなくなつた。この話には誤伝
がないともいえぬが、瓢箪だけは最近に至るまで、この家の宝物の一つであつた。口は黄
金ですこぶる名瓢であつたという。

仙人を見縊みくびるのは本意でないが、これくらいの仙人ならば、まだ山男にも勤まると思
う。ただ鈴木氏の永年おんぎの恩誼は厚かつたにしても、最後に人知れずその瓢をくくりつけて
去つたという一点だけが、彼らのとうてい企てえまいと思うロマンチックであつた。この
地方の山人が里に親しみ、山で木小屋の労働者を驚かすに止らず、往々村人の家を訪ねて
酒食を求め、村人もまたこれを尊敬していたことは、次のオオヒトの条下に確からしい一
例を掲げる。そうするとこれもまた同化帰順の一段階であつて、瓢箪のごときもじつはあ
まりに大きいので、何か手ごろの容器とただそつと取り替えて往つたのかとも考えられる。

二七 山人の通路のこと

今日のいわゆるアルプス連れなどは、どういう風にしているか知らぬが、猟師・木挽らのごとくたびたび山奥に野宿せねばならぬ人々は、久しい経験から地形に由つて、不思議の多かりそうな場所を知つて力めてこれを避けていた。おりおりこれは聴く話であるが、深山の谷で奥の行止まりになつてゐるところは無事であるが、嶺が開けて背面の方へ通じている沢は、夜中に必ず怪事がある。素人は魔所などといえば、往来不可能の谷底のように考えるけれども、事実はかえつて正反対であるという。或いはまた山の高みの草茅の茂みの中に、幽かに路らしいものの痕跡を見ることがあると、老功な山稼人は避けて小屋を掛けなかつた。即ち山男・山女の通路の衝なることを知るからである。国道・県道という類の立派な往還でも、それより他に越える路のないところでは、夜更けて別種の旅人の、どやどやと過行く足音を聴いた。峠の一つ屋などに住む者は、往往にしてそんな話をする。もちろん或る場合には耳の迷いといふこともありうるが、山人とも他に妨げさえなくば、向うの見通される広路を行く方を、便利としたに相異ないのである。

百五十年ほど前に三州豊橋の町で、深夜に素裸すっぽだかではだしの大男が、東海道を東に向つて走るのを見た者がある。非常な速歩はやあしで朝日の揚あるころには、もう浜名湖の向うま

で往つていた。水中に飛込んで魚を捕え、生のままで食つてゐるのを見て始めて怪物なることを知つたと、『中古著聞集』^{ちゅうこちよもんじゆう}といふ豊橋人の著書には書いてある。彼らに出逢つたという多くの記事には、偶然であつた場合に限つて、彼らの顔にもやはり驚駭^{きょうがい}の色を認めたといつてゐる。畏怖も嫌忌も恐らくは我々以上であつて、従つて必要のない時にはたいてい繁^{しげ}み隠れなどから注意深く平地人の行動を、窺つていたのであろうと想像する。

菅江真澄^{すがえますみ}の『遊覧記』三十二卷の下、北秋田郡の黒滝の山中で路に迷つた條に、「やゝ山頂とおぼしき処に、横たはる路のかたばかり見えたるに、こは路ありあな嬉しと言へば、案内の者笑ひて、いづこの嶺にも山鬼^{さんき}の路とて、嶺の通路はありけるもの也。此道を行かば又何處とも無く踏迷ひなんとて、尚峯^{なお}に登る云々」とあつた。故伊能嘉矩氏の言には、陸中遠野地方でも山の頂の草原の間に、路らしいものの痕迹^{こんせき}あるところは、山男の往来に当つていると称して、露宿の人がこれを避けるのが普通だつたとの話である。阪本天山翁、宝暦六年の『木曾駒ヶ岳後一覽記』^{そこまたけのちのいちらんき}に、前岳^{まえだけ}の五六分目、はい松の中に一夜を明す。ここに止宿のことは村役人・人足までも不承知にて、かれこれと申すにつきその趣

旨を尋ねて見ると、すべてかようの山尾根先おねさきは天狗の通路であつて、樵夫の輩きこりやから一切夜分やぶんは居らぬことにしていと述べた。しかばむつかた方の者どもは、山の平に廻つて止宿せよと申聞け、自分だけ其場に止宿したと記している。紀州熊野でも山中に小屋を掛ける人たち、谷の奥が行抜けになつて向う側へ越えうる場所はこれを避け、奥の切立つて行詰まりになつた地形を選定するのを常とした。その理由は行抜けのできる谷合たにあいは、通り物の路みちに当つているからだと、南方熊楠氏に告げた者があるそうだ。

そうかと思うと一方には、人が開いた新道を、どしどし彼らが利用している場合もあるらしい。秋田から仙北郡の刈和野かりわのへ越える何とか峠には、頂上に一軒家の茶店があつた。秋田の丹生氏がかつてこの家に休んだ時、わたしらももう何処かへ引越ししたいと、茶屋の主がいうので、どういうわけかと訊ねてみると、じつは夜分になると、毎度のように山男が家の前を通る。たいへいざん太平山めめきから日々木の方へ越えて行くらしく、大きな声で話をしてどやどやと通ることがある。この峠は疑なく山鬼の路らしいから、永くはおられませぬと答えたそうである。遠野でも町から北へ一里ばかり入つて、柏崎の松山の下を曲がる辺に、路が丁字に会してその辻に大きな山神石塔を立ててある。近い年或る人が通行していると、山から下りてくる足音がするのを、何の気なしに出逢うて見たところが、赤い背の高い眼

の怖ろしい、真裸の山の神であつた。はつと思うなり飛退とびのいてしまつて、自身はそこに気絶して倒れた。石塔はすなわちその記念の為であつた。『遠野物語』にもその話は筆録しておいたがかなり鋭敏な鼻と耳との感覚を持ち、また巧みに人を避けるらしい山人にも、なお人間らしき不注意と不意打とはあつたのである。第一昼間人間の作つておく路などを、降りてきたのは氣楽過ぎていた。

山鬼さんきという話は安芸の**厳島**いつくしまなどでは、久しく**天狗護法**てんぐごほうの別名のごとく考えられてゐる。或いは三鬼とも書いてその数が三人と解する者もあつたらしい。御山の神聖を守護して不淨の凡俗のこれに近づくを戒め、しばしば奇異を示して不信者の所業を前もつて慎ましめようとしていた。最も普通の不思議は廻廊の板縁いたべりの上に、偉大なる足跡を印して衆人に見せることである。或いは雪の朝に思いがけぬ社の屋おくの上などにこれを見ることがある。その次は他の地方で天狗笑いまたは天狗倒しともいうもので、山中茂林の中に異常の物音を発し、或いはまた意味不明なる人の声がすることもあつた。これを聴いて畏れおののかぬ者のなかつたは尤もである。秋田方面の山鬼ももとは山中の異人の汎はん称しようであつたらしいのが、のちには大平山上に常住する者のみをそういうことになり、ついには三

吉大権現とも書いて、儼然として今はすでに神である。しかも佐竹家が率先して夙にこれを崇敬した動機は、すぐれて神通力という中にも、特に早道早飛脚で、しばしば江戸と領地との間に吉凶を報じた奇瑞からであった。従つて沿道の各地でも今なお三吉様が道中姿で、その辺を通っていることがあるように考え、ことにその点を畏敬したのであつた。神を拝む者はぜひともその神の御名みなを知らなければならぬというのは、ずいぶん古くからの多くの民族の習性であった。天狗がいよいよ超世間のものと決定してから、太郎坊・三尺坊等の名が始めて現れたことは、従来人の注意せざるところであつた。どういう原因でそんな名前が始まつたかを考えてみたら、また多くの新たな答が出てくることであろう。

二八 三尺ばかりの大草履のこと

また山男の草履ぞうりを見たという話がある。夏冬を打通して碌な衣裳いしょうも引掛けていなかつた者に、履物はきものの沙汰さたもちとおかしいとは思うが、妙にその噂が東部日本の方には拡がつている。信州木曾辺はことにこれを説く者が多い。出羽の莊内の山中でも杣人そまびとがこれを

拾つてきて、小屋の入口の柱に吊して置くと、夜のうちに持つて還つたか、見えなくなつたなどといつてはいる。上州の妙義・榛名でも獵師・木樵の徒、山中でこの物を見るときは畏れてこれを避けたと、『越人関弓録』という書には説いてある。

その草履の大きさは三四尺、これを山丈の鞋と称すとある。『四隣譚叢』などによれば、信州は千隈川の水源川上村附近の山地においても、山姥の沓の話を信じてゐる。藤蔓を曲げ樹の皮をもつて織つてあるなどと、なかなか手のこんだもののように言い伝えているのである。大きいと言えばすぐに長さ三尺の四尺のと書かなければ承知せぬが、かりにこれに相応するような大足の持主があるにしても、そんな物を履いて山の中があるけたものでない。我々風情の草履ですらも、野山を盛んに飛廻つていた時代には、アシナカ（足半）と称するものを用い、または単に繩で足の一部分を縛つて、たいていは足一杯の草履は履かなかつた。すなわち足趾のつけ根の一番力の入る部分を、保護するだけをもつて満足したのであつた。

ただしこの類の話などは、誇張妄誕といわんよりも、むしろ幻覚であつたかと思う。見たかと思つたらすぐになくなつていたというようなもので、確かに出来事ではなかつたかと思う。いろいろ製法や材料配合の話はあつても、なおどこかで採集してきて博物館に

でも陳列せられぬ限り、自分たちはこれをもつて一種の昔話としておきたいのである。もちろん話にしたところで根原がなければならぬ。作つて偽を説く者はあつても、そうみなが信ずるはずはないからである。ただ話ならば少しづつ成長して行くことはあるかも知れぬ。陸中二戸郡の淨法寺村などで、深山に木を伐る者の発見したというのは、例のマダの樹の皮で作つた大草履で、その原料のマダの皮が、およそ馬七頭につけて戻るくらいの分量であつたと話している。面白いといつて聴くのはよいが、全体に今ではもう話になりすぎている。それというのが風説のみ次第に高く、実際に見た出逢つたという人の例が、だんだん少なくなつて行く結果である。

山丈・山姥の鞋という話は、我々の持つていた沓掛の習俗、すなわち浅草仁王門の格子の木にむやみな大わらんじの片足をぶらさげた行為などと比較して考えて見るべきものかと思う。現在各地の街道筋に、沓掛という地名のあるところには、通例は道の神の森または老樹があつて、通行の人馬の古沓などが引掛けてある。或いは下から高く投げ上げて占いをしたという地方もあり、または支那でいう鮑魚神同然にその草鞋の喬木の梢にあるを異として、神に祀つた話もある。靈山の麓などでは山の土を遠く持ちだすこと

を山神^{にく}悪みたもうという信仰もあって、必ず登山の鞋を脱いで行く場所もあるのだが、別に神々に新たなるものを製して献上する例も弘く行われていた。山の神は一本足だと称して、大きな片足だけを供える。竈^{かまど}の神は馬でありもしくは馬に乗つてくるというので、新しい馬の沓を上げていた根源は、おそらく絵馬^{えま}なども同様に、これを召しておわしませ、これを召して立たせたまえと、神昇降の時刻を暗示する趣旨かと思うが、もちろん信仰はだんだんに変化している。ことに路の傍や辻^{つじ}境^{さかい}などに偉大な履物を作つて置いた動機には、明白に魔よけの意味が籠^{こも}つっていた。いつの世から始まつたことか知らぬが、こんな大きな草履を用いる者が、この村にはいるから馬鹿にしてはいけないということを、勝手を知らぬ外来者、すなわち鬼や疫病^{やくびよう}神^{がみ}に知らしめるために、一種の示威運動としてこうするように、解釈している者も少なくはないのである。敵に対しては詐術^{さじゆつ}も正道と、つい近ごろまで我々も信じていた。そうかと思うと海南の小島においては、潮に漂うて海の外から、そんな大草履が流れてきたといって、畏れ慎んでいた話もあつた。この方が多く分一つ前の俗信で、つまりは己^{おのれ}の心に欲せざるところを、人に向かつて逆用しようとしたものであるらしいのだ。

だから第二の仮定説としては、山人の大草履も自分のためには必要でないが、世人を畏い嚇する目的でわざわざこれを作り、なるべく見られやすいところにおいたものとも考えられぬことはない。しかしそのような気の利いた才覚は、ついぞ彼らの拳動から見出したことがないから、今ではまだそれまで買いかぶることができないのである。もつとも深山の奥に僅少の平和を樂む者が、いや猶人かりうどの岩魚釣りだの、材木屋だの鉱山師だの、また用もない山登りだと、毎々きて邪魔をすることは鬱陶うつとうしいには相違ない。やめて欲しいと思つてゐることは、此方からでも想像することができます。そこに単独の約束が起こり法則が生じて、のちようやく宗教の形になつて行くことは、いずれの民族でも変りはなかつた。しかも冷淡なる第三者の目をもつて判ずればそは單に一方だけの自問自答であつて、果して此方の譲歩が先方の満足と相当つたか否かは、確かめたわけではないのである。深山の中でも特に不思議の多い部分を我々は魔所または靈地と名づけてあえて侵さなかつた。それが自然に原住土人にとっての一種のレザーヴとなつたことは、原因ともどちらとでも解せられる。いわゆる入らず山に強いて入つた者の、主觀的な制裁は多様であつた。最も慘酷なるものは空へ引きあげて、二つに割いて投げおろすといった。或いは何とも知れぬ原因で躓いたり落ちたりして傷きまたは死んだ。永遠に隠されてしまつて親兄弟を歎か

しめることがある。およそ尋常邑里^{ゆううり}の生存において予知すべからざる危難は、ことごとく自ら責め深く慎むべき理由としてこれを認めたのが山民の信仰であつた。

それ以外にも予告警戒のごときものはいくらもあつた。天狗の礫^{つぶて}と称して人のおらぬ方面からぱらぱらと大小の石の飛んできて、夜は山小屋の屋根や壁を打つことがあつた。こんな場合には山人が我々の来住を好まぬものと解して、早速に引きあげてくるものが多くつた。こればかりは猿さえもするから、或いは山人の眞の意趣に出たものと考えてもよいが、それがいつでも合図に近くして、かつてこれによつて傷いたという者を知らず、石打の奇怪事は都邑の中にも往々にして起こり、別に或る種の隠れた原因があるらしいから、まだなんとも断定はできない。それから足音や笑い声の類は、偶然にこれを聴いた者がおじ恐れたといふだけで、もとよりそのような計画のあつたことを、立証することは容易でない。ことに最も有名なる天狗倒しの音響に至つては、果して作者が彼らであつたかということさえ、なお疑わなければならぬのであつた。或いは狸の悪戯などという地方もあるが、本来跡^{あとかた}方もない耳の迷いだから、誰の所業と尋ねてみようもない。深夜人定まつてから前の山などで、大きな岩を突き落す地響がしたり、またはカキンカキンと斧の音が続いて、やがてワリワリワリワリバサア^さア^ンと、さも大木を伐り倒すような音がする。夜が明

けてからその附近を改めて見ると、一枚の草の葉すら乱れてはいなかつた、などというのが最も普通の話で、こういう出来事があまり毎度繰り返されると、山が荒れると称して人が不安を感じ始め、ついにはその谷を「よくないところ」の一つに算えて、避けて入らぬようになるのである。しかし多勢が一度に聴いても幻覚はやはり幻覚である。或いは同じ物音をともに聴いたとしても、甲の暗示が乙を誘い、また丙の感じを確かにしたのかも知れぬ。東京あたりの町中でも深夜の太鼓馬鹿囃子たいこばかばやし、或いは広島などでいうバタバタの怪、始めて鉄道の通じた土地で、汽笛汽罐車きかんしゃの響を狐狸こりが真似するというの類、およそ異常に強烈な印象を与えたものが、時過ぎて再びまぼろしに浮ぶ例は、じつは他にも数限りがないので、たまたま山の生活と交渉のある場合ばかりこれを目に見えぬ山の人の神通に托するがごときは、むしろ我々の想像の力の致すどころであつたかも知れぬ。

ただしこれをも我々の実験の中に算えて、見た出逢つたというのと同じ程度の、信用を博している物語は多いのである。少なくともその二三の例は、のちの研究者のために残しておく必要があると思う。

『白河風土記』卷四に、「鶴生つりう（福島県西白河郡西郷村大字）の奥なる高助たかすけと云ふ所の山にては炭竈すみがまに宿する者、時としては鬼魅きみの怪を聴くことあり。其怪を伐木坊きりきぼう又は小

豆磨と謂ふ。伐木坊は夜半に斧伐の声ありて顛木の響を為す。明くる日其処を見るに何の痕も無し。小豆磨は炭小屋に近づきて、中夜に小豆を磨する音を為す。其声サクくと云ふ。出でて見るに物無し、よりて名づくといへり。』

『笈埃隨筆』卷一に、「途中にて石を擊たるゝこと、土民は天狗の道筋に行きかゝりたるなりと謂ふ。何れの山にても山神の森とて、大木二三本四五本も茂り覆ひたる如くなる所は其道なりと知ると言へり。佐伯了仙と言ふ人、豊後杵築の産なり今は京に住めり。此人の云ふ。国に在りし時、雉子を打ちに夜込に出でたり。友二三人と共に鳥銃を携へて山道にかゝりしに、左右より石を投げたり。既に当りぬべく覚えて大に驚きたる中に、よく心得たる者押静め、先づ下に坐せしめて言を交へずしてある程に、大石の頭上に飛びちがふばかりにて其響夥しかりしが、暫くして止みければ、立上りて行きける。其友の謂ふやう、此は天狗礫と云ふものなり。曾て中るものには非ず。若し中れば必ず病むなり。又此事に遭へる時は必ず猶無し。今夜は帰るには道遠ければ是非なく行くなりと曰ふ。果して其朝は一も獲物なくして帰りたりといへり。』

『今斎諧』卷二に、「加賀金沢の土篠原庄兵衛、或時深山に入り、人跡絶えたる谷川の岸を行きしに、水辺には蘆すき間も無く茂りたるが、其あなたに水を隔てゝ、人のあまた

対坐して談笑する声聞ゆ。篠原之これを怪しみ、自ら行きて見んとすれど水に遮られて渡ることを得ず。連れたる犬にけしかけたれどまた亦行かず。因つて其犬の四足を捉へ、力を極めて之を蘆原の彼方かなたへ投げたるに、向ふよりも直ちに之を投げ返す。之を見て畏おそれを抱いだき家に帰る。犬には薬など飲ませたれど、終に死したり。』

『北越奇談』に、「神田村に鬼新左衛門と云ふ者あり。殺生せつしょうを好む。村の十余町奥なる山神社の下の渓流に水鳥多し。里人は相戒めて之を捕りに行くことなかりしを此男一人雪の中を行き、もち繩なわを流して鳥を取ること甚だ多し。一夜又行きしも少しも獲物無きことあり。曉あかつきに及び、何者とも知れず氷りたる雪の上を歩む音あり。新左衛門小屋の中より之を窺うかがふに、長一丈余りの男髪は垂れて眼を蔽へり。新左衛門のすくみ居たるを、小屋の外より箕みの如き手を出して攫つかみ上げ、遙かに投げ飛ばしたりと思へば氣絶す。翌朝女房より村長に訴へて谷々を捜せしに、谷二つ隔てゝ北の方に新左の雪中に倒れたるを見付けたり。其後生き返り殺生は止めたれど、三年ばかりにして死したりと云ふ。深山の奇測り難し。』

次も同じく越後の事であるが、これは会津八一氏あいづやいちの話を聴いたのである。妙高山の谷には硫黄いおうの多く産する処があるが、天狗の所有なりとして近頃までも採りに行く者は無かつ

た。ところが先年 中頸城郡板倉村大字横町の何右衛門とかいう者、これに眼を着けて十数名の人夫を引率し、この山に入つて谷間に小屋を掛け日中は硫黄を採取し夜はこの小屋に集まつて寝た。或る夜深更に容易ならぬ物音がして小屋も倒れんばかりに震動したので、何右衛門を始め人夫一同も眼をさまし先ず寒いから火を焚こうとしていると、戸口の方から顔は赤く白い衣物で背の高い人が入つて來た。皆の者は怖しさに片隅に押しかたまり、蒲団を被つて様子を伺つていると、かの者はすかずかと板の間に上つて來たようであつたがその後の事はわからず。夜の明けるのを待つて見れば、かの何右衛門だけは首を後向^{うしむ}きに捻じ切られてつめたくなつていたと謂う。今でもこの谷に入つて若し硫黄の一片でも拾おうとする者があれば、必ず峰の上から大声で、そこ取んなアとどなる者があると謂い、また首を捻じられるからと少しでも侵す者は無いそうだ。またこの辺の村に往つて天狗などはこの世に無いものだとでも言おうものなら、必ずこの何右衛門の話を聞かされれる。この時の人夫の一人に、近い頃まで生きていたのであつて、その老人から直接にこの話を聴いた者は幾人もあつたのである。

二九 巨人の足跡を崇敬せしこと

山人の丈たけの高いということは、古くからの話であつたと見えて、オオヒトという別名も久しく行われていた。これもオオヒトというからには、ちつとやそつとでは承知ができず、見上げるような高い樹の幹に、皮を剥はいだ痕はがあつたとか、五六尺もある萱かや原はらに、腰から下だけが隠れていたとか、または山小屋またを跨またいでゆさぶつたとか、いろいろな珍しい話を伝えているかと思うと、一方には我々とたいて同じくらいの、やや頑丈がんじょうなる体格であつたといい、六尺より低いのは見たことがないという類の、穩健なる記録もまたいくらもあつたので、きのこか何かででもない以上は、そのような大小不揃ふぞろいの物があるわけはないから、すなわちこれも又聞きの場合の掛かけね値またぎであつたことを、想像しえられるのである。

或いは雨後の泥の上や雪中に印した足跡を見て、その偉大なのに驚いたとも伝えられる。なかにはあんまりえらい大股おおまたであるのを、やはり大昔から人が想像している通り、一本足で飛びまわるのが真らしいと考えていた人さえあつた。それらの観察の精確を欠いていることは、論のない話であるが、もともと大きいが故にこれを山男の足跡だらうといつた人があるとすれば、すなわち迷信の原因は別にすでにあつたものと認めなければならぬ。

しかも日本は古くから、足跡崇敬の国であつた。神明仏菩薩勇士高僧の多くが岩石など
の上に不朽の跡を遺して、永く追慕を受けている国であつた。いわば山人思想の宗教化と
いうことには、正しく先蹤^{せんしゆう}があつたのである。我々平民の祖先は、国土平定というご
とき記念すべき大事業を、太古の巨神の功績に帰していたのみならず、諸國の地方神に隨
従して神徳を宣伝したという眷属^{けんぞく}の小神にも、また大人の名を附与してその遺跡と口碑
とを保存し、さらにオオヒトが山にいる異種人の別名なることを知つた場合でも、なお単
なる畏怖の念以上のものをもつて、その強力の跡を挙もうとしていたのである。

東部日本の諸県において、オオヒトといったのは山人のことであつた。もちろん大きい
からの大人であろうが、その大きさが驚くべく一様でなかつた。見た人が次第に少なく、
語る人ますます多かりし証拠である。今に至つては実状を確かめることはむつかしいが、
区々の異説は及ぶ限りこれを保存しておかねばならぬ。

一 陸奥と出羽との境なる吾妻山の奥に、大人と云ふものあり。蓋^{けだ}し山氣の生ずる所なり。
其長^{たけ}一丈五六尺、木の葉を綴りて身を蔽ふ。物言はず笑はず。時々村の人家に入来る。村
人之を敬すること神の如く、其為に酒食を設く。大人は之を食はず、悉く包みて持帰る也。

村の子供時として之に戯ることあれども、之を怒りて害を作せしことを聞かず。神保甲作の話なり（『今斎諧』卷四）。

二 上野黒竜山不動寺は、山深く嶮岨けんそにして、堂宇其間に在り。魔所と言ひ伝へて怪異甚だ多し。山の主ぬしとて山大人と云ふものあり。一年に二三度は寺の者之を見る。其坐すると膝ひざの高さ三尺ばかりあり。偶 『たまたま』足跡を見るに五六尺もありて、一歩に十余間を隔つと云へり（『日東本草図彙』）。

三 高田の大工又兵衛と云ふ者、西山本に雇はれありしが、一夜急用ありて一人山道を還りしに、岨路そばみちの引廻りたる処にて図らずも大人に行逢ひたり。其形裸身にして、長は八尺ばかり、髪肩に垂れ。眼の光星の如く、手に兎うさぎ一つ提げて静かに歩み来る。大工驚きて立止れば、かの大人もまた驚けるさまにて立止りしが、遂に物も言はず、路を横ぎりて山に登り走りしとぞ（『北越雑記』卷十九）。

四 飛驒の山中に才ホヒトと云ふものあり。長は九尺ばかりもあるべし。木の葉を綴りて衣とす。物をも言ふにや之を聞きたる人無し。或獵師山深く分け入りて獸多き処を尋ねけるが思はず此物に逢ひたり。走り来ること飛ぶが如し。遁るべきやうなればせん方無くせめては斯かたくもせば助からんかと、飢うえの用意に持ちたる 団にぎりめし飯とりいを取出で、手に載せて差

出せしに、取食ひて此上無く悦べる様なり。誠に深山に自ら生れ出でたる者なれば、かの洪荒こうこうと云ふ世の例も思ひ出でられてかゝる物食ひたるは始めての事なるべしと思はる。暫くありて此者狐貉夥きつねめなただしく殺しもて來り与へぬ。団飯の恩に報いる也けり。猟師勞無くして獲物多きことを悦び、それよりは日毎に団飯を包み行きて獸に換へ帰りたり。然るを隣なる猟師之を怪み、竊ひそかうに窺かがひ置きて、深夜に彼に先だち行きて待つに、思はず例の者に行逢ひたり。鬼とや思ひけん彈たまこめて打ちたり。打たれて遁げければ猟師も帰りぬ。前の猟師此事を聞きて、あな不便の事やとて、猶山深く尋ね入り峰より下を見たるに、此者谷底に倒れ伏し居たるを、同じ様なる者の傍に添ひたるは介抱するなるべし。若し近づきなば他に打たれし仇あだを、我に怨みやせんと怖しくなりて止みぬ。斯くて後には死にたるなるべしと、後に此事を人に語りしを、人の伝へたりし也。深き山にはかかる者も有りけるよとて、細井知慎ほそいともちか語れり（『視聴草』第四集卷六所録「荻生徂徠手記」）。

巨人の足跡を見て感動した例は、決して支那の昔話だけでない。小田内通敏君が聴いて教えてくれた話には、秋田市檜山に住む丹生某氏、狩が好きで方々をあるき、或る年仙北郡神宮寺山の麓の村で、人の家に一泊したところ、一つの紙袋に少しの砂を入れたの

が、神棚に載せてあつた。主人にそのわけを尋ねると、つい近いころに、山の下を流れる雄物川の岸で草を刈つていると、不意に大きな物音がして、山から飛降りた者がある。よく見たら山男であつた。怖ろしいから茅のかやの蔭に隠れていて、のちにその場所に行つて見れば、川原に甚だ大きな足跡があつた。あまり珍しいこと故、村の人たちを呼んできて見せると、一同は崇敬のあまり、その足跡の砂を取分けて各自の家に持ちかえり、こうして神棚に上げておくのだと答えたそうである。

雪の上に大きな足跡を見たという話はまだ沢山ある。その二三をあげてみると、
 一 遠州奥山郷白鞍山おくやましらくらやまは、浦川の水源なり。大峰を通り凡そ四里、山中人跡稀まれなり。
 神人住めり。俗に山男と云ふ。雪中に其跡を見て盛大なることを知る。其形を見る者は早く死す（『遠江国風土記伝』）。

二 駿河安倍郡腰越あべこしごえ村の山中にて、雪の日足跡を見る。大きさ三尺許ばかり、其間九尺ほどづゝ、三里ばかり、小路に入りて続けり。又此村の手前に小川あり。此川を一跨ぎに渡りしと覚えしは、其川向かわむこう二三間げんにも足跡ありしと。之を山男と謂ひ、稀には其糞ふんを見当ることあるに鈴竹すずたけといふ竹葉を食する故糞中に竹葉ありといふ。右の村々は大井川の川上なり。府中江川町三階屋仁右衛門話したり（『甲子夜話』）。

三 小虫倉山、虫倉明神、公時きんときの母の靈を祭る。因つて阿姥おうば明神社とも云ふ。山姥の住めりしといふ大洞二つあり。近年下の古洞に、山居の僧住せしより、山女之いと厭いとひ去ると謂ふ。其以前は雪の中に、大なる足跡を見たり（『信濃奇勝錄』卷二）。

四 文政中、高岡郡たかおか大野見郷島おおのみの川の山中にて、官より香輦こうじんを作らせたまふとき雪の中に大なる足跡を見る、其跡左のみにて一二間を隔て、又右足跡ばかりの跡ありこれは一つ足と称し、常にあるものなり。香美郡かみにもあり（『土佐海』続編）。

土佐では山人を一般に山爺やまじいと呼んでいる。一本足でおまけに眼も一つだと信じ、これにあつたという人さえあつた。紀州熊野の深山でも、一たたら、または一本踏鞴たたらなどと伝え、かつて勇士に退治せられた話がある。その他の府県でも、山に一本足の怪物がいるという説は多いが、単に雪の上の足跡から、推測しうべきことではもちろんなかつた。すなわち実験以前から、そういう言い伝えがすでにあつたので、誤信ながらもそれにはまた、別途の説明があつたのである。

また雪の上ではなくとも、足跡の不思議は久しい以前から、我々の祖先を驚かしていた。信州戸隠なえいでも大雨ののち、畑などの土に二三尺の足跡のあるのをたびたび見たといい、越後の苗場山なえばやまでも雨後に山上に登れば、長さ尺余の足跡を見ることがあると、『越後野志』えちごやし

卷六に書いている。播州揖保郡黒崎の荒神山に、萩原孫三郎の墓と伝うる古塚があつて、石の祠ほこらが安置してあつた。嘉永の初年とかに、或る人この辺を拓いて畑としたところが、一夜の中に踏荒ふみあらして大きな人の足跡があつた。そうしてその家は全家発狂してしまつたと、『西讃府志』卷五十一に書いている。

『仙梅日記』には駿州梅ヶ島・仙ヶ俣の旅行において、一人の案内者が山中さんに話した。雪の後に山男の足跡を見ることがある。二尺ほどの大足である。門野かどというところの向う山には、山男が石に歩みかけた足跡がある。岩が凹へこんで足の形を印している。いかほどの強い力だろうかといったそうである。

こういう人々の心持では、巖石の上に不朽の痕跡こんせきを止めることも、大人ならば不可能でないと思つたのであろうが、親しく実際にについてみると、ほとんどその全部が山男たちの関与するところではなかつた。大人足跡という口碑は、すでに奈良朝期の『常陸風土記』大櫛岡おおくしのおかの条にある。丘壘おかの上に腰かけて大海の蜃おおうむぎを採つて食つたといい、足跡の長さ四十余歩、広さは二十余歩とある。『播磨風土記』の多可郡の条にも巨人が南海から北海に歩んだと伝えて、その跡あと処どころ数々沼を成すと記してある。そこで問題は我々の前代の信仰に別に大人と名づけた巨大の靈物があつて、誤つてその名を山人に付与したの

ではないかということになるが、もしそうならばこれとともに足跡に関する畏敬の情までも、移して彼に与えたことになるのである。すなわち羽後の農民などが足跡の砂を大切にしたのはむしろ山人史末期の一徵候で、事蹟が不明になつたためにかえつて一層これを神秘化したものでないかとも思われるるのである。

現在の大人足跡は中国に最も多く、四国・紀州等はこれに次ぎ、いずれも地名となつて各国數十百を算する。しかし他の地方とても決して絶無ではなく、ことに偉大な足跡は到るところに散在しているが、その或るものは単純にこれを鬼の足跡ともい、或いはまた大太法師とも唱えている。関東の各地でダイラボツチ、もしくはデエラ坊の話というのもこれで、多くはいわゆる足跡に伴なう伝説である。東京の近郊などにも現にいくつかあるが、全国を通じて大体にこれを二様に区別することができる。その一つは前の駿州仙ヶ俣の場合のごとく、岩石の上に跡を印したもので、不思議は主として石のごとく堅いものを踏み窪めたという点にあり、従つて独り山人のみにあらず古来の偉人勇士例えば弁慶・曾我五郎という類の人々までが作者である故に、その形はさして大きくない。そうしてその石はたいてい崇拝せられている。これに反して第二の種類にはいくらでも大きなものがあ

つて、従つて鬼物巨靈にのみ托せられる。東京近くでは、京王電車の代田^{だいだ}という停留所の辺には、昔大太法師が架けたという橋があり、それからわざか南東にある足跡は、足形こそしてはいるが、面積は約三町歩、内部は元杉林であつたが、今では文化住宅でも建つているかも知れぬ。^{かかと}踵にあたるところには地下水の露頭があり、その傍には小さな堂もあつた。それからまた東南方には二ヶ處の足跡あり、駒沢村にあるものは更に偉大であつた。枝村^{るえ}で見たものは、小川を隔てて双方の岡の上にあつた。その一つはすでに崩れているが、他の一つは約一畝歩^{せぶ}、四周の樹林地の中にこれだけが土地台帳で別筆となつて、その分を開いて麦か何かが播^まいてあつた。甲州信州辺のデエラボツチヤも、たいていは孤立した湿地であつたが、そうでない足跡もあるようである。何にしても附近と地形が違つて、それがほぼ足形をしておれば、大人の跡といったのである。

大人は富士を脊負うて、いずれへか持つて行こうとしたり、または一夜に大湖を埋めようとして簍^きを以て土を運んだ。その簍の目をこぼれた一塊が、あの塚だこの山だという話はどこにでもある。つまりは古くからの大話の一形式であるが、注意すべきはことごとく水土の工事に關聯し、ところによつては山を蹴開き湖水を流し、耕地を作つてくれたなど

と伝え、すこぶる天地剖析の神話の面影を忍ばしむるものがある。古い言い伝えには相違ないのである。大きい行止まりは加賀国の大人の足跡、東は越中境栗殼山の打越に一つ、次には河北郡木越きごの光林寺の址あとという田の中、次には能美郡波佐谷はさだにの山の斜面、すなわちこの国を三足であるいた形である。いずれも指の跡までが分明で、下に岩でもあるものか、田の中ながらそこだけは草も生えない。それから壱岐の島の国分の初丘にあるもの、爪先つまさき北に向かつて南北に十二間、幅は六間で踵のところが二間、これを大の足跡と呼んでいる。大昔に大という人、九州から対馬へ渡ろうとして、この中間の島に足を踏立てた。その跡であるという。少し窪んで水が出ている。こんなところは附近に多いと『壱岐名勝いきめいしようずしお図誌』には記している。

大人は九州の南部では、大人弥五郎と称し、また大人隼人はやとなどともいっている。八幡神社の眷属けんぞくのようにもいえば、また昔この大神に治伐せられた兇賊のごとくにも伝えて一定せぬが、一方には山作りや足跡の話もあれば、他の一方には祭の時に、人形に作つて曳きあるいている。そうして隼人はまたこの地方では、征服せられたる先住民の総称である。隼人が上代の被征服者であるために、これを大人隼人などと呼んでいるのならば、我々の伝えんと欲する山の人も、オオヒトという別名をえた理由が別になおあつたかも知れぬ。

しかし考えて行くほどかえってだんだんにむつかしくなるらしいから、もうこの辺で一旦は話をやめておこう。

三〇 これは日本文化史の未解決の問題なること

ここで打切つてはもちろんこの研究は不完全なものである。最初自分の企てていたことは、山近くに住む人々の宗教生活には、意外な現実の影響が強かつたということを、論証してみるにあつたのだが、残念ながらそれにはまだ資料が十分でない。後代の篤学者はなお多くの隠れたるものを見発掘することであろう。しかしだ一つほぼ断定してもよいと思うことは、中世以後の天狗思想の進化に著しく山人に関する経験が働いていたことである。単に眼が光る色が赤い、背が高いなどの外形のみではない。仏法方面の人からは天魔の扱いを受けつつも、感情があり好意悪意があつて、或いは我々に近づき或いはまた擯斥ひんせきし、機嫌きげんにも時々のむらがあつて、気に向けば義侠的に世話をしてくれるなど、至つて平凡なる人間味の若干をまじえていることは、それが純然たる空想の所産でないことを思わしめる。

彼らはまた時として我々から、ひどくやつつけられたという話もある。天狗の神通をもつてして、不覚千万^{ふかくせんばん}のようではあるが、かの杉の皮で鼻を彈かれて、人間という者は心にもないことをするから怖ろしいといった昔話などは、少なくともかつて人間と彼らとの間に、対等の交際があつたという偶然の証拠である。欺くに方法をもつてするならば、天狗必ずしも恐るるに足らずとする考えは、我々の世渡りには大切な教訓でありまた激励であつた。故に或いは自分だけは筈^{たけのこ}を喰い、相手には竹を切つて煮て食わせて見たとか、また白い丸石を炉の火で焼いて、餅を食いにきた山人に食わせたら、大いに苦しんで遁げ去つたとかいうがごとき詐謀をもつてこれを征服した物語が、諸国に数多く伝わっているので、しかもその古伝の骨子をなす点が、主として火の美感であり、穀物の味であり、いずれも山人と名づくるこの島国の原住民の、ほとんど永遠に奪い去られた幸福であつたことを考えると、山の人生の古来の不安、すなわち時あつて発現する彼らの憤怒^{ふんぬ}、ないしは粗暴をきわめた侵掠^{しんりやく}と誘惑の畏れなども、幾分か自然に近く解釈しえられるかと思われ、これと相關聯する土地神の信仰に、顯著な特色の認められるのも、畢竟^{ひつきょう}はこの民族の歴史が、これを促したことになるのである。

最後になお一つ話が残つてゐる。数多ある村里の住民の中で、特別に山の人と懇意にしていたという者が処々にあつた。その問題だけは述べておかねばならぬ。天狗の方にも名山靈刹の彼らを仏法の守護者と頼んだもの以外に、尋常民家の人都つて、やはり時としてかの珍客の訪問を受けたという例は相應にあつた。その中でもことに有名なのは、加賀の松任の餅屋であつたが、たしか越中の高岡にも半分以上似た話があり、その他あの地方には少なくとも世間の噂で、天狗の恩顧を説かるる家は多かつたのである。今ではほとんと広告の用にも立たぬか知らぬが、当初は決してうかうかとした笑話でなかつた。訪問のあるという日は前兆があり、またはあらかじめ定まつていて、一家戒慎して室を淨め、叨りに人を近づけず、しかも出入坐臥飲食ともに、音もなく目にも触れなかつたことは、他の多くの尊い神々も同じであつた。災害を予報し、作法方式を示し、時あつて憂や迷を抱く者が、この主人を介して神教を求めんとしたことも、想像にかたくないのであつた。すなわちただ一步を進むれば、建久八年の橘兼仲のごとく、専門の行者となつて一代を風靡し、もしくは近世の野州古峰原のよう一派の信仰の中心となるべき境まできていたので、しかもその大切な顕冥両界の連鎖をなしたものが、単に由緒久しき名物の餡餅であつたことを知るに至つては、心窺かに在來の宗教起原論の研究者が、いた

ずらに天外の五里霧中に辛苦していたことを、感ぜざる者は少くないであろう。

始めて人間が神を人のごとく想像した時代には、食物は今よりも遙かに大なる人生の部分を占めていた。餅ほどうまい物は世の中にはないと考えた凡俗は、これを清く製して献上することによつて、神御満足の御面^{おんおも}ざしを、空に描くことをえたろうと思ううえに、更にその推測を確かめるにたるだけの実験が、時あつて日常生活の上にも行われたのである。我々の畏敬してやまなかつた山の人も、米を好みことに餅の香を愛したのであつた。特別なる交際が餅をもつて始まつたという話は、もちろん話であろうが今に方々に伝わつてゐる。これを下品として顧みないような学者は、いつまでも高天原^{たかまがはら}だけを説いてゐるがよい。自分たちは今ある下界の平民の信仰が、いかに発達してこうまで完成したかを考えてみようとするのである。前に話した馬に七駄のマダの皮で、草履を作つていたといふ陸中淨法寺の村で、或る農夫は山に行つて山男に逢つた。昼弁当の餅を珍しがるから分けてやると、非常に喜んでこれを食つた。お前の家ではもう田を打つたか、いやまだ打たぬというとそんだら打つてやるから何月何日の晩に、三本鍬^{くわ}と一緒に餅を三升ほど搗いて田の畔^{あぜ}に置けという。約のごとくにして翌日往つて見ると、餅はなくなり田はよく打つてあつたが、大小の田の境もなく一面に打ちのめしてあつた。それからも友だちになつて、

山に行くたびに餅をはたられて困った。その山男がまた彼に向かって、おれは誠によい人間だが、かかアは悪いやつだから見られないよう用心せよとたび言つて聴かせたと
いう話もあつて、六七十年前の出来事のように考えられている（『郷土研究』一ノ九、佐
々木君、次も同じ）。この地方の昔話の「山はは」は實際怖ろしい。鬼婆・天のじやくの
した仕事が、ここでは皆山ははの所業になつてゐる。

また閉伊郡の六角牛山ろっこうしでは、青笹村の某が山に入つてマダの樹の皮を剥いでいる、
じつと立つて見ていた七尺余りの男があつた。おれもすけてやるべとさながら麻を剥ぐよ
うにたちまちにしてもうたくさんになつた。それから傍の火にあぶつておいた餅を指さし、
くれというから承知をすると、無遠慮にみな食つてしまつた。来年の今ごろもまた来るか
と聞く故に、後難を恐れてもう来ないと答えると、そんだら三升の餅をいついつの晩に、
お前の家庭へ出しておいてくれ、一年中のマダの皮を持つて往つてやるからというので、
これもその通りにして見ると翌年は約束の日の夜中に、庭でどしんと大荷物をおく音がし
た。およそ馬に二駄ほどのマダの皮であつたという。それから以後は毎年同じ日に、この
家の庭上でいわゆる無言貿易は行われたのだが、今の主人の若年のころから、どうしたも
のか餅は供えておいても、マダの皮は持つて来ぬようになつたといつてゐる。

『津軽旧事談』に『弘藩明治一統志』その他を引いて、岩木山の大人と親善だったと記しているのは、麓の鬼沢村の弥十郎という農夫であつた。これはのちに自分もまた、大人となつて行方を知らずとも伝えられる。彼は最初薪を採りに入つて偶然と懇意になり、角力などを取つて日を暮し、素手で帰つてくると必ず一夜の中に、二三日分ほどの薪が家の背戸に積んであつた。或いはまた大人が弥十郎を助け、新たにこの土地を開発したのだともいい、また赤倉の谷から水を導いて村の耕地に灌漑したのも、同じ大人の力であつたと称して、その驚くべき難土木の跡について、逆さ水の伝説を語つてゐる。村の名の鬼沢と産土の社の名の鬼ノ宮とは果して今の口碑の結果であるか、はた原因であるかを決しかねるが後々までも村に怪力の人が輩出したといい、或いはまた大人が鎮守を約諾して、そのかわりには五月の節供に菖蒲を葺かず、節分に豆をまくなかれと言つたとあって、永く正直にこの二種の物を用いなかつたのは少なくとも近代の雑説ではなかつた証拠である。大人が弥十郎の妻に姿を見られたのを理由にして、再び来なくなつたというのにも何か仔細がありそうだ。その折記念に遺して去つた蓑笠は鬼ノ宮に、鍬は藤田という家に伝わつてゐるそうだが、藤田は多分弥十郎の末ですなわち草分けの家であつたろう。南部の方でも三戸郡の荒沢不動に、山男の使つた木臼が伝わつてゐることを『糠部五郡

小史』には録している。これで橡実どちらのみを搗いて食つていたという話は疑わしくとも、昔かつて彼らと交際のあつたことを信じていたことだけは推察せられる。

津軽の山人は角力を取つたというのみで餅をどうしたという話は残つてないが、秋田の方へ越えてみると、この二つの事件も結びついている。これも小田内通敏氏の談であるが、五城目ごじょうのめ近在の木樵き樵でかねて田舎相撲の心得ある某、或る日山で働いて木を負うて立とうとすると不意に山男が出てきて相撲を取ろうと言うて留めた。そこで荷を再び下に卸して力を角し一番はまず彼を投げたら強いと褒めてくれた。二番目にはわざと勝を譲つて還ろうとしたが、山男は少し待つてくれと言つて、更に二三人の仲間を連れてきて取らせたので、いずれも一番は勝ち一番は負けて別れてきた。それが縁になつてその後もおりおり出会ううちに、或る時いつ幾日にはその方の家へ遊びに行く。家の者を外へやり、餅を搗いて待つていよというのでその通りにして一斗ほどの餅を振舞うと、数人の山男が悦んで終日遊んで帰つた。それはよかつたがその後もおりおりやつてきて、酒を飲ませろの何のこと言つたために、ついにはその煩しさに堪えず、これを気に病んで久しく寝ているようなことになつた。村の人たちはこれを見て、山男などと附合つきあいをするのは、いずれ身のためには好くないことだと話し合つていたそうであるが、もしこの樵夫にせめて松任の餅屋ほどの気き

働きがあつたら、神經衰弱などにはならずすみそのものであつた。しかも因縁ばかり永く続いて人に信心のやや薄れた場合に、尋常一様の手段では元奉仕した神と別れることが難かつたということは、しばしば巫術の家について言い伝えられた話であつた。餅が化して白い小石になつたということと、石を火に焼いて怪物を攻めたということとは、ともに古くからある物語には相異ないが、山人の場合には二つの話が合体して、あまり毎晩餅ばかり食いにくるので、のちには閉口して白い丸石を圍炉裏に焼き知らぬ顔をして食わせて見ると、火炎を吹いて飛びだして去つたとか、またはその祟りで大水が出たのが年代記にあるところの白髭水だなどと、いずれも皆一旦の好意とその後の不本意な、絶縁とを伝説する地方が多いのは、或いは何かこの方面の信仰の次々の変化を暗示するものではないかと思う。

角力によつて山男と近づきになつたというのもまた偶然ではなかつたようである。今日中央部以西の日本において、やたらに人と相撲を取りたがるのは、川童と話がきまつている。土佐ではシバテンといつて芝天狗の略称かとも考へるが、拳動はほとんど川童と同じである。見たところ小児のごとくいかにも非力であるが、勝つと何遍でも今一番というので、うるさくてしかたがない。わざと負けてやるとキキと嬉しそうに鳴いて、また仲間

をうんと喚んでくる。何にしても厄介な相手で、彼らに挑まれた為に夜どおし角力を取
り、後には氣狂のようになつたという話が九州などには多い。それでいて必ずしも狐狸の
ごとく騙すつもりではないらしいのである。川童にせよ何にせよ、どうしてまたこんな趣
意不明なる交渉が始まつたというか。それには角力そのものの歴史を、今少しく遡つて考
える必要があるようである。朝廷の相撲召合は七月を例とし、古い年中行事の一つで
はあつたが、いわゆる唐制の模倣でもなければ、また皇室専属の儀式でもなかつたらしい。
おそらくは中央文化の或る段階において、民間の風習を採用して国技とせられたらしいこ
とは、力士の諸国から貢進せられたのを見てもわかる。すなわちいわゆる田舎相撲の方が
起原においては一つ前である。佐渡では今も村々を代表する選手があり名乗を世襲し、会
津の新宮權現でも、祭の日には村々の名を帶びた力士が出て、勝った村ではその年は仕合
せ好しと信ぜられたこと、歩射馬駆けなども同じであつた。すなわち祈願祈祷を専らとし
怪力を神授と考え、部落互いに技を競うほかに、常に運勢の強弱とも言うべきものを認め
ていたのは、背後に大いに頼むところの氏神、里の神の御威光があつたためで、しかも彼
らは信心の未熟によつてこれを傷けんことを畏れていたのである。時代がようやく進んで
全民族の宗教はいよいよ統一し、小区域の敵愾心などは意味もないものになつたが、そ

れでも古い名残は今だつて少しほ認められる。いわんや土地ごとに守り神を別にし、家門にはそれぞれの信仰があつた際である。豊後の日田の鬼太夫の系図が、連綿として数百年に及ぶがごとく力の筋を神の筋に帰し、これをもつて郷党的信望を繋ぎまたは集注せしめた者が、すなわち神人であつたものかと思われる。山男に名ざされ、また川童に角力を挑まされるということは、言いかえればその者が不思議を感じやすく、神秘の前に無我になりやすい性質を具えていたことを意味し、一方には鞍馬の奥僧正谷の貴公子のように、試煉をへてその天分の怪力を發揮しうるのみならず、他の方には目に見えぬ世界の紹介者として、また大いに神靈の道を社会に行うことえたはずであったが、不幸にして国はすでに事大主義、宣伝万能の世となつていたために、割拠したる小盆地の神々は单なる妖怪をもつて遇せられ、いまだ十分にその感化を実現せぬ前に有力なる外来の信仰に面してことごとくその光を失い、神が力を試みるというせつかくの旧方式も、結局無意味な擾乱に過ぎぬことになつたのである。

自分の見るところをもつてすれば、日本現在の村々の信仰には、根原に新旧の二系統があつた。朝家の法制にもかつて天神地祇ちぎを分たれたが、のちの宗像・賀茂・八幡・熊野・春日・住吉・諏訪・白山・鹿島・香取のごとく、有効なる組織をもつて神人を諸国に

派し、次々に新たなる若宮今宮を増設して行つたもののほかに、別に土着年久しく住民心をともにして固く旧来の信仰を保持しているものがあつた。莊園の創立は以前の郷里生活を一変し、領主はおおむね都人士の血と趣味とを嗣いでいたために、仏教の側援ある中央の大社を勧請する方に傾いていたらしく、次第に今まであるものを改造して、例え式内の古社がほとんどその名を喪失したよう、力めてこの統一の勢力に迎合したらしいが、これと同時に農民の保守趣味から、新たな社の祭式信仰をも自分の兼て持つものに引きつけた場合が少なくはなかつたらしい。また右の二つの系統が時としては二つの層をなし、必ずしも一郷の八幡宮、一村全体の熊野社の威望を傷けることなくして、屋敷や一つの垣内だけで、なお古くからの土地の神に、精誠をいたしていった場合も多かつた。頭屋の慣習と鍵取の制度、社家相続の方法等の中を尋ねると今とてもこの差別の微妙なる影響を見出すこと困難ならず、ことに永年にわたつて必ずしも官府の公認するところとならずとも、家から家へまたは母から娘へ、静かに流れていた信仰には、別に中断せられた証跡もない以上は、古いものが多く伝わると見てよろしい。それというのが信仰の基礎は生活の自然の要求にあつて、強いて日月星辰というがごとき莊麗にして物遠いところには心を寄せず四季朝夕の尋常の幸福を求め、最も平凡なる不安を避けようとしていた結

果、夙つとに祭を申し謹み仕えたのは、主としては山の神荒野の神、または海川の神を出でなかつたのである。導く人のやはり我わが仲間であつたことは、或いは時代に相應せぬ鄙ひなぶりを匡ただしえない結果になつたか知らぬが、そのかわりにはなつかしい我々の大昔が、たいして小賢こざかしい者の干渉を受けずに、ほぼうぶな形をもつて今日までも続いてきた。例えば稚わがくして山に紛まぎれ入つた姉弟が、そのころの紋もん様ようある四つ身よみの衣を着て、ふと親の家に還つてきたようなものである。これを笑うがごとき心なき人々は、少なくとも自分たちの同志者の中にはいない。

山人考 大正六年日本歴史地理学会大会講演手稿

一

私が八九年以前から、内々山人の問題を考えているということを、喜田博士が偶然に発見せられ、かかる晴れがましき会に出て、それを話しせよと仰せられる。一体これは物づきに近い事業であつて、もとより大正六年やそこいらに、成績を發表する所存をもつて、取掛かつたものではありませぬ故に、一時は甚だ当惑しかつ躊躇ちゆうちょをしました。しかし考えてみれば、これは同時に自分のごとき方法をもつて進んで、果して結局の解決をうるに足るや否やを、諸先生から批評していただくのに、最も好い機会でもあるので、なまじいに罷り出でたる次第でござります。

二

現在の我々日本国民が、数多の種族の混成だということは、じつはまだ完全には立証せられたわけでもないようありますが、私の研究はそれをすでに動かぬ通説となつたものとして、すなわちこれを発足点といたします。

わが大御門おおみかどの御祖先が、始めてこの島へ御到着なされた時には、国内にはすでに幾多の先住民がいたと伝えられます。古代の記録においては、これらを名づけて國くに神かみと申しておるのであります。その例は『日本書紀』の「神代卷」出雲の条に、「吾は是れ國やつかれこつ神やつかれ号なは脚摩乳あしなずち、我妻号わがつまのなは手摩乳云々てなずち」。また「高皇產靈神たかみむすびのかみは大物おおもの主神ぬしのかみに向ひ、汝汝若し国もつ神われを以て妻なおとせば、吾は猶汝疎うとき心有りとおもはん」と仰せられた。「神武紀」にはまた「臣やつかれこは是れ國いひかつ神な、名うすひこを珍彦うすひこと曰いふ」とあり、また同紀吉野の条には、「臣あは是れ國さるたひこつ神名いひかを井光さるたひこと為よす」とあります。『古事記』の方では御迎いに出た猿田彦さるたひこをも、また国さるたひこつ神さるたひこと記しております。

りょうりょうじんぎりょうじんぎりょう令の神祇わみようしよう令には天神地祇倭名鈔という名を存し、地祇は『倭名鈔』のころまで、クニツカミまたはクニツヤシロと訓よみますが、この二つは等しく神祇官において、常典によつて

これを祭ることになつていまして、奈良朝になりますと、新旧二種族の精神生活は、もはや名残なく融合したものと認められます。『延喜式』の神名帳には、国魂郡魂といふ類の、神名から明らかに国神に属すと知らるる神々を多く包容しておりながら、天神地祇の区別すらも、すでに存置してはいなかつたのであります。

しかも同じ『延喜式』の、中臣なかとみの祓はらえことば詞を見ますと、なお天津罪あまつづみと国津罪との区別を認めているのです。国津罪とはしからば何を意味するか。『古語拾遺』には国津罪は國中人民犯すところの罪とのみ申してあるが、それではこれに対する天津罪は、誰の犯すところなるかが不明となります。右二通りの犯罪を比較してみると、一方は串刺くしざし・重播きまき・畔放あはなぢというごとく、主として土地占有権の侵害であるに反して、他の一方は父子犯すといい、獸犯すというような無茶なもので明白に犯罪の性質に文野の差あることが認められ、すなわち後者は原住民、國つ神の犯すところであることが解ります。『日本紀』景行天皇四十年の詔に、「東夷ひがしのひなの中蝦夷うちえみしもつとこわ尤も強し。男女交り居り父子別ち無し云々」ともあります。いずれの時代にこの大祓の詞というものはできたか。とにかくにかかる後の世まで口伝えに残つていたのは、興味多き事実であります。

同じ祝詞の中には、また次のような語も見えます。曰く、「國中に荒振神等を、神問はしに問はしたまひ神掃ひに掃ひたまひて云々」。アラブルカミタチはまた暴神とも荒神とも書してあり、『古語拾遺』などには不順鬼神ともあります。これは多分右申す國つ神の中、ことに強硬に反抗せし部分を、古くからそういういたものと自分は考えます。

三

前九年・後三年の時代に至つて、ようやく完結を告げたところの東征西伐は、要するに國つ神同化の事業を意味していたと思う。東夷に比べると西国の先住民の方が、問題が小さかつたように見えますが、豊後・肥前・日向等の『風土記』に、土蜘蛛退治の記事の多いことは、常陸・陸奥等に譲りませず、更に『続日本紀』の文武天皇二年の条には太宰府に勅して豊後の大野、肥後の鞠智、肥前の基肄の三城を修繕せしめられた記事があります。これはもとより海※の御備えでないことは、地形を一見なされたらすぐにわかります。土蜘蛛にはまた近畿地方に住した者もありました。『摂津風土記』の残篇にも記事があり、大和にはもとより国櫟くずがおりました。国櫟と土蜘蛛とは同じもののように、『常陸風土記』

には記しています。

北東日本の開拓史をみますと、時代とともに次々に北に向つて経営の歩を進め。しかも夷民の末と認むべき者が、今なお南部津軽の両半島の端の方だけに残つてゐるために、通例世人の考え方では、すべての先住民は圧迫を受けて、北へ北へと引上げたように見ていますが、これは単純にそんな心持がするというのみで、学問上証明を遂げたものではないのです。少なくとも京畿以西に居住した異人等は、今ではただ漠然と、絶滅したようになされているがこれももとよりなんらの根拠なき推測であります。

種族の絶滅ということは、血の混淆ないしは口碑の忘却というような意味でならば、これを想像することができるが、実際に殺され尽しました死に絶えたということは「景行天皇紀」にいわゆる撃てばすなわち草に隠れ追えばすなわち山に入るというごとき状態にある人民には、とうていこれを想像することができないのです。『播磨風土記』を見ると、神前郡大川内、同じく湯川の二処に、異俗人三十許口ありとあつて、地名辞書にはこれらも今日の寺前・長谷二村の辺に考定しています。すなわち汽車が姫路に近づこうとして渡るところの、今日市川と称する川の上流であつて、じつはかく申す私などもその至つて近くの村に生れました。和銅・養老の交まで、この通り風俗を異にする人民が、その辺に

はいたのであります。

右にいう異俗人は、果していかなる種類に属するかは不明であるが、『新撰姓氏録』卷の五、右京皇別佐伯直の条を見ると、「此家の祖先とする御諸別命、成務天皇の御宇に播磨の此地方に於て、川上より菜の葉の流れ下るを見て民住むと知り、求め出し之を領して部民と為す云々」とあつて、或いはその御世から引続いて、同じ者の末であつたかも知れませぬ。

この佐伯部は、自ら蝦夷の俘の神宮に獻ぜられ、のちに播磨・安芸・伊予・讃岐および阿波の五国に配置せられた者の子孫なりと称したということで、すなわち「景行天皇紀」五十一年の記事とは符合しますが、これと『姓氏録』と二つの記録は、ともに佐伯氏の録進に拠られたものと見えますから、この一致をもつて強い証拠とするのは当りませぬ。おそらくは『釈日本紀』に引用する暦録の、佐祈毘（叫び）が佐伯と訛つたという言い伝えとともに、一箇の古い説明伝説を見るべきものであります。

サヘキの名称は、多分は障碍という意味で、日本語だらうと思います。佐伯の住したのは、もちろん上に掲げた五箇国には止りませぬが、果して彼らの言の通り、蝦夷と種を同じくするか否かは、これらの書物以外の材料を集めてのちに、平静に論証する必要が

あるのであります。

四

国郡の境を定めたもうということは、古くは成務天皇の条、また允恭天皇の御時^{おんとき}にもありました。これもまた『姓氏錄』に阪^{さか}合^{あい}部^べ朝^{あそん}臣^{おお}、仰^{おお}せを受けて境を定めたともあります。阪合は境のこと^で、阪^{さか}戸^と・阪^{さか}手^て・阪^{さか}梨^り（阪足）などとともに、中古以前からの郷の名・里の名にあります。今日の境の村と村との堺を割^{さか}するに反して、昔は山地と平野との境、すなわち国つ神の領土と、天^{あま}つ神の領土との、境を定めることを意味したかと思います。高野山の弘法大師などが、獵人の手から靈山の地を乞^こい受けたなどという昔話は、恐らくはこの事情を反映するものであろうと考えます。古い伽藍^{がらん}の地主神^{じぬしがみ}が、獵人の形で案内をせられ、また留まつて守護したもうという縁起^{えんぎ}は、高野だけでは決してないのであります。

「天武天皇紀」の吉野行幸の条に、^{かりびと}者^{二者}二十余人^{云々}、または^{そのひととなはなはだ}者之首などとあるのは、國櫟^{くづく}のことでありましょう。國櫟は「応神紀」に、其^{その}為^{ひと}人^{甚淳朴}也などともあります。

て、佐伯とは本来同じ種族でないようと思われます。『北山抄』『江次第』の時代を経て、それよりもまた遙か後代まで名目を存していた、新春朝廷の国柄の奏は、最初は實際この者が山を出でて来り仕え、御贊みあえを献じたのに始まるのであります。『延喜式』の宮内式には、諸の節会の時、国柄十二人笛工五人、合せて十七人を定としたとあります。古注には笛工の中の二人のみが、山城綴喜郡つなぎにありとあります故に、他の十五人は年々現実に、もとは吉野の奥から召されたものであります。『延喜式』のころまでは如何かと思いますが、現に神龜三年には、召出されたという記録が残っているのであります。また平野神社の四座御祭、園神三座などに、出でて仕えた山人という者も、元は同じく大和の国柄であつたろうと思います。山人が庭火の役を勤めたことは、『江次第』にも見えている。祭の折に賢木さかきを執つて神人に渡す役を、元は山人が仕え申したということは、もつとも注意を要する点かと心得ます。

ワキモコガアナシノ山ノ山人ト人モ見ルカニ山カツラセヨ

これは後代の神樂歌かぐらうたで、衛士えいしが昔の山人の役を勤めるようになつてから、用いられたものと思います。ワキモコガはマキムクノの訛り、纏向穴師まきむくのあなしは三輪の東に峙つ高山で、大和北部の平野に近く、多分は朝家の思おぼしめし召もとづに基いて、この山にも一時国櫻人の住んで

いたのは、御式典に出仕する便宜のためかと察しられます。

しからば何が故に右のごとき嚴重の御祭に、山人ごときが出て仕えることであつたか。これはむつかしい問題で、同時にまた山人史の研究の、重要な鍵かぎでもあるように自分のみは感じている。山人の参列はただの朝廷の体裁装飾でなく、或いは山から神靈を御降し申すために、欠くべからざる方式ではなかつたか。神樂歌の穴師の山は、もちろんのちに普通の人を代用してから、山かずらをさせて山人と見ようという点に、新たな興味を生じたものですが、『古今集』にはまた大歌所おおうたちの執り物とものの歌としてあつて、山人の手に持つ櫛さかきの枝に、何か信仰上の意味がありそうに見えるのであります。

五

山人という語は、この通り起原の年久しいものであります。自分の推測としては、上古史上の国津くにつ神かみが末二つに分れ、大半は里に下つて常民に混同し、残りは山に入りまたは山に留まつて、山人と呼ばれたと見るのでですが、後世に至つては次第にこの名称を、用いる者がなくなつて、かえつて仙という字をヤマビトと訓よませてゐるのであります。

自分が近世いうところの山男山女・山童山姫・山丈山姥などを総括して、かりに山人と申しておるのは必ずしも無理な断定からではありませぬ。単に便宜上この古語を復活して使つて見たまでであります。昔の山人の中で、威力に強いられ乃至は下され物を慕うて、遙に京へ出てきた者は、もちろん少数であつたでしよう。しからばその残りの旧弊な多数は、ゆくゆくいかに成り行いたであろうか。これからがじつは私一人の、考えて見ようとした問題がありました。

自分はまず第一に、中世の鬼の話に注意をしてみました。オニは鬼の漢字を充てたのはずいぶん古いことであります。その結果支那から入つた陰陽道の思想がこれと合体して、『今昔物語』の中の多くの鬼などは、人の形を^{そな}見えたり見えなかつたり、孤立独往して種々の奇^き怪^{かい}を演じ、時としては板戸に化けたり、油^{あぶら}壺^{つぼ}になつたりして人を害するを本業としたかの観がありますが、終始この鬼とは併行して、別に一派の山中の鬼があつて、往々にして勇将猛士に退治せられております。齊明天皇の七年八月に、筑前朝倉山の崖^{がけ}の上に踞^{うずく}まつて、大きな笠を着て顎^{あご}を手で支えて、天子の御葬儀を俯瞰^{ふかん}していたという鬼などは、この系統の鬼の中の最も古い一つである。酒顎童子にせよ、鈴鹿山の鬼にせよ、悪路王・大竹丸・赤頭にせよいずれも武力の討伐を必要としております。その他吉備津の

塵輪も三穂太郎も、鬼とはいひながらじつは人間の最も獰猛なるものに近く、護符や修験者の呪文だけでは、煙のごとく消えてしまいそうにもない鬼がありました。

また鬼という者がことごとく、人を食い殺すを常習とするような兇惡な者のみならば、決して発生しなかつたろうと思う言い伝えは、自ら鬼の子孫と称する者の、諸国に居住したことである。その一例は九州の日田附近にいた大蔵氏、系図を見ると代々鬼太夫などと名乗り、しばしば公の相撲の最手に召されました。この家は帰化人の末と申しています。次には京都に近い八瀬の里の住民、俗にゲラなどと呼ばれた人々です。このことについては前に小さな論文を公表しておきました。二三の顯著なる異俗があつて、誇りとして近年までこれを保持していました。黒川道祐などはこれを山鬼の末と書いています。山鬼は地方によつて山爺のことをそつもいい眼一つ足一つだなどといつた者もあります。一方ではまた山鬼護法と連称して、靈山の守護に任ずる活神のごとくにも信じました。安芸の宮島の山鬼は、おおよそ我々のよくいう天狗と、する事が似ていました。秋田太平山の三吉権現も、また奥山の半僧坊や秋葉山の三尺坊の類で、地方に多くの敬信者を持つてゐるが、やはりまた山鬼という語の音から出た名だらうという説があります。

それよりも今一段と顕著なる実例は、大和吉野の大峯山下の五鬼であります。洞川と

いう谷底の村に、今では五鬼何という苗字の家が五軒あり、いわゆる山上参りの先達職を世襲し聖護院の法親王御登山の案内役をもつて、一代の眉目としておりました。吉野の下市の町近くには、善鬼垣内という地名もあつて、この地に限らず五鬼の出張が方々にありました。諸国の山伏の家の口碑には、五流併立を説くことがほとんと普通になつています。すなわち五鬼は五人の山伏の家であろうと思うにかかわらず、前鬼後鬼とも書いて役の行者（えんぎょうじや）の二人の侍者の子孫といい、従つてまた御善鬼様などと称して、これを崇敬した地方もありました。

善鬼は五鬼の始祖のことで、五鬼のほかに別に団体があつたわけではないらしく、古くは今の五鬼の家を前鬼というのが普通でありました。その前鬼が下界と交際を始めたのは、戦国のころからだと申します。その時代までは彼らにも通力があつたのを、浮世の少女と縁組をしたばかりに、のちにはただの人間になつたという者もありますが、実際にはごく近代になるまで、一夜の中に二十里三十里の山を往復したり、くれると言つたら一畠の茄子（なす）をみな持つて行つたり、なお普通人を威服するに十分なる、力を持つ者のごとく評判せられておりました。

とにかくに彼らが平地の村から、移住した者の末ではないことは、自他ともに認めてい

るのです。これと大昔の山人との関係は不明ながら、山の信仰には深い根を持つています。そこでこの意味において、今一応考えてみる必要があると思うのは、相州箱根・三州鳳来寺、近江の伊吹山・上州の榛名山、出羽の羽黒・紀州の熊野、さては加賀の白山等に伝わる開山の仙人の事蹟であります。白山の泰澄大師たいちょうだいしなどは、奈良の仏法とは系統が別であるそうで、近ごろ前田慧雲師はこれを南洋系の仏教と申されました。自分はいまだその根拠のいずれにあるかを知らぬのであります。とにかくに今ある山伏道も、溯さかのぼつて聖宝僧正以前になりますと、教義も作法もともに甚だしく不明になり、ことに始祖えんのといふ役おづのに至つては、これを仏教の教徒と認めることすら決して容易ではないのです。仙術すなわち山人の道と名づくるものが、別に存在していたという推測も、なお同様に成立つだけの余地があるのであります。

六

土佐では寛永の十九年に、高知の城内に異人こうじんが出現したのを、これ山みことという者だといつて、山中に送り還した話があります。ミコは神に仕える女性もしくは童子どうじの名で、山

人をそう呼んだことの当否は別として、少なくとも当時なおこの地方には、彼らと山神とのなんらかの関係を、認めていた者のあつたという証拠にはなります。山の神の信仰も維新以後の神祇官系統の学説に基づき、名目と解釈の上に大なる変化を受けたことは、あたかも陰陽道が入つて才ニが漢土の鬼になつたのと似ております。今日では山神社の祭神は、おおやまつみのみこと 大山祇命このはなさくやひめ かその御娘の木花開耶姫このはなさくやひめ と、報告せられておらぬものがないというありますですが、これを各地の実際の信仰に照してみると、なんとしてもそれを古来の言い伝えとはみられぬのであります。

村に住む者が山神を祀り始めた動機は、近世には鉱山の繁栄を願うもの、或いはまた狩猟のためというのもあります、大多数は採樵さいしょう と開墾かいしん の障礙なきを禱るもので、すなわち山の神に木を乞う祭、地を乞う祭を行うのが、これらの社の最初の目的であります。そうしてその祭を怠つた制裁は何かというと、怪我けが をしたり発狂したり死んだり、かなり怖ろしい神罰があります。東北地方には往々にして路ほどり の畔に、山神と刻んだ大きな石塔が立つてゐる。建立の年月日人の名なども彫つてありますが、如何して立てたかと聴くと、必ずその場所に何か不思議があつて、臨時の祭をした記念なること、あたかも馬が急死するとの場所において供養を営み、馬頭觀音ばとうかんのん もしくは庚申塔こうしんとうなどを立てるのと同じく、

しかも何の不思議かと問えば、たいていは山の神に不意に行逢うた、怖ろしいので氣絶をしたという類で、その姿はまぼろしにもせよ、常に裸の背の高い、色の赭あかい眼の光の鋭い、ほぼ我々が想像する山人に近く、また一方ではこれを山男ともいつてゐるのであります。

天狗てんぐを山人と称したことは、近世二三の書物に見えます。或は山人を天狗と思つたといふ方が正しいのかも知れぬ。天狗の鼻を必ず高く、手には必ず羽扇を持たせることにしたのは、近世のしかも画道の約束みたようなもので、『太平記』以前のいろいろの物語には、ずいぶん盛んにこれを説いてありますが、さほど鼻のことを注意しませぬ。仏法の解説ではこれを魔障とし善惡二元の対立を認めた古宗教の面影を伝えてゐるにもかかわらず、一方には天狗の容貌服装のみならず、その習性感情から行動の末までが、仏法の一派と認めている修驗しゅげん・山伏やまぶしとよく類似し、後者もまたこれを承認して、時としてはその道の祖師であり守護神でもあるかのごとく、崇敬しかつ依頼する風のあつたことは、何か隠れたる仔細のあることでなければなりませぬ。恐らくは近世全く変化してしまつた山の神の信仰に、元は山人も山伏も、ともに或る程度までは参与していたのを、平地の宗教がだんだんにこれを無視しまたは忘却して行つたものと思つております。

今となつてはわずかに残る民間下層のいわゆる迷信によつて、切れ切れの事実の中から

昔の実情を尋ねて見るのほかはないのであります。一つの例をあげてみますれば、山中には往々魔所と名づくる場処があります。京都近くにもいくつかありました。入つて行くといろいろの奇怪があるように伝えられ、従つて天狗の住家か、集会所のごとく人が考えました。その奇怪というのは何かといふと、第一には天狗礫^{すみか}、どこからともなく石が飛んでくる。ただし通例は中つて人を傷^{あた}けることがない。第二には天狗倒し、非常な大木をゴツシングツシンと挽き研^{ひき}る音が聴え、ほどなくえらい響を立てて地に倒れる。しかも後に行つて見ても、一本も新たに伐^きった株などはなく、もちろん倒れた木などもない。第三には天狗笑い、人数ならば十人十五人が一度に大笑いをする声が、不意に閑寂の林の中から聴える。害意はなくとも人の胆^{きも}を寒くする力は、かえつて前二者よりも強かつた。その他にやや遠くから実験したものには笛太鼓^{ふえたいこ}の囁^{はや}しの音があり、また喬木^{きょうぼく}の梢の燈の影などもあつて、じつはその作者を天狗とする根拠は確実でないのですが、天狗でなければ誰がするかといふ年来の速断と、天狗ならばしかねないという遺伝的類推法をもつて、別に有力なる反対者もなしに、のちにはこうして名称にさえなつたのであります。

しかも必ずしも魔所といわず、また有名な老木などのない地にも、やはり同様の奇怪はおりおりあつて、或る者は天狗以外の力としてこれを説明しようとしました。例えば不思

議の石打ちは、久しく江戸の市中にさえこれを伝え、市外池袋の村民を雇入れると、氏神が惜んでこの変を示すなどともいいました。また伐木坊きりきぼうという怪物が山中に住み、毎々大木を伐倒す音をさせて、人を驚かすという地方もあり、狸たぬきが化けてこの悪戯をするという者もありました。深夜にいろいろの物音がきこえて、所在を尋ねると転々するというのは、広島で昔評判したバタバタの怪、または東京でも七不思議の一つに算えた本所の馬鹿ばか囃子ばやしの類です。単に一人が聴いたというのなら、おまえはどうかしていると笑うところで、現に二人三人の者が一所にいて、あれ聴けといつて顔を見合せる類のいわゆるアリュシナシオン・コレクチーブであるために、迷信もまた社会化したのであります。

私の住む牛込の高台にも、やはり頻々ひんびんと深夜の囃子の音があると申しました。東京のはテケテンという太鼓だけですが、加賀の金沢では笛が入ると、泉鏡花君は申されました。遠州の秋葉街道で聴きましたのは、この天狗の御膝元おひざもとにいながらこれを狸の神楽と称し現に狸の演奏しているのを見たとさえいう人がいました。近世いい始めたことと思いますが狸は最も物真似に長ずっと信じられ、ひとり古風な腹鼓はらづつみのみにあらず、汽車が開通すれば汽車の音、小学校のできた当座は学校の騒ぎ、酒屋が建てば杜氏とじの歌の声などを、真夜中に再現させて我々の耳を驚かしています。しかもそれを狸のわざとする論拠は、み

ながそう信ずるという事実より以上に、一つも有力なものはなかつたのです。

これらの現象の心理学的説明はおそらくさして困難なものでありますまい。常は聴かれぬ非常に印象の深い音響の組合せが、時過ぎて一定の条件のもとに鮮明に再現するのを、その時また聴いたように感じたものかも知れず、社会が単純で人の素養に定まつた型があり、外から攬乱こうらんする力の加わらぬ場合には、多数が一度に同じ感動を受けたとしても少しもさしつかえはないのでありますが、問題はただその幻覚の種類、これを実験し始めた時と場処、また名づけて天狗の何々と称するに至つた事情であります。山に入ればしばしば脅かされ、そうでないまでもあらかじめ打合せをせずして、山の人の境を侵すときに、我と感ずる不安のごときものと、山にいる人の方かぶが山の神に親しく、農民はいつまでも外客だという考え方とが、永く眞価以上に山人を買い被つていた、結果ではないかと思ひます。

七

そこで最終に自分の意見を申しますと、山人すなわち日本の先住民は、もはや絶滅したという通説には、私もたいていは同意してよいと思つておりますが、彼らを我々のいう絶

滅に導いた道筋についてのみ、若干の異なる見解を抱くのであります。私の想像する道筋は六筋、その一は帰順朝貢に伴なう編貫であります。最も堂々たる同化であります。その二は討死うちじに、その三は自然の子孫断絶であります。その四は信仰界を通つて、かえつて新來の百姓を征服し、好条件をもつてゆくゆく彼らと併合したもの、第五は永い歳月の間に、人知れず土着しかつ混淆こんこうしたもの、数においてはこれが一番に多いかと思います。

こういう風に列記してみると、以上の五つのいずれにも入らない差引残さしひきざん、すなわち第六種の旧状保持者、というよりも次第に退化して、今なお山中を漂泊しつつあつた者が、少なくとも或る時代までは、必ずいたわけだということが、推定せられるのであります。

ところがこの第六種の状態にある山人の消息は、きわめて不確実であるとは申せ、つい最近になるまで各地独立して、ずいぶん数多く伝えられておりました。それは隠者か仙人かであろう。いや妖怪か佛々かまたは駄法螺だぱらかであろうと、勝手な批評をして済むかも知れぬが、事例は今少しく実着でかつ数多く、またそのようにまでして否認をする必要もなくかつたのであります。

山中ことに漂泊の生存が最も不可能に思われるのは火食の一点であります。一旦その便宜を解していた者が、これを抛棄ほうきしたということはありえぬようと思われますがとにかく

に孤独なる山人には火を利用した形跡なく、しかも山中には虫魚鳥小獸のほかに草木の実と若葉と根、または菌類などが多く、生で食っていたという話はたくさんに伝えられます。木挽・炭焼の小屋に尋ねてきて、黙つて火にあたつていたという話もあれば、川蟹を持つてきて焼いて食つたなどとも伝えます。塩はどうするかという疑いのごときは疑いにはなりませぬ。平地の人のごとく多量に消費してはおられぬが、日本では山中に塩分を含む泉至つて多く、また食物の中にも塩氣の不足を補うべきものがある。また永年の習性でその需要は著しく制限することができます。吉野の奥で山に遁げこんだ平地人が、山小屋に塩を乞いにきた。一握みの塩を悦んで受けてこれだけあれば何年とかは大丈夫といった話が、『羈旅漫録』かに見えておりました。

それから衣服ですが、これも獸皮でも樹の皮でも、用は足りたろうと思うにかかわらず多くの山人は裸であつたといわれております。恐らくは裸体であるために人が注意することになつたのでしょうか、わが国の温度には古今の変は少なかろうと思うのに、国民の衣服の近世甚だしく厚くるしくなつたのを考えますと、馴らせば無しにも起臥しえられてこの点はあまり顧慮しなかつたものと見えます。不思議なことには山人の草鞋と称して、非常に大形のものを山中で見かけるという話がありますが、それは实用よりも何か第

二の目的、すなわち南日本の或る海岸の村で、今でも大草履おおぞうりを魔除まよけとするごとく、彼ら独特的の畏嚇法いかくほうをもつてなるべく平地人を廻避した手段であつたかも知れませぬ。

交通の問題についても少々考えてみました。日本は山国で北は津軽の半島の果から南は長門の小串の尖まで少しも平野に下り立たずして往来することができるのであります。が、彼らは必要以上に遠くへ走るような余裕も空想もなかつたと見えて、居るという地方にのみいつでもおりました。全国の山地で山人の話の特に多いところが、近世では十数箇處あつて、互いに隔絶してその間の聯絡れんらくは絶えていたかと思われ、気をつけてみると少しづつ、氣風習性のごときものが違つていきました。今日知れている限りの山人生息地は、北では陸羽の境の山であります。ことに日本海へ近よつた山群であります。それから北上川左岸の連山、次には只見川ただみがわの上流から越後秋山へかけての一帯、東海岸は大井川の奥、次は例の吉野から熊野の山、中国では大山さん山彙などが列挙しえられます。飛騨は山国でしながら、不思議に今日はこの話が少なく、青年の愛好する北アルプスから立山方面、黒部川の入りなども今はもう安全地帯のようであります。これに反して小さな離島はなれじまでも、屋久島はいまなお痕跡があり、四国にも九州にももちろん住むと伝えられます。四国では剣山の周囲ことに土佐の側には無数の話があり、九州は東岸にやや偏して、九重山くじゅうさん以南霧

島山以北一帯に、最も無邪氣なる山人が住むといわれております。海が彼らの交通を遮断するには当然ですが、なお少しほは水を泳ぐこともできました。山中にはもとより東西の通路があつて、老功なる木樵・獵師は容易にこれを認めて遭遇を避けました。夜分には彼らもずいぶん里近くを通りました。その方が路みちが樂であつたことは、彼らとても変りはないはずです。鉄道の始めて通じた時はさぞ驚いたろうと思ひますが、今では隧道トンネルなども利用しているかも知れませぬ。火と物音にさえ警戒しておれば、平地の方から気がつく虞おそれはないからであります。

山男・山姥いちびが町の市日に、買物に出るという話が方々にありました。果してそんな事があつたら、衣服風体なども目に立たぬように、済ましてただの田舎者の顔をするのだから、山人としては最も進んだ、すぐにも百姓に同化しうる部類で、いわば一種の土着見習生のごときものであります。それ以外には力つとめて人を避けるのがむしろ通例で、自分の方から来るというはよくよくの場合、すなわち單なる見物や食物のためではなかつたらしいのです。しかも人類としては一番強い内からの衝動、すなわち配偶者の欲しいという情は、往往にして異常の勇敢を促したかと思う事実があります。

もつとも山人の中にも女はあつて、族内の縁組も絶対に不可能ではなかつたが、人が少

なく年が違い、久しい孤独を忍ばねばならぬ際に、堪えかねて里に降つて若い男女を誘うたことも、稀ではなかつたようになります。神隠しと称する日本の社会の奇現象は、あまりにも数が多く、その中には明白に自身の氣の狂いから、何となく山に飛び込んだ者も少なくないのでですが、原因の明瞭^{めいりょう}になつたものはかつてないので、しかも多くは還つて来ず、一方には年を隔てて山中で行逢うたという話が、決して珍しくはないから、こういう推測が成立つのであります。世中^{よのなか}が開けてからは、かりに著しくその場合が減じたにしても、物憑き^{ものづき}物狂^{ものぐる}いがいつも引寄せられるように、山へ山へと入つて行く暗示には、千年以前からの潜んだ威圧が、なお働いているものとみることができます。

それをまた他の方面から立証するものは、山人の言語であります。彼らが物を言つたと
いう例は、ほんとないといつてよいのであるが、平地人のいわゆる日本語は、たいてい
の場合には山人に理解せられます。ずいぶんと込み入つた事柄でも、呑込^{のみこ}んでその通りに
したというのは、すなわち片親の方からその知識が、だんだんに注入せられている結果か
と思います。それでなければ米の飯をひどく欲しがりまた焚火^{たきび}を悦び、しばしば常人に対
して好意とまではなくとも、じつと目送したりするほどの、平和な態度をとつたという話
が解せられず、ことに頼まれて人を助け、市に出て物を交易するというだけの変化の原因

が想像しえられませぬ。多分は前代にあつても最初は同じ事情から、耕作の趣味を学んで一地に土着し、わずかずつ下流の人里と交通を試みているうちに、自他ともに差別の観念を忘失して、すなわち武陵桃源の発見とはなつたのであらうと思ひます。

これを要するに山人の絶滅とは、主としては在來の生活の特色のなくなることでありました。そうして山人の特色とは何であつたかといふと、一つには肌膚の色の赤いこと、二つには丈高たけたけく、ことに手足の長いことなどが、昔話の中に今も伝説せられます。諸国に数多き大人おおひとの足跡の話は、話となつて極端まで誇張せられ、加賀ではあの国を三足であるいたという大足跡もありますが、もとは長髓彦ながすねひこもしくは上州の八掬脛やつかはぎぐらいの、やや我々より大きいという話ではなかつたかと思われます。北ヨーロッパでは昔話の小人といふのが、先住異民族の記憶の断片と解せられていますが、日本はちょうどその反対で、現に東部の弘い地域にわたり、今もつて山人のことを大人と呼んでいる例があるのです。

私は他日この問題がいますこし綿密に学界から注意せられて、單に人類学上の新資料を供与するに止らず、日本人の文明史において、まだいかにしても説明しえない多くの事蹟がこの方面から次第に分つてくることを切望いたします。ことに我々の血の中に、若干の荒い山人の血を混じてゐるかも知れぬということは、我々にとつてはじつに無限の興味で

あります。

青空文庫情報

底本：「遠野物語 山の人生」 岩波文庫、岩波書店

1976（昭和51）年4月16日第1刷発行

2010（平成22）年3月5日第50刷発行

底本の親本：「定本柳田國男集 第四巻」 筑摩書房

1963（昭和38）年4月25日

初出：山の人生 「アサヒグラフ 第四巻第二号～第五巻第七号」 朝日新聞社

1925（大正14）年1月7日～8月12日発行

山人考「大正六年日本歴史地理学会大会講演手稿」

1917（大正6）年11月18日

入力・Nana ohbe

校正・川山隆

2013年4月13日作成

2016年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

山の人生

柳田国男

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>